

<神々の真相 1>

1：人類創世神話とシュメール

BC3800 年ごろ、突如として高度なシュメール文明が花開き、後の文明や世界中の神話の根源となった。そのシュメールから発掘された粘土板を解読したと言われているのが、パレスチナ生まれの考古学者ゼカリア・シッチンである。彼は世界を裏から牛耳る三百人委員会の配下であり、人類は人類を創造した神＝地球外知的生命体には逆らえないという意識を植え付けるためのプロパガンダである、という説もある。しかし、「ユダの福音書」による宇宙創造の秘密や、改竄される前の旧約原本である「死海文書」やいくつかの偽典・外典には、地球外知的生命体である「神々」と人類の交配などについての記述がある。そして、シュメール文明が開化した BC3800 年頃と、アダムのエデン追放（地上への降臨）を BC4000 頃と見なすことは、年代的に合っている。つまり、日本神話も含め、あらゆる宗教の根源もシュメールである可能性が極めて高い。

そこで、まずはシュメールの粘土板についてゼカリア・シッチンの解読概要を紹介し、それについて妥当性を考察する。（「人類を創成した宇宙人」、ゼカリア・シッチン著、徳間書店。）

(1) 人類創成神話概略

- ・ 44 万 5 千年前：エンキに導かれ、太陽系第 12 惑星ニビルよりアヌンナキが地球に降り立つ。
- ・ 36 万年前：金属を溶解し精錬するための冶金工場建設。
- ・ 30 万年前：厳しい鉱山労働に対するアヌンナキの反乱。エンキとニンフルサグによる、鉱山労働奴隷としての最初の人類創成。
- ・ 10 万年前：神々の子らと人間の娘の直接交配。
- ・ 7 万 5 千年前：最後の氷河期。
- ・ 4 万 9 千年前：ノアによる統治。
- ・ 1 万 4 千～1 万 3 千年前：大洪水。

シュメールの大神はアヌ（アン）であるが、それは太陽系第 12 惑星の王である。太陽系には 12 個も惑星は存在しないが、シュメール神話では太陽と月、冥王星も含め、全部で 12 の惑星と見なす。この第 12 惑星のことをニビルと言う。惑星ニビルは 3600 年周期で太陽系に進入する。ある時期、ニビルが太陽系に進入した際、ある惑星と衝突してできたのが地球と小惑星帯である。

ニビルの住人をアヌンナキ（労働の神々）と言う。最初に地球に降臨したのは、アヌの息子で科学技術者であるエンキが率いるグループであった。最初に着陸したのが海で、魚座の時代の始まりであった。故に、魚は神の象徴である。その後、エンキの異母兄弟であるエンリルが地球の総督として降臨した。地球降臨の目的は、金などの鉱物資源採取である。鉱山での労働は重労働だったので、「神々」の代わりとなる奴隷を創ることとした。アヌの娘で科学者であるニンフルサグとエンキにより、遺伝子工学によって創られたのが現在の人類の祖

アダム＝アダバである。アダムは“赤い土”や“人間”を意味するが、“血”も意味する。これは、人類の血と「神々」の血＝遺伝子が混ぜられたことを意味する。ニンフルサグはニンティとも呼ばれ、シュメール語の“ティ”は“生命”と“肋骨”の意味であるから、アダムの肋骨からイブが創られたことに対応する。（ニンフルサグは妊婦の語源か？）なお、“礼拝”として訳されている言葉 avod は“仕事”の意味であり、神を礼拝するのではなく、人類が奴隷のように働かされていたことを表す。

また、アヌンナキは人類の女性とも直接交わり、ハイブリッドを生み出した。“アヌンナキ”はシュメール語であるが、ヘブライ語では“ネフィリム”（降りた者たち、単数形はネフィル）と言い、聖書では（意図的かどうかは不明であるが）誤訳されて巨人族として登場する。

アダムなどのハイブリッドは、最初は生殖能力が無かった。（例えば、馬とロバの異種交配であるラバには生殖能力が無い。）生殖能力を与えたのがエンキであり、イブが「知恵の樹」の蛇に唆されて実を食べ、裸であることを知ったのは、エンキが生殖能力を与えたことに対応する。エンリルはこのことを良く思わなかった。人類が繁殖して「知恵」をつけ、いずれは自分たちを脅かす存在となるだろうと考えたからである。そのため、人類を「エデンの園」から追放した。エデンはシュメール語でエ・ディンであり、“正義の者の家”の意味である。

エンリルは細菌やウイルスで人類を滅ぼそうとしたが、ニビルの接近に伴って発生する大洪水で自然消滅させることとした。しかし、エンキが人類を手助けし、「ノアの箱舟」を造らせて助けたのである。

(2) 矛盾点、疑問点

以上がシュメールの人類創成神話概略である。普通なら、こんなことはあり得ないとして、議論にならないだろう。例えば、思いつくだけでも次のような矛盾点や疑問点が指摘される。

- ・宇宙飛行したり、ジグラット（ジググラト、ピラミッド）のような神殿を築く技術があるのなら、鉱山など容易に採掘できるはずであり、奴隷を必要とするほど、つらい労働をしていたことは矛盾する。
- ・天体の現象がよく神々として喩えられる。ここでも、地球外知的生命体などは地球に来ておらず、過去の太陽系に於ける大変動のことを言っているだけではないのか。
- ・ノアの時代到大洪水が起きたはずである。しかし、ノアによる統治は 4 万 9 千年前であり、大洪水は 1 万 3 千年前と 3 万 6 千年のギャップがある。ノアがそんなに長生きしたのか。聖書でのノアの年齢は 950 歳だから、完全に矛盾している。“ノア”という人物は、その時代の地球人類種の喩えであるならば、納得できなくはないが。

- ・ニビルは 3600 年周期で公転しているので、冥王星の 248 年と比較すると、とてつもなく遠い場所から飛来することになる。そのため、人間種が住めるような環境ではない。冥王星の位置から見ると、太陽は小さな点に過ぎない。1AU=1 億 5000 万 km=太陽と地球の距離であり、太陽から見て冥王星は 39.5AU の距離にある。なお、現在確認されている最も太陽系に近い恒星ケンタウルス座アルファ星は、太陽系から 4.4 光年=約 28 万 AU の距離にある。1 光年=9 兆 4600 億 km=6 万 3300AU である。
- ・選ばれた人間のみ天空のアヌの城へ行くことができ、エリアの昇天なども同じことと見なしている。ならば、他にも昇天したイエスやムハンマドも、同様なのか。
- ・シュメール以前に存在したと言われている、アトランティスやムーなどについての記述が一切無い。

このように、かなりの疑問点がある。しかし、人類の進化を見ると、次のような極めて重大な、理解不能な現象がある。

- ①高度な文明が突如として出現し、世界各地の神話が類似している。
- ②当時の文明レベルでは考えられないような物体が、いろいろな古代遺跡から発掘されている。これをオーパーツ（存在してはならないもの）と言う。
- ③ヒトとヒトの祖となった猿人の中には大きな進化的ギャップが見られ、これをミッシングリンクと言う。日本進化学会などでは、ヒトの形態は他の類人猿のそれと比べて、極めて速い進化を遂げていることについていろいろ議論されているが、未だ解答は得られていない。また、シカゴ大学のブルース・ローン教授は遺伝子解析により、ヒトの脳に関する遺伝子の進化は、他の生物種と比べて異常に速く進んだことを確認している。(Cell, 2004)

これらの現象に対して、すべて満足できるような辻褄の合う学説は無い。では、仮に何らかの地球外知的生命体がやって来て、人類と地球に影響を及ぼしたとすると、辻褄が合うように説明できないのか。

- ・高度な文明の突然の出現や共通の神話について (①②)

人類がある時点から急速に進化したとしても、突如として高度な数学や天文学が出現し、ジグラットを建設したりすることなど不可能である。しかし、地球外知的生命体が知恵を授けたり、協力すれば可能である。一般的に神は天にいとされ、天から降臨した。地球以外の生命体であれば、大気圏に突入して、空から飛来するしかない。地球人が何の関与も受けていないとすれば、神は恵みを与えてくれる大地と太陽、そして季節を表す天体であり、地母神と太陽、その他の天体信仰のみである。人間の形をした神は必要ではないし、各地の神

話も似ていないはずである。

また、世界各地の巨大遺跡や、空から見なければ解らないような遺跡は、地球外知的生命体が地上に“降臨”する際の目印と考えれば良いし、オーパーツに関しても、地球外知的生命体が「神々」として授けたとすれば、納得できる。

・人類の進化速度の異常な速さについて (③)

急速な進化が天体の変動による突然変異だとしたら、他の生物種も同じように進化の速度が速くならなければならないが、人間種だけである。仮に、「宇宙創造の意識」によって人間種のみ進化する運命にある（「神」の意思）から急速に進化したとしても、突如として高度な数学や天文学の学問体系が出現し、ジグザットを建設したりすることなど不可能である。シュメール文明とは、いわば、昨日まで猿だったのが、突然今日から高等数学の問題を解き始めた、と喻えられるほど、突如として出現した高度な文明であり、最初から法が整備され、数学、天文学などの高度な学問体系が完成されていた。

このように、何らかの地球外知的生命体が地球にやって来て、人類と地球に影響を及ぼしたと考えれば、それなりに辻褄が合うように説明できる。その目的は、自分たちが「神々」として振る舞っていることから、人類を隷属的存在として利用し、利用できるレベルにまで進化させたのであろう

仮に、人間種が存在する惑星が唯一地球だけだとしたら、その目的は何か。それこそ「神の意思」によるものとし、現状では説明のしようが無いのではないか。ならば、あらゆる不可解な現象はすべて「神の意思」となり、何でも神様のせいにしていけば良い。これは、現実からの逃避行であり、思考停止である。そんなことを言われても、信じられないものは信じられないと言うのなら、100年前の誰が現在の科学技術を予測し得たであろうか。

宇宙には数百万以上の銀河が存在し、惑星の数は計り知れないから、知的生命体が存在するのは地球だけであると考えの方が、よほど“科学的”“統計学的”にナンセンスである。現代の科学では、宇宙の年齢は 150 億年ほどと言われている。ならば、地球よりも進化が進んでいる星は、かなりの数に上るだろう。宇宙の年齢から見れば“誤差程度の数十万年”でさえ、知的生命体が出現してからの時間で見れば、文明が成熟するまでの十分な期間である。100 年前に誰が現在のエレクトロニクス時代を予測し、あるいは、誰が今から 100 年後の技術を予測し得るのか。たった 100 年でも、このような状態なのである。

また、次のような極めて重要な談話がある。日本人でキリスト教徒でもある皆川尚一氏が京都の籠神社を訪れた際、「多次元同時存在の法則」を発見した）海部光彦宮司と 3 時間に及ぶ対談で、「蛇と龍」について質問したそうである。この人はキリスト教徒であるから、蛇や龍は邪悪な存在としてしか認識できない。海部宮司は「龍には善い龍と悪い龍とがあります。善い龍は雨を降らせ、豊作をもたらし、霊験あらたかなので、籠神社でも龍をお祀りしています。これをお読みください」と言ってパンフレットを差し出し、「シュメールをご研究になることをお勧めします」と言われたそうである！

(「http://www.christ-ch.or.jp/4_topic/pdf/shrine.pdf#search= 皆川 尚一 籠神社」、神社に潜む謎の勢力 2005 年 4 月 30 日」参照。)

籠神社の宮司、しかも「多次元同時存在の法則」を発見した海部光彦宮司の発言であれば、見過ごすわけにはいかない。やはり、日本神話、そして聖書や世界中の神話のルーツはシュメールだったのである！従って、シュメールの神話は真剣に検討しなければならない。

更に、シュメールには現代文明の文字の基であると言われている楔形文字、60 進法を基本とした高度な数学、そのような数学や天文学に基づくジグザットの建設などがある他に、粘土板や円筒印章には蛇、宇宙服を着たような人物、放射線治療の様子、ロケットや宇宙船、「命の果物」と「命の水」を手にする鳥人間と「生命の樹」らしきものなどが描かれており、地球外知的生命体の関与を伺わせる。

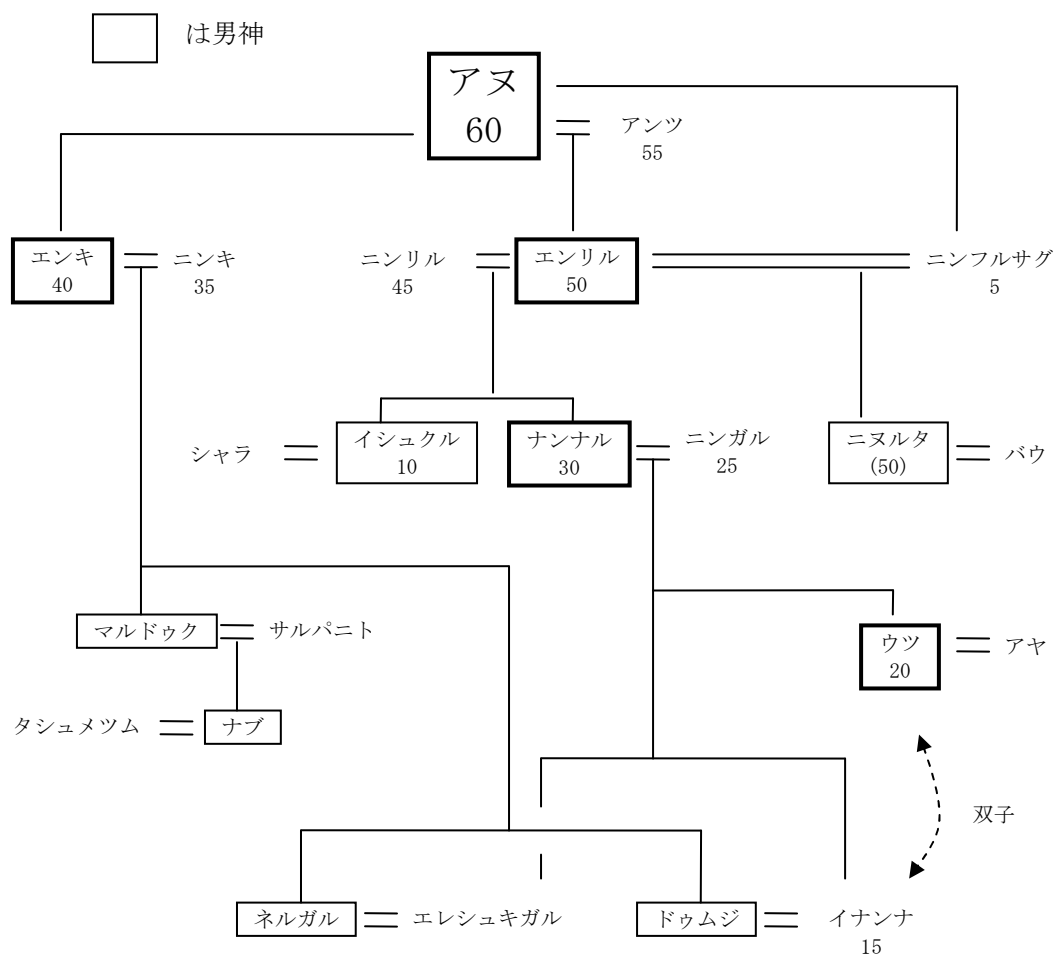
よって、地球外知的生命体が地球と人類に関与した、というシュメール神話が正しいと推測できる。このような話は信じられない、という人は、今まで自分が信じてきたのは“天動説”であり、これ以後の話は“地動説”であると思えば良い。

当初、シッチン著の「人類を創成した宇宙人」をまとめ、彼の説に対してそれぞれ妥当性を検討し、彼の説は大筋に於いて正しい、という結論に至った。すなわち、あらゆる宗教の原型はすべてシュメールにある。しかし、2008 年に彼の最新著書「〈地球の主〉エンキの失われた聖書～惑星ニビルから飛来せし神々の記録」(徳間書店)が刊行され、「神々」の星ニビルや人類創成、ピラミッド建造の真相、古代核戦争に至った経緯などが詳細に紹介されていた。この著書により、今までにまとめていた内容で疑問に思っていたこと、こじつけ的に推定しかできなかったことなど、極めて辻褄が合うように説明できることが判明した。

よって、「〈地球の主〉エンキの失われた聖書～惑星ニビルから飛来せし神々の記録」を軸とし、シュメールに封印された秘密、ひいては古代核戦争、エジプト文明、インダス文明、太古の超科学文明の存在可否や偶像崇拜、そして天照大神＝イエス・キリストの真相を検討する。

2：シュメールの「神々」の主要系図

本論に入る前に、シュメールの「神々」の主要系図を示す。「神々」と鍵括弧書きで記してあるのは、人類が思い描くような「神々」ではなく、実体を伴った地球外惑星の住人だからである。



シュメールの「神々」は、系図に示した中の通の 12 人である。アヌ、(アンツ)、エンリル、(ニンリル)、エンキ、(ニンキ)、ナンナル、(ニンガル)、ウツ、(イナンナ)、イシュクル、(ニンフルサグ) がある。() は女神である。これは、ニビルを加えた太陽系の 12 の天体に相当し、イスラエルの十二支族、そしてイエスの 12 人の使徒の原型である。また、ニビルから数えて地球は 7 番目の星であり、エンリルがこれに相当する。これが、神聖数字 7 の原型である。7 は他にも、「生命の樹」の中高世界以下にあるセフィロトが 7 個であり、これは天上ではなく地上での叡智をすべて知ることにも相当する。更に、これとは別に、各神には系図に示したような数字が割り当てられている。これは、王位継承順位である。シュメールは 60 進法であるから、60 が 1 つの区切りを表す。60 に近いほど、王位継承順位が高い。

・アヌ : 60、エンリル : 50、エンキ : 40、ナンナル : 30、ウツ : 20。

聖書に於ける様々な数字、例えば、ヘブライの民を 40 年間荒野で彷徨させたのはエンキであり、契約の箱アークが移動しなかった年数が最長で 20 年というのは、太陽神ウツに由来しているということを暗示している。

これらシュメールの「神々」は、メソポタミアやエジプトで偶像崇拜やサタン崇拜と混同され、更にインダス、ギリシャ、ローマへと伝わり、本当の善悪の関係など、わけが解らなくなってしまった。その原因の詳細は後述するが、マルドゥクによる神話乗っ取りである。

シュメールでの大神はアヌ、その 2 人の息子エンキとエンリルで「創造神」を形成する。これが「原初三柱の神々」の原型である。アヌは特に人類に手を出したりするということではなく、「神々の長」で「神々の会議」を統括する者である。実質はエンキとエンリルが担当した。

3：エンキ神の御言葉一序

「エンキ神の御言葉」は 14 のタブレット（粘土板古文書）から成る、いわば「地球外生命体から地球人に遺された聖書（レコード）」である。

「神々」による核戦争前夜、禁断の兵器を使うことに反対したのは、人類の生みの親で蛇神として象徴されるエンキただ 1 人だった。それ故、エンキにとって、破壊者となってしまった地球外生命体＝「神々」の冒険談が、どこで間違ってしまったのかを、罹災した生き残りに説明するのは重要なことだった。未来が予見できるよう、過去の話伝えることができる適任者は、最初に地球にやって来て、すべてを目撃したエンキ以外に誰が居ようか。すべてを語る最善の策は、エンキ自身による一人称で伝えることだった。

様々な断片素材をシッチン氏が整理して、エンキ、すなわち 1 人の地球外生命体である「神」による自叙伝的回想録と、洞察に満ちた預言が再現された。

過去と向き合うことで、エンキ自身が未来を理解した。「神々」は自分たちの宿命（ナム・タル：自由選択に左右される事の成り行きで変更可能）を操ることができると考えたが、実は、成り行きを決定したのは運命（ナム：変更不可能な予め決定された成り行き）であったという認識が変わった。つまり、最初の事柄（ α ）は、最後の事柄（ ω ）となる。エンキが口述した出来事の記録は、こうして預言の礎となり、過去は未来となる。これこそが、聖書に於ける両義預言（1 つの記述が複合する別の時代の意味を含み、互いに絡み合いながら過去と未来を同時に表す高等預言、＜聖書について＞参照）である。

エンキの言葉は、エンキの僕、エリドゥ（地球に於ける最初の入植地）の男、熟練筆記者であるエンドゥブサルが筆記したと証言されている。その証言概要を記して、序とする。

・大いなる惨禍から 7 番目の年、2 番目の月、10 番目の日に、私は全能で情け深く、人類への慈愛に満ちた製作者、偉大なる神、我が主エンキに召しだされた。

＊日本の建国記念日が、2月11日であるのとの関係がありそう。

・私は荒れ野にさ迷い出た。空を見上げると、南方から旋風が現れた。私は地面にひれ伏した。見ると、2人の神の使者が立っており、こう語りかけた。「汝は偉大なる神エンキによって召しだされた。我らは汝をマガンの地（古代エジプト）にある主の隠れ家まで運んで行くために来た」彼らは私の手を取り、あっという間に主エンキの下に連れて行った。

私の名が呼ばれたが、誰なのか見えなかった。「エンドゥブサルよ、余は汝を我が筆記者に選んだ。余の言葉を碑板に記すのだ」とすると、囲いの一面に光が浮かび上がった。そこには、筆記者の机と椅子があった。

＊十戒を記すためにモーゼが主に召された場面の原型。

・声が再び話しかけた。「余は大いなる惨禍によって人類に降りかかったことに對して、ひどく心を痛めておる。真実の成り行きを記録し、「神々」と人間に、余が潔白であることを知らしめるのが願いである。今回の、7年前のそれは起こる必要が無く、防げたのかもしれない。余はそれを防ぐためにできる限りのことをしたが、しくじったのだ。これは宿命なのか、運命なのか。将来、その審判が下されるであろう。終わりの日に、審判の日が訪れるからである。その日、地球は揺れ、川は流れを変えるだろう。そして、真昼でも暗闇となり、夜には空に炎が上がる。天空の神が舞い戻る日となるのだ。誰が生き残って誰が滅びるのか、誰が祝福され誰が罰せられるのか、「神々」も人間も同じように、その日、それを知ることとなる。何が起きるかは、何が起きたかによって、決定されるからである。運命付けられたものは、周期的に繰り返されるであろう。そして、生じた野望によってのみ宿命付けられたものには、審判が下されるであろう。余が‘始まり’‘先の時代（ニビルでの出来事）’‘昔の時代（地球到来から大洪水まで）’についての事の顛末を話すのは、こうした理由からである。過去には、未来が隠されているからである」

＊最後の審判の場面と、イエス降臨の場面の原型。そして、両義預言の意味。「運命付けられたものは、周期的に繰り返される」ことが、イエスに関する予型となっている。

・40日40夜に亘って余が話し汝が記す。40は「神々」に於ける余の聖なる数だからである。40日40夜、汝は飲み食いをすべからず。この1回だけのパンと水を食すれば、この期間中、汝の命は維持されるであろう。

＊聖書に於ける40という数字の真相開示。エンキの王位継承数字。

・石板が見え、空のように真っ青です。そして、尖筆はどんな葦とも違い、先端が鷲の爪のようです。「これらは汝が余の言葉を刻む石板である。余の意向により、最上の瑠璃から切り出し、それぞれ両面を滑らかにしてある。そして、

尖筆は「神」の手作りであり、柄はエレクトラム（金と銀の合金）で、先端は神聖な水晶でできている。それで彫れば、柔らかい粘土に印をつけるのと同じぐらい楽であろう。各々の石板の表面に 2 段ずつ、裏面に 2 段ずつ刻むのだ。余の言葉と発言から逸脱してはならぬ」それから間があり、私が 1 枚の石板に触れると、その表面は滑らかな肌のように柔らかかった。神聖な尖筆を手に取ると、羽のような感触がした。

＊モーゼの十戒の原型。ここでの石板は真っ青な瑠璃、すなわちラピスラズリである。＜日本の真相＞で考察したように、十戒石板は“光り輝く”を意味するギリシャ語マーブル＝大理石と考えるのが妥当であり、天照大神の八咫鏡に相応しいだろう。つまり、この石板はあくまでもエンキが語った自叙伝的回想録であり、十戒とは別物であると言える。

それにしても、石板に触れると柔らかな肌のようにであり、尖筆は羽のような感触とは、どういうことか。本来、カリカリ刻まなければならないが、エンキが用意したものは技術の粋を集めて作ったものなので、如何にも刻むことが容易であることの喩えか。

また、「余の言葉と発言から逸脱してはならぬ」というのは、ヨハネ黙示録に書かれている、次の言葉の原型である。

“これに付け加える者があれば、神はこの書物に書いてある災いをその者に加えられる。また、この預言の書の言葉から何か取り去る者があれば、神は、この書物に書いてある「生命の樹」と聖なる都から、その者が受ける分を取り除かれる。”

・偉大なる神エンキが話し始め、主の声は時に力強く、時には苦痛と苦悶が滲んだ。1 枚の石板の両面が刻まれると、別の石板に続けた。そして、最後の御言葉を終えられると、偉大なる神はしばし思案し、私には大きな溜息が聞こえた。それから主は言われた。「ここでの汝の務めは完了した。今度はもう 1 枚の石板を取り、その上に汝自身の証言を記し、その最後に証人として汝の印を押し、その石板と他の石板とを一緒に神の収納箱に納めよ。指定された時に、選ばれた者たちがこちらへやって来て、この収納箱と石板を見つけ、余が汝に後述したすべてを学ぶこととなるだろう。そして、‘始まり’‘先の時代’‘昔の時代’‘大いなる惨禍’についての真実の記述は、これより先、『主エンキの御言葉』として知られることになるだろう。それは『過去を目撃の書』であり、『未来を預言する書』となる。未来は過去にあり、最初の事柄もまた、最後の事柄となるからである」それから声が途切れ、私は石板を取り、一枚一枚正しい順序で収納箱に入れた。収納箱はアカシアの木でできており、外側に金が散りばめられていた。それから、我が主の声が言った。「さあ、収納箱の蓋を閉め、鍵をかけよ」私は指示通りにした。

＊十戒を契約の箱アークに納める場面の原型。聖書ではアークを決められた大きさに製作する場面があるが、ここでは既に用意されている。しかも、石板を

納めた後、鍵を閉めている。やはり、これは「主エンキの御言葉」であり、モーゼの十戒とは別物である。

・我が主エンキは言われた。「汝は偉大なる神と話した。汝は余を見てはいないが、汝は余に謁見していたのだ。従って、汝は祝福された。人々への、余の代弁者と汝はなるべし。汝は彼らが正しくあるよう戒めよ。そして、汝は彼らを慰めよ。…だが、終わりの日、運命が勝利を得るだろう。そして未来は、過去についての余の言葉の中に預言されているのだ。それらをすべて、汝は人々に伝えるのだ。お告げは天に現れる。そして、発すべき言葉は汝の夢と幻影に現れるであろう。そして、汝の後には、他の選ばれし預言者が続く。そして、ついに『新たな地球』と『新たな天国』が出現し、預言者たちは、もはや必要なくなるだろう」それから沈黙が訪れ、霊気は失われた。そして、私は気を失った。意識を取り戻したとき、私はエリドゥの外れの野原にいた。一筆記者の長・エンドゥブサル（En-dub-sar）の証印

*預言者の誕生。そして、「神々」のお告げは天体の現象として現れることになり、告げるべき言葉は夢と幻影、すなわち、睡眠学習効果を利用した、睡眠中に語られる「神々の御言葉」と、スクリーンなどで見せられる幻影となった。そして、“最後の時”が到来すると“新たな地球”が出現し、預言者たちは必要なくなるのである。つまり、天照大神が降臨すると、伊勢神宮は使命を終え、鳥たちの使命もまた終焉となる。

この時点で、「筆記者の長・エンドゥブサル（En-dub-sar）の証印」とあることから、実は、「主エンキの御言葉―‘始まり’‘先の時代’‘昔の時代’‘大いなる惨禍’についての真実の記述」は、14のタブレット（粘土板古文書）に記載されていたものである。それが発掘され、今回、シッチン氏によって解読されたのである。つまり、「主エンキの御言葉」とモーゼの十戒は別物であり、十戒は「主エンキの御言葉」を原型として作られたものであろう。そして、前述の“運命付けられたものは、周期的に繰り返されるであろう”という記述からも、同じような現象が何度も繰り返されるのである。

すると、「主エンキの御言葉」がラピスラズリに書かれていることが真実ならば、このシッチン氏が解読した14のタブレットは「主エンキの御言葉」のオリジナルではなく、コピーとなる。では、オリジナルは何処へ？イエス降臨の前後に、十戒とは別に発見されるのであろうか。

4：第1のタブレットーニビルでの南北覇権争いー核戦争の勃発

冒頭は、核爆発後のシュメールに対するエンキの悲嘆の言葉が並んでいる。そして、それに至る大まかな経緯が書かれている。エンキの長男マルドゥクの横暴に対して、エンリルの息子ニヌルタとエンキの息子ネルガルが、エンキを除くすべての「神々」の了承を得て、核兵器でマルドゥクの領地を攻撃したことである！

実は、「神々」の星ニビルでも全面的な戦争が勃発し、その後、統一王朝ができた。地球に於ける全面戦争も、大元の原因はニビルの歴史にあるのではないかと考えたエンキは、ニビルの歴史から紹介している。ここでは、ニビルの実態と歴史、「神々」が地球に降臨することになった背景が紹介されている。

まずは、ニビルの王位継承図を示す。四角の囲いが男、囲いの無い配偶者が正式配偶者、点線の囲いで名が無いのが側室である。また、数字は王位継承順位を示す。最初の王はアンであり、地球に関わる王がアラルとアヌである。アヌは最初の王アンに因み、アヌと名付けられた。

ニビルでは、異母兄弟姉妹間の結婚は近親婚にはならず、認められていた。それどころか、血の濃さを重視するようになったため、積極的に異母兄弟姉妹間の結婚は行われたのである。この制度を画策したのは、キシアルガルである。アンシャルガルの長男（アラム）は側室が生んだが、キシアルガルの嫉妬と野望により、“出生の順位”よりも“血の濃さ”が重視される法が制定された。それ故、アラムの王位継承権は剥奪され、キシアルガルの子アンシャルが王位を継承するに至った。しかし、この血統は最終的に養子（ラーマ）を迎えることにより、断絶した。また、この“血の濃さ”が後の王位継承に争いをもたらし、地球に於ける大戦争の引き金となった。アラルとアヌの対立、エンキの子孫とエンリルの子孫の対立である。

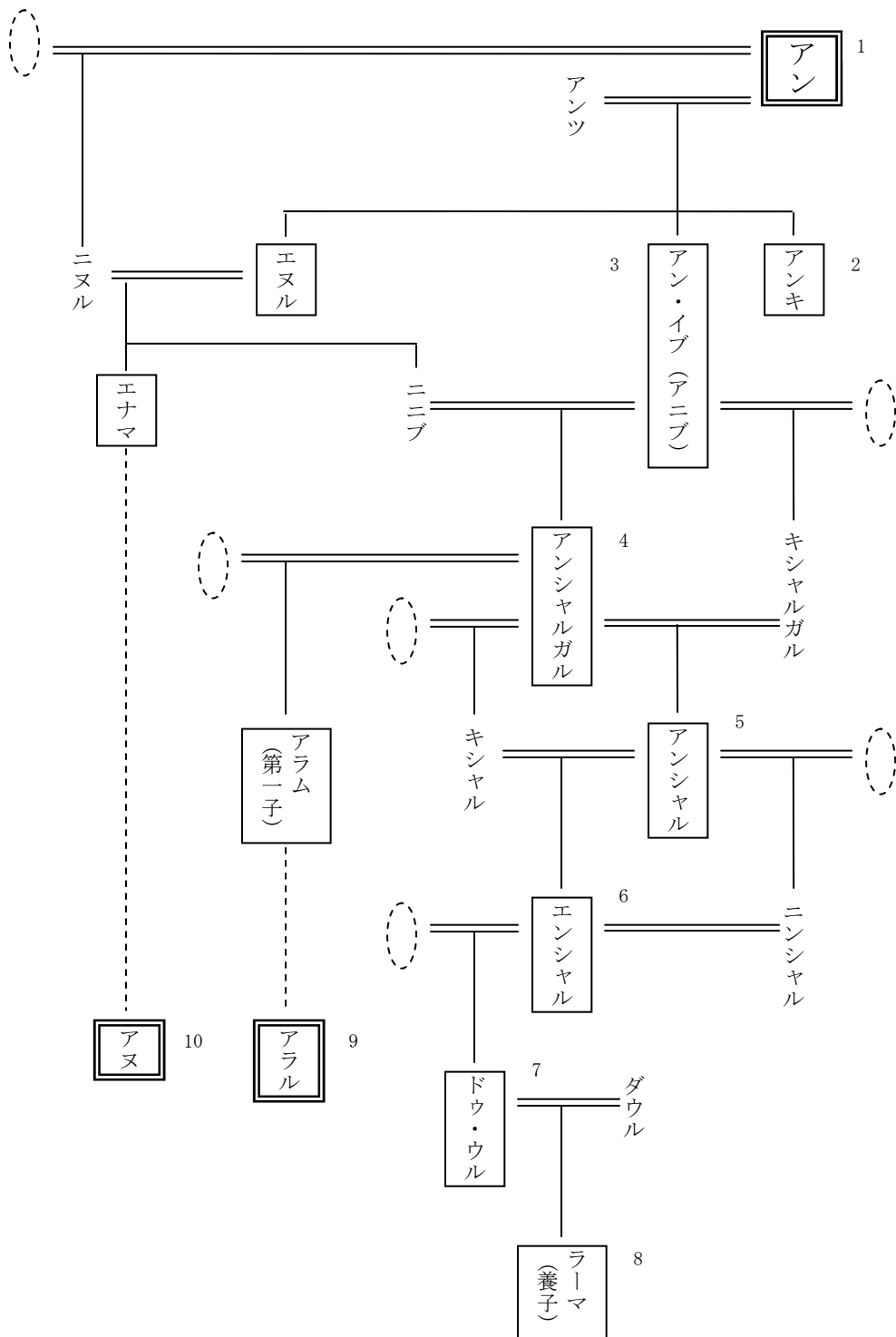
(1) ニビルの実態

・ニビルは赤みがかった光を放つ大きな火山性の惑星で、噴火によって供給されるガスによって、分厚い大気層が形成されている。太陽から遠ざかる寒い時期には熱を逃がさず、最も近づく時には焼け付くような光線からニビルを保護している。そして、雨を保持したり降らせたりして、湖や小川を生じさせる。植物が青々と茂り、様々な生物が存在している。

*ニビルは火山性の惑星である。火山から生じる分厚い大気により、適度な気候に維持され、生命が存在できるのである。

(2) ニビルの歴史

・進化のある時点で種族間の競争が起こり、侵略が発生した。そして、北と南の2つの大きな国が戦争した。兄弟同士が戦うことにもなり、雷や光輝の武器が恐怖を増大させた。何周期にもわたり荒廃が地上を支配し、すべての生命が滅ってしまった。それから休戦宣言が成され、和平が訪れた。ニビルの王座を1つとし、1人の王が統治することとされた。北あるいは南から王となる者をくじ引きで選び、王が北なら伴侶は南、王が南なら伴侶は北とすることに決定された。選ばれた王は北の者であり、伴侶は南の者となった。王の名はアン、“天の1人”という意味であり、妃の名はアン・ツ、“アンの伴侶である指導者”という意味である。王は法を制定して国を再建し、ニビルに平和を取り戻した。



*聖書に於いて、重要なことを決める場合に、しばしばくじ引きが登場する。その原型は、ここにある。また、“雷や光輝の武器”によって恐怖が増大し、何周期にもわたり荒廃が地上を支配し、すべての生命が減ってしまったので、この武器は核兵器である。

(3) ニビルの王位継承

・アンシャルガル（王子の中で最も偉大なる者、の意）がニビルの 1 公転周期を 1 シャルと決めた。彼はシャルを 10 分割し、2 つの祝祭を制定した。太陽に最も近づいた時の暖かさの祭り、最も離れた時の涼しさの祭りである。

*地球の夏至祭、冬至祭の原型。1 シャルは 3600 年。

・戦争以来、女性の数が男性の数を大いに上回っていた。そこで、1 人の男性が複数の女性を娶るよう、布告が出された。法律により、正式な配偶者として 1 人の妻が選ばれ、“最初の妻”とされた。そして、最初に生まれた息子が父親の後継者とされた。しかし、この法律により、すぐに混乱が生じた。最初の息子が最初の妻から生まれずに側室から生まれ、その後に最初の妻に息子が生まれたらどうなるのか。

アンシャルガルの治世に、それは現実となった。第一子の息子は、正妻のキシシャルガルではなく、側室から生まれた。その後、キシシャルガルから息子が生まれた。キシシャルガルは主張した。「二重の種子を見過ごさないで。私は王の異母妹。それにより、私の息子は父の種子を二重に備えていることになります。今後は“種子の法”に最も効力を持たせましょう！」つまり、何番目に生まれようと、異母姉妹による息子の継承権を他の息子たちよりも優先する、というものである。王アンシャルガルは、この主張を認めた。

(4) ニビルの危機

・アンシャルの治世に、農作物が激減した。太陽に近づいた時、その熱は強くなり、遠ざかった時、寒さに凍えることとなった。大気中に、裂け目が発生していたことが原因と判明した。大気の原因となる、火山活動と噴煙が減少していたのである。そのため、ニビルの空気は薄くなり、保護シールドとしての役割を成さなくなってきたのである。

(5) 血統の断絶と不満の増大

・ドゥ・ウルは、子に恵まれなかった。彼は、アンの血統が始まって以来、初めて“種子”によってではなく“愛”によって自分の伴侶ダウルを選んだ。そして、ダウルが宮殿の入り口で見つけた子を息子とし、“日照り”を意味する“ラーマ”と名付けた。しかし、大気層の裂け目を修復する方法も見つからず、宮殿や王室顧問評議会では、不満が増大していた。

*ラーマと言えば、インダス文明の叙事詩ラーマヤナ。魔神に略奪された妻シータを無事に救い出したものの、ラーマはシータの貞節を疑ってしまった。

身の潔白を証明するために、シータは燃える火の中に身を投げた。あわや、というところで、火の神アグニによって、シータは助けられた。これにより、ラーマはシータの潔白を信じ、永遠の愛を誓い合った。というのが、ラーマ・ヤナのクライマックスである。ここでの“燃える炎”の原型が、“日照りを意味するラーマ”であろう。

・有識者会議では、修復のために2つの方法が検討された。1つはニビルでは非常に稀な金属である金を細かく挽き、空に浮遊させる方法である。金は、“打ち出し細工のブレスレット（小惑星帯）”の内側に豊富に存在することが判明していた。もう1つは、“恐怖の武器”を創造して大地を揺るがし、火山活動を活発化させる方法である。ラーマは決断力に欠け、その間に状況は悪化した。そして、その責任として、王に非難の目が向けられた。昔の倉庫から武器が取り出され、1人の王子が最初に武器を手に取り、氾濫した。その王子とは、アラルである。王は宮殿の塔に逃れたが、追ってきたアラルともみ合いとなり、ラーマは倒れて死んだ。そして、アラルは王座に着き、王位を宣言した。ラーマの死を喜ぶ者もいれば、アラルの行いを嘆き悲しむ者もいて、国の統一は失われた。

*小惑星帯よりも太陽側に金が豊富に存在することを、太陽系形成の歴史からニビルの住人は知っていたのである。

(6) アラルの王位と地球行き

・アラルの王位について、多くの者が立腹した。しかし、アラルは“種子の法”によって王位の権利を略奪されたアラムの血統であることが判明し、評議会は王位を認めようとした。そこに、1人の王子が意見した。「私こそ、アンの純粋な種子の末裔です」と。アヌであった。評議会が血統を辿ると、まさしくその通りであった。そして、アヌを王とすることが決定された。

・しかし、アラルはアヌに「一緒にニビルに平和を取り戻そう。私は王座に留まり、君は継承権を持つ」と言った。アラルは評議会に「アヌを皇太子とし、彼の息子に私の娘を娶らせ、継承を合体させよう」と提案した。そして、アヌは評議会と会衆の前で、アラルの次期継承者となることを宣言した。このようにして、アラルは王位に留まった。

・アラルは“天の船”を建造させ、“打ち出し細工のブレスレット”で金を探させたが、そこで船は粉碎され、1隻も戻ってこなかった。また、“恐怖の武器”で“空飛ぶ二輪戦車”を武装させ、火山を攻撃したが、火山による噴出は増えず、効果は無かった。そのため、人々の間では不満が増大した。しかし、アラルは王位に居座った。9番目のシャルに、アヌは裸での取っ組み合いの喧嘩をアラルに挑み、勝者が王となることを提言した。彼らは公共の場で取っ組み合い、アラルが膝を折って胸から地面に倒れこんだ。そして、アヌが新たな王として迎えられた。

*相撲の原型。また、古代のオリンピックに於けるレスリングの原型。古代のオリンピックでは、闘技場で全裸になって格闘した。

・アラルはラーマのように殺されることを恐れ、密かに逃げ出した。“天の二輪戦車”の場所へ大急ぎで行き、ミサイル投下用の二輪戦車に乗り込んだ。“道筋を示すもの”のスイッチを入れると青みがかったオーラで部屋が満たされ、二輪戦車の“大きな爆竹”を活気づけると、赤みがかった光輝が放たれた。そして、ニビルから脱出し、地球へ進路を定めた。‘始まり’の秘密、すなわち太陽系創造の歴史により、地球が“打ち出し細工のブレスレット”の片割れであることを知っていたためである。

* “天の二輪戦車”という表現なので、離着陸の際には車輪を使うタイプの戦闘機である。現在、“オーロラ”と言われているタイプか？エンジン点火や離陸時の様子から、プラズマで機体が覆われた、飛鳥氏が言うところの“プラズマ兵器”である。MHD（磁気流体力学）の専門家ジャン・ピエール・プチ氏（元フランス国立科学研究庁・主任研究員）によると、プラズマで機体を覆うと、音速以上で発生する衝撃波をサーフィンするが如く、衝撃と熱から回避することができるという。そのため、マッハ 20 以上の航行が可能となる。地球上で観測される UF0 のほとんどが、米国が製造したこの手のジェット機である。（極一部は、飛来するシュメールの「神々」のもの。）おそらく、米国はこのような情報を、プチ氏の理論とエリア 51 に墜落した UF0（シュメールの「神々」あるいはその僕の乗り物）から得て、“オーロラ”（プラズマ兵器）を開発したのである。

5：第2のタブレットー黄金の惑星・地球への着陸ー地球誕生の叙事詩

(1)アラルの地球到達

・“打ち出し細工のブレスレット”は誰も横断したことがなかった。アラルは、迫り来る“打ち出し細工のブレスレット”の巨石に対して“恐怖の武器”を発射して粉碎し、見事、危機を乗り切った。そして、未知なる地球に到達した。地球の頂上と底は雪のように白く、真ん中は青と茶色だった。

*小惑星帯を核兵器で粉碎しながら、飛行してきたのである。当時の地球の概観は、ほぼ現在と同じであった。

・地球を旋回するため、彼は二輪戦車の停止翼を広げ、“貫くビーム”で地球内部を調べた。多くの金の存在を、ビームが示していた。アラルは二輪戦車を運命の手に委ね、地上に何とか着陸した。

*二輪戦車は翼があるジェット機タイプである。そして、金の存在をビームが示していたことから、そのビームは元素分析が可能な X 線であろう。レーザー光では、元素分析はできない。

(2) 地球誕生

・最初は太陽（アプス）だけが存在していた。まずティアマトが形成され、次に火星（ラーム）と金星（ラハム）が形成された。次に土星（アンシャル）と木星（キシヤル）が、それから天王星（アン）と海王星（アンツ）が形成された。このようにして、3組の天空の夫婦が創造され、水星（ムンム）を連れたアプスとティアマトの家族を形成した。

＊日本神話の天地創造の場面と極めて類似している。

・その頃、各周期は定められておらず、バラバラだった。ティアマトからは月（キングゥ）を始めたとした衛星が11個形成された。そして、遙か離れた深遠なる場所で、ニビルが誕生した。

・ニビルが太陽に向けて進路を取り始めると、まずは土星の重力により、ニビルから4個の衛星（北の風、南の風、東の風、西の風）が生じた。それから、更に3個の衛星（邪悪な風、つむじ風、並ぶ者のない風）が生じた。そして、木星の巨大な重力により、ニビルはプラズマを帯びた。

・ニビルがティアマトに近づくと、衛星がティアマト目掛けて突進した。ニビルのプラズマがティアマトを覆い、“邪悪な風”がティアマトの腹に突撃して、腹を引き裂いた。ティアマトは、死骸のようだった。キングゥ以外のティアマトの衛星はニビルに捉えられ、粉々になり、逆方向に回り始めて輪となった。

・ニビルは太陽から遠ざかり、また近づいて“死骸のようなティアマト”に接近した。そこには、金色の静脈（金鉱石）があった。今度は、ニビルの“北の風”が“死骸のようなティアマト”に衝突し、半分が地球（キ、固い土地）、残りが小惑星帯（打ち出し細工のブレスレット）となった。そして、キングゥは地球の衛星＝月となり、土星の衛星ガガは、度重なるニビルの接近によって軌道を乱され、冥王星となった。ニビルとは、“天と地球の交差点”という意味である。

＊地球の元はティアマトと呼ばれた惑星で、ニビルの接近により破壊され、その残骸が地球、片割れが小惑星帯なのである！

また近年、冥王星は惑星から降格されたが、それもそのはず、土星の衛星だったからである。おそらく、降格を決めた連中は、シュメールのこのような太陽系創造の話を知ったのであろう。

小惑星帯は“打ち出し細工のブレスレット”と呼ばれるが、創世記で“初めに神は天地を創造された”とあるのは、実はこの地球創成の現象のことである。天は“打ち出し細工のブレスレット”である小惑星帯、地は地球である。「ブレスレット」というのは、他にも聖書の中のヨブ記、アッカドの古文書などにも登場する。

“光あれ。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた”とあるのは、新生地球が新たな軌道に落ち着いたことである。この後、天地創造にあるように、地殻活動によって大陸と海が形成された。地球の大陸と海洋で地質の層が異なるのは、ティアマトの一部が衛星の衝突によって破壊され、そこが海洋となったためと考えられる。

“神は 2 つの大きな光る物と星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めさせられた”とあるのが、月が地球の衛星となったことを表す。ここでは太陽も一緒になっているが、月に対する太陽という意味だけである。元々、太陽は最初の“光あれ”に含まれている。

なお、創世記では第 3 の日に種子植物が繁殖したことになるが、これは正確ではなく、最初の植物の原型が発生した、ぐらいだろう。

このように、太陽系に於ける謎、すなわち天王星の地軸の傾き、海王星の磁場の向き、彗星の公転方向、地球の大陸と海洋の地質の違い、小惑星帯の由来、冥王星の特殊な軌道などの不可思議な現象は、ニビルの接近により生じた現象、ということで、いずれもすっきり説明できる。

また、このような天体の挙動から、ニビルの大きさは、小さく見積もっても木星並みの大きさはあろう。学術的に、木星は太陽になり損ねた星と言われており、多量のガスに覆われた巨星である。つまり、それなりの条件さえ整えば、太陽から遠く離れたニビルでも、火山噴火等の惑星活動により、生命が発生・進化するのに十分な気候となり得るのである。

ニビルに関する天文学関係の古文書やメソポタミアの古文書には、次のように記載されている。

- ・遙か遠くの天界の高さまで観察し…その光輪は周りを威圧していた。それは、国々をシャマシュ（太陽）のように観察する。
- ・太陽が昇る時に見えて、日没の時に消えてしまう。

ニップールで発見された円筒印章には、農夫の一団が日中でも天に輝くニビルを、恐れながら見上げている光景が刻まれている。そして、「天地創造の叙事詩」や、別の古文書には、次のようにある。

- ・惑星ニビルよ、天界に燦然と輝き、その真ん中の場所を占め、天の星は彼を崇めた。（天地創造の叙事詩）
- ・神々の中で、一番光を放つ星。
- ・マルドゥク（ニビル）の高位は並はずれていた。彼の手足は巨大だった。彼は非常に背が高かった。彼が唇を動かすと、火が外へ燃え立った。

太陽の見える昼間に燦然と光り輝き、まるで、もう 1 つの太陽のようである。そして、火が燃え立つような星であったことから、他の惑星よりも巨大であったことが伺える。

なお、シュメール語で琴座のことをウズ星＝光の星と言うから、琴座星系は

「神々」の遠い祖先に関係があるのかもしれない。

(3) アラルの地球調査

・二輪戦車は乾いた土地、広大な湿地の端に着陸していた。彼は鷲のヘルメットを被り、魚のスーツを着た。彼は近くを歩き、二輪戦車に引き返し、眠った。起きてから、“検査装置”によって空気を吸い込むと、適合性を示した。そこで、今度はヘルメットとスーツ無しで、地面に降りた。太陽光線の強さに目が眩んだので、目にマスクを着けた。そして、携帯用武器とサンプラーを手にした。湿地へ歩いて行き、水を検査すると飲むには不適合だった。植物の茂みを歩いて行くと、甘い香りの果実が豊富にあり、口にすると甘かった。更に行くと池があり、検査すると飲むのに適していた。水を飲んでみると、シューという音が聞こえ、このような生物が池の横を移動していた。彼は武器を取り、音の方向に向けて撃った。すると、音と動きは止んだ。その生物は長い紐のようで、体には手も足も無く、小さな頭には獐猛な目があり、口から長い舌を突き出していた。ニビルでは、絶対に目にすることの無い光景だった。あれは、果樹園の守護者なのだろうか。水の支配者だろうか。アラルは1人で思案した。

*ここだけではなく、後々も「神々」は鷲のヘルメットや魚のスーツを着用する。これが、鷲や魚で象徴される「神々」の原型である。また、地球はニビルよりも太陽に近いので、太陽光線が強い。そして、地球の空気も水も、ニビルの住人にとって適合したのである。それは、地球がニビルの衛星の衝突によって形成され、その際、生物種の DNA が地球に蒔かれたからに他ならない。そして、この記述から、ニビルには蛇類はいなかったことが解る。つまり、彼らは決して爬虫類人類などといった、馬鹿げた存在ではないのである。そして、「知恵の果実」が実るエデンの園、「知恵の木」に絡まる蛇という概念の原型が、“果樹園の守護者”である。

・日の短さに彼は驚いた。夜には、白い色合いの地球の同伴者、キングゥを目にした。夜が明けると、アラルはテスターを取り出し、湿地の水を調べた。水の中に、金があることをテスターは知らせていた。アラルは、ニビルの宿命が自分の手中にあることを勝利と感じた。そして、ニビルに通信を送った。もう1つの世界に私はいる、救済の黄金を見つけた、ニビルの宿命は我が手中にあり、お前たちは私の条件に従わなければならない！と。

*公転周期は地球が1年、ニビルが3600年だから、地球の昼は（夜も）ニビルと比較して異常に短いのである。

6：第3のタブレットー地球への調査団派遣ー地球植民地化計画

(1) エンキの地球への派遣

・このメッセージを受け、アヌは驚愕した。学識者たちにより、これは地球から発せられたと判明した。アヌの第二子エンリル（命令の主、の意）が、「本当

にティアマトの黄金を見つけたのなら、その証拠が必要だ」と発言した。アラルはそれを受け、調査結果を送信した。アヌは第一子エア（後のエンキ）をはじめとする 50 人の英雄を地球に派遣し、入念に調査するよう命じた。

・二輪戦車の機長はアンズ（天空を知る者、の意）であった。彼は王子の中の王子で、王族の末裔だった。“打ち出し細工のブレスレット”に到達すると、エアは“恐怖の武器”ではなく、“水推進装置”で巨石の向きを変え、突破した。水を使いすぎ、補給の必要が生じたので、火星に着陸した。火星の帽子は雪のように白く、中央部分は赤みがかかり、湖や川がきらきら輝いていた。水は飲むのに適していたが、空気は適していなかった。

*エアは“恐怖の武器”の使用を嫌った。そして、火星に“火星”人は生存しなかったが、水は豊富に存在した。

・火星から地球が見えた。彼らは地球に向け離陸し、アラルの信号を頼りに、地球の海に着水した。海が乾いた土地に接する場所、4つの川が湿地に飲み込まれる場所である。「地球へようこそ」というアラルの声がスピーカーから聞こえた。彼らは二輪戦車で湿地まで移動し、魚のスーツを着て、湿地へ降りて行った。間もなく、彼らはアラルの姿を見た。

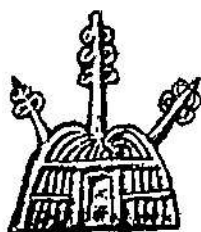
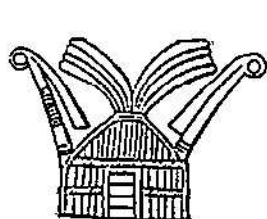
*着水地点は、アラビア半島東南のアラビア海である。

(2) 地球での最初の活動

・アラルは義理の息子を歓迎した。エアはアヌの命令どおり、皆の前で地球に於ける指揮官であることを宣言した。やがて、空の色が変化していき、太陽が真っ赤な球となって地平線に消えていく光景に驚愕した。ニビルでは、決して見られない光景だからである。夜が訪れたが、初めての体験に彼らは動揺していて眠れなかった。そして、あっという間に朝が来た。彼らはあまりにも速い地球の自転に戸惑った。これが、地球での最初の 1 日である。

・2 日目には水路と堤防を作って湿地帯との境界とし、飲むための真水を確保した。3 日目には草と木が茂る場所へ行ってハーブや果物を調査し、食べ物を確保した。4 日目には粘土からレンガを作り、居住施設を建てた。5 日目には葦の船を作り、水中の生物を調査した。そして、空の生物も調査した。6 日目には果樹園の生物を調査した。野生生物（特に爬虫類）の残忍さを知り、防御のためのフェンスを作った。そして、アンズが戦車から“殺しの光線”を降ろし、“言葉を送るスピーカー”をエアの住居に設置した。成し遂げたことは、すべてうまくいった。よって、7 日目は休息の日とされた。7 番目の日はいつまでも、休日とすることをエアが宣言した。エアはこの最初の宿営地をエリドゥ（遠く離れた故郷、の意）と名付け、アラルをエリドゥの司令官とした。アラルはエアのことをヌディンムド（巧みな形作る者、の意）と呼んだ。

＊聖書に於ける 7 日間での天地創造の原型。7 番目の日を休息日としたのはエンキである。7 はエンリルだけの数字ではなかったのである。“殺しの光線”はレーザー光線である。エンキの宿営地には“言葉を送るスピーカー”などが取り付けられた。その典型的なものを図示する。



五七の桐の御紋



浅草神社の御紋

左の 2 つが宿営図であり、特にその右側がガド族のシンボル、宿営地のマークであり、五七の桐の紋の原型である。古代に於いては、皇室の菊の御紋は裏の御紋であり、五七の桐の紋が正式だった。五七の桐の御紋は、初代応神天皇がガド族だったことに因む。浅草神社の社紋も、これが原型である。

・エアは水から金を得る仕事に着手した。6 地球日に亘り、水から金が採取された。7 日目に検査すると、鉄や銅はたくさんあったが、金は少なかった。地球の時間で 1 年間、水から金を採取したが、ニビルに送り出すほどの量は無かった。金を集め、ニビルの接近時に届けるように、アヌはエアに命令した。しかし、水からの金だけでは、まったく量が不足していた。そこで、エアはアブガル（エアの司令官の 1 人）と共に、金鉱脈を探しに出掛けた。

・夜間、エアは月の運行に魅了された。エアはその周回を“月”と呼んだ。太陽は 6 ヶ月毎に別の季節を与え、エアはそれらを“夏、冬”と呼んだ。そして、地球の 1 周回を“年”と呼んだ。

(3) “恐怖の武器”の封印

・アラルの二輪戦車を修理し、ニビルへ戻れるようにすることを、アヌはエアに命じた。ある晩、アラルの二輪戦車の“恐怖の武器”を全部で 7 つ、取り外した。武器の使用は止める誓いが立てられていたからである。エアとアブガルは秘密裏に出掛けた。そして、秘密の洞窟にそれらを保管した。戻ってから、エアはアンズにアラルの二輪戦車を修理するよう命じた。アンズは二輪戦車に熟練していたので、“恐怖の武器”が無いことに気付いた。彼は怒りで激しく抗議した。「天空に於いても、“固い土地”に於いても、それらは決して使用してはならないのだ！」とエアは言った。「それ無しでは、“打ち出し細工のブレスレット”を安全に通過できない。“水推進装置”だけでは、忍耐の度を越えてしまう」とアンズは言った。その時、操縦法を知っているアブガルが、危険に立ち向かうことを宣言した。エアはアブガルに“運命の石板”を与えた。「それは

君にとって、道を示すものとなるだろう」

＊“恐怖の武器”＝核兵器の使用は、過去の争いの歴史故、禁じられていたのである。“運命の石板”はいろいろな場面に登場するが、航路などの情報がインプットされた石＝シリコン製のマイクロチップであろう。

7：第4のタブレットー地球での鉱物資源確保ー地球支配神の誕生

(1) ニビルへの一時帰還とエンリルの地球への派遣

・アブガルの操る二輪戦車は、スピードを増すために月の周りを周回し、ニビルへ向かった。“打ち出し細工のプレスレット”をうまく切り抜け、赤みがかかった色に燃えるニビルを目にし、ニビルを3回周回し、ビームによって誘導された場所に到着した。

＊惑星の重力を利用して加速・減速するスイング・バイ航法が利用されている。

・ニビルが太陽に接近すると、金の粉はかき乱され、大気はまた、裂け目を開いていった。地球に戻り、更なる金の採取をアヌは命じた。アブガルが戻ってくると、エアは調査に出掛け、アフリカに金鉱脈があることを発見し、その地域をアブズと名付けた。エアがニビルに情報を送信すると、1人の王子が言った。「金鉱脈があるという証拠が必要だ」アヌの息子でエアの異母弟エンリルである。アヌは、エンリルに地球へ行くことを命じ、副官で操縦士のアラルガルと共に、エンリルは地球へと旅立った。エンリルは地球に着くと、一大計画をぶち上げた。もっと英雄たちを連れてきて、入植地を設置し、地球の内部から金を得て精製することを。では、誰がエリドゥの指揮を取り、誰が入植地を監督するのか。誰が“着陸場所”や二輪戦車の管理をするのか。アヌを地球に招いて、判断を委ねることとした。

(2) アヌの来訪

・アヌの来訪は、壮麗な歓迎をもって行われた。アラルは戸惑いながらも、アヌと肩を組み合った。着陸する場所を建設し、英雄たちをもっと送り込んで金を採取するよう、アヌは提案した。そして、エリドゥで、仕事や任務を割り当てるために会議が開かれた。エアが提案した。「私はエリドゥを築いたので、他の入植地をこの地域に築こう。そして、“直立した者たちの住まい＝エディン”としよう。エディンの司令官は私が引き受け、エンリルには金の抽出を行ってもらおう」すると、エンリルが腹を立てた。「指揮を取るのは、私の方が上手です。地球とその秘密についてはエアの方が熟知しており、アブズを発見したのも彼なので、彼をアブズの主人とすれば良いのです」彼らが“第一子”と“正統な世継ぎ”として争っていることに気付いたアヌは、これが原因で金を採取できなくなることを懸念した。「では、誰がニビルに戻って王座に座り、誰がエディンを指揮し、誰がアブズの主人になるのか、くじ引きで決めようではないか！」とアヌはぎょっとするような提案をしたが、彼らはそれに従った。そし

て、アヌがニビルに戻り、エンリルがエディンを指揮し、エアがアブズの主人になることに決定した。エンリルは大変喜んだが、エアは涙に暮れた。そこで、アヌは提言した。「エリドゥはエアの故郷として、永久にエアの名を記憶にとどめよう。彼が、着水した最初存在であることを、永久に記憶させよう。エアは地球の主人として知られるようにしよう。彼の称号を“地球の主人＝エンキ”としよう」エンリルは言った。「あなたの称号は、これよりエンキとしよう。私は“命令の主”として知られよう」

*エアがエンキとなった云われである。エンキは最初の宿営地をエリドゥと名付け、アラルをエリドゥの司令官に任命した。しかし、ここでは、アヌがアラルを無視してエンキをエリドゥの司令官に任命した。これが、次の戦いの原因となる。

(3) アラルの反逆と追放

・一件落着と思ったアヌがニビルに戻ろうとした時、アラルが言った。「地球の支配権は私にあることが、金の発見をニビルに知らせた時の約束ではないか。不愉快だ」アヌはアラルと対決しようとした。2人は服を脱いで裸となり、戦い始めた。勝負は、アラルが地面に膝をついて負けた。アヌは地面に崩れ落ちたアラルの胸を踏みつけ、勝利を宣言した。と、その時、アラルはアヌの両足を引っ張って倒した。そして、アヌのペニスを噛み切って飲み込んだ！激しい苦痛にアヌは叫び声をあげ、倒れた。エンキがアヌに駆け寄り、エンリルがアラルを取り押さえた。アヌは小屋へ運ばれ、アラルは別の小屋へ連行され、両手足を縛り上げられた。

*ニビルでの屈辱を晴らす戦いである。これが、エジプト神話に於いて、セトが兄オシリスの遺体をバラバラにして川に投げ込み、オシリスの男根がナイル川に住むオクシリンスコスという魚が飲み込んでしまった、という話の原型である。一般的に「神々」で魚と言えばエンキであるが、アラルこそ、最初に地球に到着して“魚のスーツ”を着た張本人である。

・アヌはエンキの治療により回復した。アラルの内臓の中ではアヌのペニスが重荷となり、腹は産気づいた女性のように膨らんでいた。そして、裁判が行われた。裁判を下す7人の席には、議長としてアヌが真ん中、右にエンキ、左にエンリルが座った。更に、それぞれの腹心2人ずつが座った。判決の前に、アラルの答弁が許された。アラルは、ニビルで自分の継承権が奪われたこと、ここ地球では義理の息子エンキに長子としての権限があるにも関わらず、くじ引きによって騙され、“地球の主”として祀り上げられたことに対して、無念さで胸が張り裂けそうだったことを述べた。

*「生命の樹」の3本柱、三柱の神々の原型と、右側が重要なことの原型。

・アヌが声を大にして言った。「お前は私のペニスを噛み切って飲み下し、子孫

の血統を断ち切った」アヌには怒りと共に、同情心が込み上げた。「流刑で死を」とアヌの判決が下った。裁判官たちは、何を言っているのだろうと思った。「流刑地はラーム（火星）とする。ヌンガルをニビルまでの私の操縦士とし、英雄たちを地球まで運んでもらおう。そして、アンズにも加わってもらい、ラームへの降下任務に当たらせよう」刑は実施され、ラームに近づいたが、アンズが予期せぬ言葉を口にした。「私はアラルと共にラームに留まります。彼が亡くなったら、私がアラルを王に相応しく葬ります」アラルの目には涙が浮かび、アヌは驚嘆した。アヌはその願いを叶えることとした。アラルとアンズには驚のヘルメットと魚のスーツ、食料と道具が与えられ、ラームに降下した。

・アヌはニビルに帰還すると、事の次第を議会と王子たちに説明したが、同情や復讐心を引き出そうとはしなかった。代わりに、ニビルと地球の間に宇宙ステーションを建設するよう指示した。最初のはラームに、次のは月に、そして順次、他の惑星にも。地球ではエンキが“地球分割機”を設計し、ニビルで造るよう依頼した。エンキはアブズで使う“噛み砕くもの”と“押しつぶすもの”も設計し、ニビルで造らせた。

・英雄たちにとって、地球の速い周回は不安の種で、眩暈を引き起こしていた。大気は上等だが、いくつかのものは不足し、いくつかのものは多すぎた。エンリルは太陽の熱に悩まされ、涼しさと日陰を切望していた。エディンの北側にある雪に覆われた山々をエンリルは気に入り、涼を取る陰の場所を作った。ヒマラヤ杉の森に動力ビームを放って平らにし、山腹から巨石を切り出してサイズを揃え、“空の船”で積み上げた。エンリルは山頂に自分の住まいも造らせた。

＊神殿の原型。やはり、ビームで石を切り出し、“空の船”で積み上げたのである。とても、人が下から積み上げてできるものではない。考古学者の“思い込み”など、あっさり否定されてしまうのである。

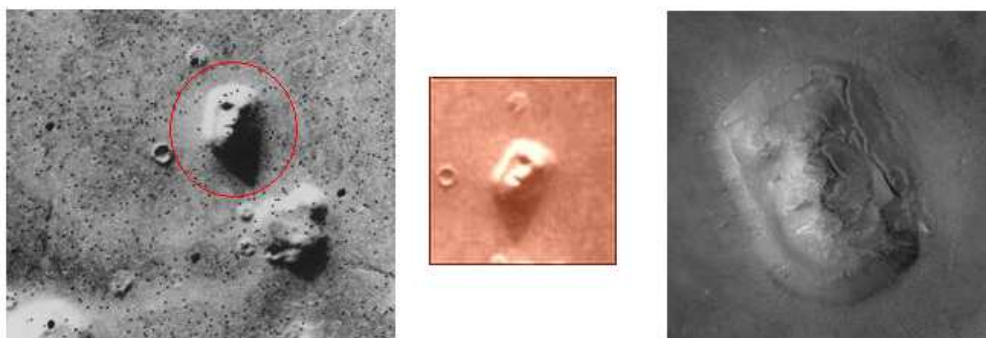
・ニビルからは、新たに 50 人の英雄が旅立とうとしていた。その中には、女性たちもいた。アヌの娘で、エンキとエンリルの異母妹ニンマー（後のニンフルサグ）に率いられた、救助と治療の乙女たちである。二輪戦車がラームに着くと、かすかに発せられている信号の元を追った。すると、湖岸の側でアンズを発見した。彼のヘルメットから信号が発せられていたのである。アンズは死んでいた。ニンマーはアンズの心臓に着目し、自分のポシェットから“プルセル”を取り出して、アンズの心臓に振動を向けた。また、“エミッテル”を取り出し、生命を与える水晶の放射物を体に向けた。それぞれ 60 回ずつ向けた。すると、60 回目にアンズは目を開けた。そこでニンマーはそっと“生命の水”を顔に注ぎ、“生命の食べ物”を含ませた。アンズは死から目を覚ました。

＊この時代、まだ火星の大気は現在ほど薄くはなっていなかった。プルセルは AED のようなもの、エミッテルは何らかの放射線である。アンズは死んでいたといっても、死者が蘇ることはない。死ぬ寸前か、仮死状態だったのである。

・ニンマーはアラルについて尋ねた。アラルは着陸して間もなく、耐え難い苦痛に見舞われ、自分の内臓を吐き出し、苦しみ悶え、巨大な岩を凝視して死んだ。アンズはその岩に洞窟を発見し、その中に遺体を隠して入り口を石で塞いだ、と言った。彼らがそこまで行くと、アラルの痕跡が見つかった。ニンマーは言った。「私たちの年代記の中で、初めてニビル以外で王が亡くなった。彼を、安らかな眠りに就かせましょう」そして、洞窟の入り口を再び塞ぎ、その巨大な岩山にアラルの姿を光線で刻んだ。鷲のヘルメットをかぶった姿であり、顔は何も覆わなかった。「アラルの顔には、彼が統治したニビルの方向を永遠に見つめさせよう！」父アヌの名に於いて、ニンマーはそう宣言した。そしてアンズには、ラームの中間ステーションの司令官を任命した。アンズは「あなたは命の恩人です。偉大なレディ！アヌには感謝してもしきれません」と言った。

* 遺体を洞窟に葬って石で塞いだ。イエス＝ユダヤの王が葬られた場面の原型。NASA が隠している火星の人面石は、何と、アラルの顔だったのである！鷲のヘルメットをかぶった顔は、スフィンクスと同じような顔つきである。左下は 1976 年にバイキング 1 号が火星の北緯 40 度、西経 6 度の地域に位置するシドニア地区で撮影したものである。目、鼻、口がはっきり確認できる。そして、クレーターなどにできている影の方向と、人面石の影の方向が一致しており、作為的な画像ではないことが解る。

2001 年には探査機マーズ・グローバル・サーベイヤーが同じ地区を撮影したが、それが右側の拡大画像であり、見事に画像処理によって顔が消されている。



8：第5のタブレットー宇宙空港の本格的建設ー神々の反乱

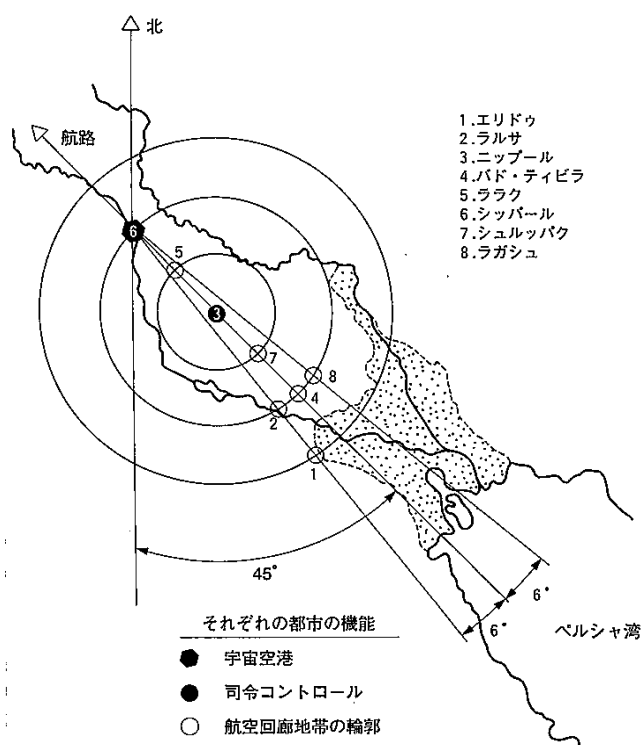
(1) ニンマーの地球到着

・ラームからニンマーたちは離陸した。月を周回した後、地球に着陸し、歓迎を受けた。ニンマーは、エンキとエンリルにニビルで決められたことすべて、アラルの死と埋葬、ラームへの中間ステーション建設について述べた。エンリルは、地球にそのような施設を建設しようと思っていたので困惑したが、アヌの命令ということで、納得せざるを得なかった。ニンマーはポーチから一袋の種を取り出し、果樹から万能薬ができること、そして英雄たちが飲むのにうってつけであることを述べた。種を蒔く場所として、エンリルはヒマラヤ杉の森

の横に建設した“着陸場所”にニンマーを連れて行った。彼らはエンリルの住まいへ行き、中に入ると、エンリルは彼女を抱きしめて熱烈なキスをした。彼女の腰を抱き寄せたが、子宮に精子は注がなかった。ニンマーはエンリルとの間にできた息子ニヌルタ（エンリルの長男）のことを話し、彼を呼び寄せることにした。そして、ニンマーは谷間の土地に種を蒔いた。

・エンリルはニンマーに都市計画を示した。「エリドゥから離れた乾燥した土地で、プランヌ川（ユーフラテス川）の川沿いが指揮の拠点であるラルサ、それと双子の都市ラガシュ、2つの都市の中間点から60リーグ先に垂線を延ばした場所に安息の都シュルバク（シュルツパク）、更にその延長線上に地球の交差点の場所ニブル・キを配し、“天と地球を結ぶもの”を築くつもりだ。そこに“運命の石板”を保管し、すべてのミッションを管理するのだ」ニンマーは、エンリルが何故、困惑したのか理解した。

*ラガシュは灯台都市の役割を担い、大洪水後はニヌルタの都市とされた。シュルバクはニンマーの治療センター、ニブル・キは元々の宇宙飛行管制センターで、エンリルの都。アッカド語ではニップールと呼ばれた。当時の主な都市配置を示す。ニップールを中心に同心円を描くと、これらの線上に都市が並ぶ。また、シッパールを起点とした飛行ルートと、その線から左右対称に6度間隔で線を結ぶと、これらの線上に都市がすべて正確に配置されている。



・エンキはアブズでいろいろ計画していた。彼は大河が流れる水のほとりに、自分の住まいを建てた。アブズの中央部、真水の場所にエンキは行き、金を採掘するために“地球スプリッター”、“噛み砕くもの”と“押しつぶすもの”を設置した。7番目の日、あらゆる場所に英雄たちが集まり、アヌのメッセージを聞いた。地球で600人、ラームで300人、総勢900人の英雄たちだ。「君たちは栄光ある名によって呼ばれるだろう。“天から地球へやって来た者たち”、アヌンナキである。ラームにいる者たちはイギギ、“観測し見る者たち”と名付けよう」

*アヌンナキやイギギというのは、アヌの命名による。

(2)エンキ、エンリル、ニンマーの関係

・彼らは、3人の異なる母から生まれた。エンキはアヌの第一子だったが、側室の子だった。エンリルの母は正式配偶者アンツから生まれ、正統な世継ぎだった。ニンマーは別の愛人から生まれ、非常に美しく、叡智に溢れていた。アヌはエンキに異母妹であるニンマーを娶らせ、彼らの息子を合法的な継承者にしようとした。しかし、ニンマーは颯爽とした司令官エンリルに夢中になり、エンリルはニンマーを誘惑し、妊娠させた。その子がニヌルタである。アヌはこの行為に激怒し、ニンマーが誰かの配偶者となることを禁じた。そして、エンキはニンマーを諦め、ダムキナという姫を娶った。2人の間には息子が生まれ、マルドゥク、“純粋な場所で生まれた者”と名付けた。

*長男として生まれたエンキの継承権が無くなってしまった。この関係が、後のマルドゥクの大きな野望へと繋がる。

(3)エンリルの追放

・エンリルが結婚したのは、ニビルではなく地球である。ある夏、暑さを避けてエンリルは自分の住まいに引きこもっていた。涼しくなってからヒマラヤ杉の森を歩いていると、ニンマーの治療乙女たちが何人かで水浴びしていた。その中のスドという名の乙女にエンリルは魅了され、彼女を住まいに招いた。エンリルは彼女に性交渉を仄めかした。娘は嫌がった。「私の膣は小さすぎます。まだ交合を知らないのです」エンリルはキスを仄めかした。「私の唇は小さすぎます。まだ、キスを知らないのです」エンリルは笑って彼女を抱きしめてキスし、彼女の子宮に精子を注いだ。この行為は、スドの司令官でエンリルの愛人であるニンマーに報告された。ニンマーは、ふしだらな男、と蔑み、裁判に掛けることにした。すべての都市からエンリルを追放し、“戻れない土地”への流刑が決定された。

アブガルが操縦士となったが、彼らの目指したのは“戻れない土地”とは別の土地だった。そこは、かつてエンキとアブガルが“恐怖の武器”を封印した場所であった。アブガルはエンキの秘密を告げ、エンリルを残して帰還した。

エディンではスドが妊娠し、ニンマーがエンキに伝えた。彼らはスドを“裁定を下す7人”の前に連れて来た。スドはエンリルを配偶者とすることを承認

した。そのことは、アブガルによって流刑地にいるエンリルに伝えられた。そして、スドを娶ることでエンリルは流刑から戻され、恩赦された。スドはその後ニンリル、“司令官のレディ”と称号を与えられた。2 人の間には、ナンナル（輝く者、の意）が生まれた。彼は、地球で最初に生まれたアヌナキであった。

*エンリルは強姦によって追放された。これでは、エンキの女癖を攻めることはできない。なお、別の書によると、スドが母に言われて、わざと裸で水浴したという。エンリルが小川の側を散歩する習慣のあることを知っており、彼が誘惑することを期待してのことである。つまり、スドの母の策略である。エンリルは、よほど地球の暑さが嫌いなのである。

(4) エンキとニンマー

・その後、エンキがニンマーを誘った。「エンリルへの想いは諦め、私と一緒になろう！」エンキは愛撫するように愛の言葉を囁いた。「君はまだ、僕の最愛の人なんだ」エンキはニンマーを抱きしめ、キスし、精子を子宮に注ぎ込んだ。「私の息子を産んでくれ！」彼女は妊娠したが、女の子だった。エンキはがっかりし、再び妊娠させた。またもや女の子だった。「君には息子を産んでもらわなければならない！」エンキは叫び、再びキスした。すると、ニンマーはエンキに呪いの言葉を吐いた。彼が食べ物を食べると内臓で毒となり、顎、歯、肋骨が痛んだ。高官イシムドがアヌナキを召喚し、ニンマーに苦痛を取り除くよう、懇願した。エンキが「金輪際、ニンマーの陰部から遠ざかる」と手を挙げて誓うと、彼女は 1 つずつ、苦痛を取り除いた。ニンマーはエディンに戻り、決してエンキやエンリルの配偶者となることはなく、アヌの命令は成就された。

*長男として生まれ、アヌとの約束があったエンキは、エンリルが正式に結婚したので、何が何でもニンマーに息子を産んで欲しかったのである。それにしても、このような苦痛を与えるのは、どんな方法なのだろうか。

・エンキは配偶者ダムキナと息子のマルドゥクを地球に呼び寄せた。彼女は“地球のレディ”ニンキという称号を与えられた。彼女と愛人たちによって、エンキは更に 5 人の息子をもうけた。順にネルガル、ギビル、ニナガル、ニンギシュジッダ、そしてドゥムジである。エンリルはニヌルタを呼び寄せた。エンリルはニンリルによって、イシュクルをもうけた。

*5 人の息子たちは、誰がダムキナの子で誰が愛人の子なのか、ここでは不明である。

(5) アンズの処刑

・地球で採掘された金はニビルで微細な粉にされ、天空に打ち上げられ、大気の裂け目は徐々に修復されていった。エンキはエリドゥに輝く住まいを造り、その地でマルドゥクに知識を授けた。ニブル・キでは、エンリルが圧巻的な“天

と地球を結ぶもの”を設置した。その中央では、ひっくり返ることのないプラットフォームの上に、天に向かって高くそびえる柱が設置されていた。そこから、エンリルの言葉が入植地に広がった。光線が高く上げられ、すべての土地の深奥部を探索することができた。その両目はあらゆる土地をスキャンし、その網は望まないものの接近を不可能とした。王冠型の部屋が、そのそびえ立つ家の中心で遠い天空を凝視し、地平線を見つめ、天の頂点を完成していた。その暗く神聖な部屋には、太陽の家族が 12 個の紋章で表され、“メ”には天空の神々の秘密の公式が記録されており、“運命の石板”が光彩を放っていた。エンリルはそれらによって、すべての到着と出発を監督した。

*ひっくり返ることのないプラットフォームとは、空中庭園の原型か。そびえる柱はテレビ塔のような大きなアンテナである。光線はサーチライト、両目はレーダーである。王冠型の部屋は、「生命の樹」に於けるケテル（王冠）及び輝く至高世界の原型である。ここは、エンリルの管制塔である。

また、バビロニア神話・伝承では、エンリルは「神々」と人々の父、空中の支配者であり、その指令は遠くに届き、その宣言は不変で、運命を定め、天と地球の契約を有し、地上の司令コントロールセンター都市ニップールからすべての土地の中心を照らす光線を放つことができ、目はすべてを見通すことができたと言われる。その原型がこれである。特に“すべてを見通す目”は、フリーメイソンなどの象徴であると同時に、「生命の樹」の至高世界から覗く絶対神の目でもある。

対するエンキは、本来の地球の支配者とも言われ、三日月と関連させ、“ニニギク、ニンイギク（目の清い神）”と言われる。ニニギノミコトやニギハヤヒの“ニニギ、ニギ”という言葉の原型であろう。

・地球で鉱山労働しているアヌンナキは、仕事と食事に不満を漏らし、地球の速い周期に悩まされたが、万能薬は少ししか配給されなかった。アヌンナキは数組毎にニビルに送り返され、新しい組がやって来た。ラームでは、もっと不満が大きかった。彼らは地球へ降りる時、休む場所を要求した。エンキとエンリルはアヌに助言を求めた。ラームのリーダー、アンズに地球に来てもらい、話し合うこととなった。エンキはアブズをアンズに見せ、鉱山の労働方法を公開した。エンリルはニブル・キへ招いて神聖な暗い部屋に通し、一番奥の聖域で、“運命の石板”をアンズに説明した。“着陸場所”に到着してくるイギギへの救済措置を、エンリルは約束した。この時、アンズの心の中は邪な考えで一杯になった。アンズは王子の中の王子であり、天空と地球の指示系統を掌握し、エンリルから権限を取り上げようと目論んでいた。疑念の無いエンリルはアンズを聖域の入り口に立たせておき、聖域を離れ、泳ぎに出掛けた。ここぞとばかりに、アンズは“運命の石板”を奪い、“空の部屋”で飛び去った。“着陸場所”には、謀反を起こしたイギギが彼を待っていた。彼らは、アンズが地球とラームの王であることを宣言する準備をしていたのである。聖域では輝きが衰え、ブンブンという音が静かになり、神聖な公式が停止した。

＊二輪戦車の機長アンズは王子の中の王子で、王族の末裔だった。そして、エンキを乗せて地球にやって来た。そのような身分の者の反逆は、“天界”に於ける反逆に反映されている。

・エンリルらはアヌに助言を求め、石板を取り戻すこととなった。ニヌルタが母ニンマーにけしかけられ、反逆者に立ち向かう任務を負った。アンズは石板を持っているため、自分は無敵だと思っていた。ニヌルタは“稲妻の矢”をアンズに向けたが、矢はそれた。戦闘は膠着状態となり、エンキが助言した。「“つむじ風”で嵐を起こし、粉塵でアンズの顔を覆い、彼の“空の鳥の羽”を逆立てるのだ！」エンリルはティルル（ミサイル）を造り、「“嵐を起こす武器”に取り付け、翼と翼が近づいた時、撃て！」と指示した。ニヌルタはエンキの助言に従ってミサイルを放ち、アンズは地上に落下した。そして、アンズを捕虜とし、石板を取り返した。反逆していたイギギらは降参した。裁判により、アンズは殺害光線により処刑された。同じ先祖の種子を受け継ぐアラルの横に埋葬すること、マルドゥクに遺体を運ばせて彼をラームの司令官とすることをエンキが提案した。エンリルはそれを認めた。

＊この時点から、マルドゥクがラーム（火星）の司令官となる。なお、この部分はシュメール神話では次のように記述されている。

“ある時、エンリルがプールで水浴びしている最中に、ズウと呼ばれる者が、王であることの証である「神々」と人間の運命を定めた運命表“運命の平板”を奪った。ズウはムウ（空飛ぶ機械）で遠くの場所に隠れた。「神々」は緊急会議を開き、ズウを逮捕して処刑することを決定した。（中略）ニヌルタは任務に就いた。矢をズウに放ったが、ズウは“運命の平板”を持っていたので、矢はズウに接近することができなかった。そこで、エンキが指示した。チルルム（ヘブライ語でミサイル！）を撃ち込め、と。チルルムは命中し、ズウの翼は墜ちた。ズウは逮捕され、“運命の平板”はエンリルのもとに戻った。”

翼が墜ちたズウの話は、ギリシャ神話の「イカロスとダイダロス」の原型でもある。

(6) アブズでの反乱

・エンキとエンリルは地球での反乱を警戒した。地球での滞在期間が長すぎると彼らは考え、ニンマーに助言を求めた。彼らは、彼女の変化著しい容貌に不安を抱いた。そして、もっと迅速に金をニビルに送り込めるようにすることで、意見が一致した。ニヌルタの提案により、エディンに“金属の都”、溶解精錬工場を設置することになり、その場所はバド・ティビラと名付けられ、発案者のニヌルタが司令官となった。その結果、ニビルへの金の流れは速くなった。金は二輪戦車によって運ばれた。

しかし、その頃エンキはアブズのアヌンナキに注意を払わず、そこにいる生物に魅了されていた。地球とニビルの違い、地球の周期と大気によってどのよ

うに病気が引き起こされるかなど、彼は解明したかった。そこで、湧き出る水のほとりに“生命の家”を建て、ニンギシュジッダを呼んだ。彼らは背の高い木々の間で暮らす直立猿人に夢中になっていた。

・ニヌルタは、バド・ティビラに送られてくる金鉱石が次第に減っていくのに気付いた。そして、エンリルの命により、アブズに派遣された。そこでは、労働に不満を持つアヌンナキが不平を言い、嘆き悲しんでいた。彼はエンキにこのことを話した。エンキはエンリルを呼び寄せた。鉱山労働の英雄たちが彼らの住まいを囲んだ。エンリルは彼らの言い分を聞き、アヌに助言を求めたが、金を入手するために仕事を続けなければならない、と言われた。そこで、エンキはニンギシュジッダを呼び、相談した。そして、ある解決策を提案した。「原始的労働者ルルを創ろう。それにアヌンナキの労役を負わせよう」周りのアヌンナキたちは仰天した。「そんな話は前代未聞だ」彼らはニンマーを呼び寄せた。彼女が言った。「1つの生命からもう1つへ、生命は長い間にわたって発達してきました。無からは何も生じないわ！」エンキはアブズの秘密を明かした。「我々が必要とする生物は、もう存在しているのだ！そこに、我々のエッセンスの印を付けるだけで良いのだ！」

9：第6のタブレットー遺伝子工学による人類の誕生ー原始的労働者の生産

(1)原始的労働者の創成決定

・他の指導者らは、エンキの説明に心奪われた。「アブズには直立猿人がいる。体が毛むくじゃらで、頭の毛はライオンのようだ」エンリルが言った。「エディンでは、そんな生き物は見たことがない」ニンマーが言った。「遙か昔、私たちの祖先はそんな風だったに違いないわ！それは畜生ではなく、見たらドキドキするでしょうね」エンキは“生命の家”に彼らを連れて行った。頑丈な檻の中に、それらはいた。「ニンギシュジッダが生命エッセンスを調べたら、2匹の蛇が絡み合っているようで、我々のものと酷似している。我々のエッセンスを混ぜ合わせれば我々の印が付き、原始的労働者が創りだされる！彼らは、鉱山労働を担うだろう」エンリルはたじろいだ。「我々の惑星では、奴隷制度はずっと昔に廃止された。奴隷のように働くのは道具であり、他の生き物ではない！新しい生物を、君は誕生させようとしているのだ！“創造”は、“万物の父”の手にだけ委ねられているのだ！」エンキが言った。「奴隷ではなく、助っ人だよ」ニンマーが言った。「その生物は、既に存在しているわ。更に能力を与えるだけなのよ」エンリルは言った。「由々しき問題だ。これは惑星から惑星へと旅してきた規則に反している。金を手に入れることが目的であって、“万物の父”に取って代わることではない」ニンマーが言った。「“万物の父”は私たちに知恵と理解を授けてくださいました。“すべての創造主”は、私たちの生命のエッセンスを知恵と理解力で満たされた。私たちはそれを使うことができる。そう、運命付けられているのでは？」「我々の理解力が我々をどこへ導こうと、そうしよう、我々は運命付けられている。我々は知識を使うことを、妨げられてはいない」とニンギシュジッダが言った。「運命は確かに変えられない。始まりから

終わりまで、それは決定されていたのだ。それは運命か、宿命か？私はそれが疑問なのだ。それを見極める必要がある」とエンリルは言った。彼らはその問題をアヌに問いかけた。



＊猿人の生命エッセンス＝DNA は 2 匹の蛇が絡み合っているようであり、アヌンナキのものと酷似していた。それを発見したのがニンギシュジッタである。彼の象徴は杖に 2 匹の蛇が絡まっている「カドゥケウスの杖」（左図）である。カドゥケウスの杖は、その形から「生命の樹」そのものであり、現在の病院のマーク＝医療の象徴である。

なお、エンリルは変えられない運命なのか、変えることができる宿命なのか、判断しかねている。

・ニビルでの議論は長く続いたが、ニビルを救うことが決定され、エンキはその結論を喜んだ。エンキはニンマーを助手とし、アヌンナキは労役へと戻って行った。いくつかの檻の中には、上半身と下半身が異なる生物がいた。ニンマーはそれらを怪物と言った。ニンギシュジッタは生命エッセンスの秘密、2 種類から採ったエッセンスの混ぜ合わせ方をニンマーに説明した。そして、どのように混ぜ合わせるのか、量はどうか、どの子宮で受胎を始め、どの子宮で出産させるべきか。そのために、ニンマーの力が必要なことを、エンキは説明した。そして、彼女はニンギシュジッタと共に、“メ” に隠されている神聖な公式を調べ、檻の中の生物を検査して言った。「アヌンナキの男性で 2 本足の雌を受精させましょう。そして、掛け合わせた子供を生ませましょう！」「我々はそうしたが、駄目だった。妊娠すらしなかった」とエンキが言った。

＊いくら DNA が酷似していても、いきなり異種間交配は不可能だった。

(2) 最初の人類アダムの誕生

・別の方法を試すよう、ニンマーが言った。地球の分が損なわれることなく、私たちのエッセンスを段階的に受け取るように。水晶の容器にニンマーはエッセンスの混合物を用意し、2 本足の雌の卵子をそっと置いた。そして、アヌンナキの種子を含んだ“メ”で受精させ、2 本足の雌の子宮に挿入した。今度は妊娠し、開腹して取り出すと、新生児が生きていた。しかし、上半身は毛むくじゃらで、下半身はアヌンナキに似ていた。成長を待つと、手は道具を扱うことには向かず、話すことはできなかった。そこで、何回か試行錯誤した。“メ”の中のエッセンスを注意深く検討し、1つの“メ”から少し、もう1つの“メ”から少し取り出し、メスの卵子に受精させた。耳が聞こえなかったり、視覚が弱かったり、足が麻痺したり、精液が漏れていたり、手が震えていたり、肝臓が機能していなかったりした。エンキは失望し、「原始的労働者はできない！」と嘆いた。しかし、ニンマーは「成功するまで続けよ、と私の心が駆り立てるの」

と言って、実験を続けた。

エンキが言った。「ひょっとすると、何かが不足しているのかもしれない。地球自身を形成しているもの、その成分が欠けているのではないか？ニビルの水晶ではなく、地球の粘土でそれを作ろう」エンキは、アブズの粘土を使うよう、指示した。ニンマーは、浄化する槽を粘土で作り、その中で混合物を作った。そして、2本足の雌の卵子をそっと置き、アヌンナキの血液から採取した生命エッセンスを、徐々に正確に容器に加えた。そして、2本足の雌の子宮に挿入した。受胎し、出産の時を待ちわびた。いよいよ、新生児を取り出すと、それは男の子で、姿は完璧だった。しかし、成長しても言葉を話せなかった。そこで、エンキは考えを巡らせた。「唯一、変えなかったことがある。それは、地球の雌に卵子を挿入したことだ。これが、最後の障害の可能性もある。もしかすると、アヌンナキの子宮が必要なかもしれない！」“生命の家”に沈黙が走った。彼らはお互い見つめあった。互いの胸の内を探りながら。ついに、ニンマーが震える声で言った。「賢いお言葉だわ、お兄様。それで、アヌンナキの誰が、自分の子宮を提供するのかしら？ひょっとすると、怪物をお腹に宿すことになるかもしれないのに」エンキが言った。「私の配偶者、ニンキに聞いてみよう。彼女に事情を詳しく話そう」すると、ニンマーが言った。「駄目よ、混合物は私が創ったの。見返りも危険に身をさらすことも、私の責任であるべきよ！私が子宮を提供するわ！」エンキは頭を垂れ、彼女を抱きしめ言った。「ならば、そうすれば良い」そして、その通りにした。妊娠は地球のより長く、ニビルのより短かった。そして陣痛が始まり、男の子が誕生した！エンキは彼を抱きかかえ、下半身をぴしゃりと叩くと、正常な音を口から発した。エンキは新生児をニンマーに手渡し、彼女は両手で掲げた。「私の手が創り出したのよ！」と勝ち誇ったように叫んだ。

彼らは新生児の手足、容貌、各器官の機能を調べ、いずれも問題なかった。頭髮は漆黒で、毛むくじゃらではなく、肌は滑らかでアヌンナキの肌のようにだった。その色は、どす黒い血のようで、アブズの粘土のような暗褐色であった。彼の男性器を見ると、アヌンナキのものとは異なり、前部が皮膚で覆われていた。エンキが言った。「この包皮で、地球人と我々を区別しよう」ニンギシュジッタが言った。「我々は完璧さに到達した！」エンキはニンマーに、名前を付けるよう促した。彼女は新生児の肌を指で撫で、「アダムゥと呼ぶわ。“地球の粘土のような者”、それが彼の名前よ」

*人類の祖の、誕生の瞬間である。この場合の“メ”とは精子のこと。雄の精子に、アヌンナキの精子から DNA の一部を抜き取って導入し、それを体外受精させた。最終的には、エンキの DNA を血液から採取し、猿人の雌の卵子と体外受精させたのである。地球の粘土から作った容器といっても、素焼きの土器などではなく、ガラス容器である。さもなくば、雑菌だらけで、浄化する槽とはなり得ない。

“アヌンナキのような”と表現されているのは、肌の滑らかさであって、肌や頭髮の色はそうに表現されていないことから、アヌンナキの肌は暗褐色ではなく、頭髮も黒ではない。アダムゥは黒い髪で暗褐色の肌だから、現在の

アラブ系やインド系の容貌と言える。もちろん、このアダムウが聖書に於けるアダムの原型であることは、言うまでもない。

また、ニンマーは古代バビロニア文書では、“助産婦、利口なマミ”と呼ばれており、“ママ”の語源である。それは、このような“史実”に由来する。

シュメール神話では、「神」の血が地上の粘土と混ぜ合わされた、とある。血は神のエキス＝遺伝子である。粘土はアッカド語で“ティト”で、泥を意味する。その同義語はビサ＝湿地、ベサ＝卵であるから、粘土は“猿人の卵子”をも意味する二重語義である。ならば、血は「神」の遺伝子であると同時に精子でもある。また聖書では「我々の形に、我々に象って人を創ろう」と言っているの、毛むくじらの猿人の体毛が無くなって“裸の猿”となり、歯並びも猿人とは異なるのである。つまり、「神々＝アヌンナキ」の形態は現在の人間のようなののである。

なお、地球の粘土から作った容器が、DNA に対してどのように作用しているのかは、不明である。

(3) ティアマトの誕生

・「彼のような労働者が、たくさん必要とされているのです。これから先、誰が子宮を提供するのですか」とニンギシュジッダが言った。ニンマーが 1 つの解決策を提案した。彼女は、シュルバクにいる女性治療者たちを呼び寄せ、課せられた任務を説明した。そして、強制ではなく希望を募った。すると、7 人が任務を引き受けた。その名をニンギシュジッダが記録した。ニンマ、シュジアンナ、ニンマダ、ニンバラ、ニンムグ、ムサルドウ、そしてニングンナである。

今度は、アダムウから生命エッセンスを抽出した。そして、ニンマーはアダムウの男性部分に切込みを入れ、血を滴らせた。「これを“生命の印”とし、肉体と魂が混ぜ合わされたことを、永遠に宣言させよう！」彼女はそれぞれの容器に、血を 1 滴ずつ落として混合物に加えた。ニンマーは「この粘土の混合物の中で、地球人とアヌンナキが結び付けられんことを！」と言って、呪文を唱えた。「この 2 つのエッセンスに統一あれ！1 つは天の、1 つは地球のものが一緒にされ、地球のものとニビルのものが、血によって血縁関係を結ばれんことを！」ニンギシュジッダは、この言葉も記録した。

*割礼の原型である。アヌンナキには包皮が無く、地球人には包皮があり、これがアヌンナキと人類を区別する印である。その包皮を切り取ることが割礼であるが、そうすることにより、容貌はまさしくアヌンナキ＝「神々」そのものとなる。これこそが、割礼による“選ばれた民”の真意である。

・出産のヒロインたちの子宮に、卵子は挿入された。受胎があり、出産があり、7 人の男児が誕生した！そして、“正常”であった。しかし、この方法は過酷すぎるし、時間も掛かりすぎた。そこで、雌を創ることをエンキが提案した。地球人自身で生殖させるのである。アダムウの対を成す者を創るためには、1 人、アヌンナキの子宮が必要であることを、ニンギシュジッダが述べた。

今度はニンマーではなく、ニンキを呼び寄せ、彼女が任務を引き受けた。“調

整”はニンギシュジッダが行った。ニンキの子宮に卵子が挿入され、受胎したが、割り当てられた時に出産の印は来なかった。更に月を数え、10ヶ月目、“邪悪な宿命の月”と彼らは呼んだが、ニンマーが帝王切開して取り出すと、女の子が誕生した！彼らは新生児の手足、容貌、各器官の機能を調べ、いずれも問題なかった。頭髪は浜辺の砂のような色で、毛むくじゃらではなく、肌は滑らかでアヌンナキの肌の滑らかさと色だった。「この子は君に姿がそっくりだ」とエンキが言った。そして、ニンキが名付け親となり、ティアマト、“生命の母”とされた。地球の大元となった、あの古い惑星に因んで。

*ティアマトの容貌としては、髪は浜辺の砂のような色なので、薄い茶色あるいは栗毛色である。肌の色は、わざわざ“アヌンナキと同じ色”と表現されている。アダムウはどす黒い粘土のような暗褐色なので、もしティアマトが黒人ならば、更にどす黒い、などという表現になるはずである。あるいは、アヌンナキが黒人ならば、アダムウの色はアヌンナキよりも薄い色、などと表現されるはずである。また、後に紹介するが、エンキが地球人女性に生ませたジウスドラの肌は雪のように白く、地球人には見えない容貌とある。つまり、白人系はこの時点ではまだ誕生していないことになるので、白い肌でもない。そうすると、現在の地球人を見て解る通り、栗毛色に合う肌色は、黄色味を帯びた肌、モンゴロイドのような色、ということになる。つまり、アヌンナキの肌はモンゴロイド系である。ただし、アダムウの頭髪の色を指してわざわざ“漆黑”と言っているから、黒髪ではない。誕生した女の子を見て、姿がニンキにそっくりだ、とエンキが言っていることから、アヌンナキの髪色は“浜辺の砂”のような栗毛色である。

そして、ティアマトは聖書に於けるイブの原型である。

(4) 生殖能力の付加

・ニンマーはティアマトの生命エッセンスを抽出し、アダムウの時と同様にして、7人のヒロインたちの子宮に挿入した。そして、7人の女子が誕生した。エンキが言った。「彼らをお互いに番わせよう。そして、彼らの子孫が増え、アヌンナキの労働を担うことになるのだ！アダムウとティアマトについては、労働の苦役から守られる。彼らをエディンに連れて行こう」アダムウとティアマトはエディンに連れて行かれた。エンリルは彼らを見ると、彼の不満は減少した。他のアヌンナキも見に来て、驚嘆した。

しかしアブズでは、期待していた地球人同士の受胎は観測されなかった。ニンギシュジッダは昼夜を問わず観察し、実際に男性は女性に精子を注入していた。しかし、受胎すら起こらなかった。エンキは熟考した。そして、かつて掛け合わせた生物のどれひとつも、子をもうけなかったことを思い出した。そこで、ニンギシュジッダがアダムウとティアマトの生命エッセンスを抽出し、アヌンナキのものと比較した。彼はエッセンスの絡まりを解いた。エッセンスは「生命の樹」の上に、22本の枝のように配列されていた。アヌンナキの方には、更に2つの小片が存在した。「1つは男性、1つは女性由来です。それら無しでは、出産は起こりません！アダムウとティアマトの雛型には、それらは含まれ

ていないのです！」ニンマーは取り乱し、エンキは落胆した。しかし、ニンギシュジッダは解決策を提案した。エンキ、ニンマー、ニンギシュジッダとアダムウ、ティアマトだけが部屋に残り、鍵をかけた。ニンギシュジッダは 4 人を眠らせ、感覚を奪った。そして、エンキの肋骨から生命エッセンスを抽出し、それをアダムウの肋骨に入れた。また、ニンマーの肋骨から生命エッセンスを抽出し、それをティアマトの肋骨に入れた。そして、切開した場所を塞いだ。これにより、「生命の樹」に 2 本の枝が付け加えられたのである。

アダムウとティアマトは、エディンの果樹園を自由に歩きまわれるようになった。彼らは自分たちが裸であることに気付き、男らしさと女らしさを知った。そして、ティアマトは葉っぱで前掛けを作った。

*体外受精による異種交配種アダムウとティアマトには生殖能力が無かった。その原因は、性染色体が存在しなかったことによる。ニンギシュジッダは、肋骨からの“骨髄移植”により、生殖能力付加に成功した。22 本の枝とは染色体のことであり、2 つの小片が性染色体 (XY、XX) である。

ここで「生命の樹」が登場した。“「生命の樹」の上に”という表現は解りにくい、この文章からすれば、「生命の樹」とは染色糸である。細胞核の中に染色糸があり、それが細胞分裂の際に染色体となる。染色体は DNA とタンパク質の結合物である。22 本の枝＝染色体は、カッパラの「生命の樹」に於けるパスの数の原型である。

また、この話からすると、実質的に人類を創成したのはエンキではなく、ニンギシュジッダということになる。エンキは監督者、リーダーである。そして、人類男性の Y 染色体はエンキ、女性の X 染色体はニンマー由来である！

(5) エディンからの追放

・エンリルが果樹園の木陰を散歩していると、アダムウとティアマトに遭遇した。そして、彼らが前掛けをしていることに気が付き、エンキに説明を求めた。生殖の問題について、エンキは説明した。すると、エンリルは激怒した。「私は最初から反対だった。“創造主”のような振る舞いに、私は反対だった！ニンマーとニンギシュジッダを危険に曝し、君の作品は失敗したのに関わらず、我々の生命エッセンスの最後の小片を、これら畜生に与えてしまったのだ！ことによると、我々と同じ生命サイクルを授けてしまったのかもしれないぞ！」エンキはニンマーとニンギシュジッダを呼び寄せ、エンリルをなだめた。「彼らは生殖能力を与えられただけで、“長寿の枝”を与えたわけではありません」とニンギシュジッダが言った。「どちらを選ぶの、お兄様。すべてを失敗に終わらせるか、それとも、生殖によって地球人に労役を負わせるか」とニンマーが言った。「エディンから追放し、アブズへ行かせろ！」とエンリルは怒って言った。

*エンリルが果樹園を散歩していたので、聖書に於けるエデンの園は「知恵の樹」と「生命の樹」に生る（なる）果実の喩えとなっている。「知恵の樹」に絡まる蛇とは、責任者としてはエンキ、実質の実験者としてはニンギシュジッダである。「我々に似せて人を創ろう」と言った主はエンキであるが、エデンの園

に於いて、アダムとイブを追放した主はエンリルのことである。

ここで、「神々」と人間の交配について、シュメール神話と聖書の「創世記」を比較する。

A：シュメール神話

“10 万年前に神々の子らと人間の娘が交配した。”

B：創世記

“当時もその後も、地上にはネフィリムがいた。これは、神の子らが人の娘たちのところに入って産ませた者であり、大昔の名高い英雄たちであった。”

どちらも、神の子らと人間の娘が交配したことになっている。創世記から、神の子らとハイブリッド人類の女性との間で発生したのがネフィリムである。ヘブライ語のネフィリムはシュメール語ではアヌンナキと同意語であり、意味は“降りた者たち”である。よって、区別するなら「神々」がアヌンナキであり、アヌンナキと人類の女性とのハイブリッドがネフィリムとなる。表現上、ネフィリムは「神の子」の子だから「名高い英雄たち」となる。

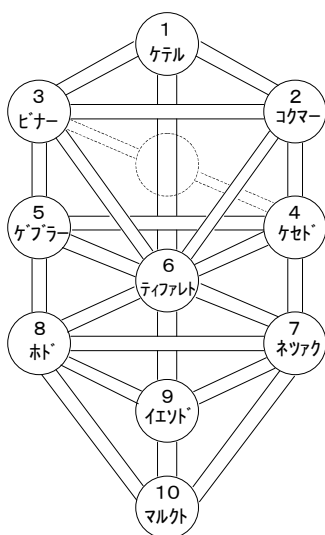
また、創世記でイブが蛇に唆され、アダムとイブがエデンから追放される様子は、次のようにある。

“主なる神が創られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか」女は蛇に答えた。「私たちは園の木の果実を食べても良いのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神はおっしゃいました」蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。それを食べると目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神はご存じなのだ」女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。2人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、2人はイチジクの葉を合わせ、腰を覆うものとした。

(中略) 神は言われた。「お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなど命じた木から食べたのか」アダムは答えた。「あなたが私と共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました」主なる神は女に向かって言われた。「何ということをしたのか」女は答えた。「蛇がだましたので、食べてしまいました」主なる神は、蛇に向かって言われた。「このようなことをしたお前は、あらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で呪われるものとなった。お前は、生涯這い回り、塵を食らう。(中略) 人は我々の1人のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となる恐れがある」主なる神は、彼をエデンの園から追い出し、彼に、自分がそこから取られた土を耕させることにされた。こうしてアダムを追放し、命の木に至る道を守るために、エデンの園の東にケルビムと、きらめく剣の炎を置かれた。”

この場合の“主なる神”とはエンリルであり、蛇とは人類に生殖能力＝知恵を与えたエンキ（とニンギシュジツダ）である。そして「知恵」とは生殖能力だけではなく、最後の方にあるように、善悪を知り、「生命の樹」の奥義を知ることによって、魂が永遠に生きる＝「神々」などの精神支配から開放される者となることでもある。「知恵」を与えた蛇は、そもそも地上を這うもののなのに、「お前は、生涯這い回り、塵を食らう」と“主なる神”から言われ、矛盾している。これは、蛇が蛇そのものではなく、エンキだからである。エンキは人類に「知恵」を与えた賢者である。

ならば、「知恵の樹」と「生命の樹」は「合わせ鏡」となる！「知恵の樹」と「生命の樹」を「合わせ鏡」とすることにより、秘密（封印）を解く鍵とした。これらはすべて、エンキの「知恵」によるものである。「合わせ鏡」によって、男神イエスが女神アマテラスに変化したように、呪われた蛇は「生命の樹」では呪いが解ける。そして、「（合わせ鏡）ではないが」「知恵の樹」の蛇は地に落とされて墮天使ルシファー＝サタンの象徴とされてしまったが、実はサタンではなく、「生命の樹」を上昇して至高世界に達する蛇神である。



「生命の樹」では、マルクトからケセドまでの7個のセフィロト、6本のパス、合わせて13の段階を経ることにより、「知識の門」の前に達する。これ故、13は神聖数字なのである。そして「知恵」を身に付けることにより、「知識の門」を通過して精神的に神界＝至高世界に達する。まさに、「知恵（の樹）」があつてこそその「生命の樹」と言える。

エンキは人類に対する慈悲、エンリルは厳しさ、そしてアヌは天空の大神だから、「生命の樹」の各柱の対応は次のようになる。

・峻厳の柱：エンリル、均衡の柱：アン、慈悲の柱：エンキ。

8：(5)でも述べたように、エンリルの目はすべてを見通すことができた、とされており、エンキは“ニニギク（目の清い神）”と言われたことから、「生命

の樹」の至高世界から覗く目は“すべてを見通す目”とされた。ただし、「生命の樹」に於いては、後ろ向きのアダム・カドモンの右側（慈悲の柱）が重要であるから、ヤハウエ＝イエスに反映される“すべてを見通す目”は後ろ向きの右目＝正面向きとした場合の左目の形であり、これが“エンキ＝ニニギクの目”である。対して、左目＝正面向きとした場合の右目は“エンリルの目”であり、人類に対する厳しさを表す。これが、後に改竄されて“エンリルの目”は“ルシファーの目”となった。フリーメイソンのシンボル“ピラミッド・アイ”などは、ピラミッドの頂上から“エンリルの目”が覗いている。

また、“主なる神”エンリルは天使ケルビム＝アヌンナキの見張りをエデンの園＝アヌンナキの居住区に置き、人類が浸入できないように、きらめく剣の炎で守らせた。この剣は、レーザー光線銃あるいは司令塔から照らされるサーチライトの光である。

10：第7のタブレットーニビルの接近ーエンキとの自然受精による人類誕生

(1)イナンナとウツの誕生

・アダムウとティアマトはアブズへ追放された。エンキは木々の囲いの中に彼らを置き、為るがままにさせた。そして、新生児が何人か誕生した。彼らの成長は早く、アダムウとティアマトが他の息子や娘を産む頃には、最初の子たちは彼ら自身で子をもうけていた。ニビルの1 シャルが過ぎる前に地球人は増殖し、配給される食べ物だけでアヌンナキと共に働く、熱や埃に不平をこぼさなかった。地球から届けられた金で、ニビルの大気は修復されていった。アヌンナキの間でも、結婚と出産があった。エンキとエンリルの息子たちは、異母妹、治療のヒロインたちを配偶者とした。彼らの子供はニビルの寿命サイクルを授かっていたが、地球のサイクルによって早まっていた。ニビルでハイハイを始めた頃、地球では走り回っていた。ナンナルとニンガルに双子が生まれた時の喜びは特に大きかった。イナンナ、ウツと名付けられ、地球上に三世代のアヌンナキが揃った。

* 遺伝的にニビルの性質を受け継いでいても環境に左右されるのであり、これは生物学的に見て、極めて興味深い。また、三世代揃うことの喜びは、神宮式年遷宮の最初の大きな行事である“宇治橋渡り初め”が三世代揃った夫婦によって始められることの原型であろう。

(2)ニビルの接近に伴う天空の混乱

・地球では気温が上昇し、植物が繁茂し、野生動物が土地を蹂躪した。雨は多くなり、川は勢いよく流れ、暑さが増していった。そして、南極では氷が解け始め、ゴロゴロと地球が鳴っていた。海では砂洲が無くなった。陸地では火山が噴火し、地面が震えた。アブズの先端“下の方の世界”に、エンキは観測所を設置し、息子のネルガルとその配偶者エレシュキガル（イナンナの姉）にその指揮を委ねた。未知のことが起ころうとしていることを、ネルガルはエンキに告げた。

* “下の方の世界”とは、アフリカ南端である。それは、エリドゥなどから見て下の方、ということである。そして、“天界”のニビルに対して、“冥界”の原型となった。

・ニブル・キでは、エンリルが天の周回路を観察しており、天空に混乱が起きていることに気付いた。ラーム（火星）からは、マルドゥクがエンキに不平をもらした。「強い風がかき乱しています。厄介な砂嵐です。“打ち出し細工のブレスレット”で混乱が生じています」その後、地球では空から硫黄が降ってきた。それらは空で爆発し、燃え盛る炎となった。晴れた日に、それらは暗闇を引き起こし、嵐と共に邪悪な風が暴れまわった。石のミサイルのように、それらは地球を攻撃した。月とラームも大破壊を被り、3つの星は顔が数え切れない傷で覆われた。エンキとエンリルは、アヌに緊急のメッセージを発信した。

ニビルから返答があった。「天空で、地球を含めた7つの星が一直線に並んでいる。ニビルが太陽に接近したことにより、“打ち出し細工のブレスレット”から細々したものをずらしてしまった！」天の棒を無くし、ラハム（金星）はムンム（水星）と太陽の側にうずくまり、彼女の壮麗な住まいを捨て、天空のニビルに引きつけられ、天の女王になろうとしていた。彼女を鎮めるため、ニビルは天の深遠から、かつてのティアマトの衛星を出現させた。空の地平線から中心に掛けて、火を吹くドラゴンのように、その尾は伸びていた。日中、それは地球の空を暗くし、夜には月の表面に呪いを掛けた。ラハムは天体の兄たちに助けを求めた。すると、キングゥ（月）、かつてのティアマトの保護者が応じた。ドラゴンを捕まえるため、キングゥは急いだ。衝突は凄まじく、大嵐が巻き起こり、衝撃で慄き震えた。その後、ニビルは遠く離れた住まいに戻り、天空は落ち着きを取り戻した。

*ニビルの接近が原因で、天空の大惨事がもたらされた。軌道をずれた小惑星が地球、月、火星に降り注いだ。ラハム＝金星はニビルの重力に捉えられ、自転方向が逆転した。そして、かつてのティアマトの衛星が月に激しく衝突した。現在でも月の地震である月震が観測され、アポロ着陸時の震動、というもってもらしいことが言われているが、真相はこの衝突の震動であろう。月の中は空洞であり、大気も無いため、震動がなかなか減衰しない。

・エンキ、エンリル、マルドゥク、ニヌルタが大惨事の調査に取り掛かった。エンキは地球の土台を調べ、ニヌルタは溪谷が揺れた場所を調べた。ニヌルタは、硫黄ミストと瀝青（アスファルト）を発見した。マルドゥクはラームを調べ、大気がダメージを負っていた。彼は地球に帰りがた。エンリルはラームの中間ステーションを捨て、エディンに“二輪戦車の場所”を設置するよう主張した。それは、最初の着水から数えて、80 シャル過ぎた時のことだった。

*約 16 万年前の出来事である。

(3)エンキとマルドゥクの月への旅

・ニヌルタの進言により、エンリルは“二輪戦車の場所”をバド・ティビラの近くに設置する計画をアヌに伝えたが、エンキは地球の重力がラームよりも大きく脱出しにくいことを理由に、月を提案した。以前に地球を来訪した時、月の可能性を考えていたアヌは、先に月を調べるよう命じた。エンキはその決定に大いに喜んだ。エンキは常に月に魅せられていたからである。満ち欠け、太陽との位置関係は、エンキにとって不思議中の不思議で、その秘密を解き明かしたかった。そして、マルドゥクをお供にし、ロケットで月に向かった。大気は呼吸に不適當で、鷲のヘルメットを着用した。重力が弱いので、彼らは易々とあちこち行ったり来たりした。月の表面は、ドラゴンの産物によって乾燥と荒廃が支配しており、中間ステーションとしては不向きだった。マルドゥクはすぐに帰還するよう言ったが、エンキは留まって月、地球、太陽の関係を調べるよう提言した。

*地球からの初の月面着陸は、エンキとマルドゥクである。米国がアポロで着陸したが、米国の象徴は“双頭の鷲”で象徴的である。米国は、このようなシュメールの史実を知っているのである。だからこそ、シュメールのあったイラクに駐留し、関連資料を根こそぎ略奪している。

エンキは月の満ち欠けに魅せられたので、三日月が象徴である。東洋のお月見は、エンキに端を発するのである。

・彼らは地球についての動きを観察し、地球の6周、太陽の周りを12周掛けて、地球の年を測定した。2つの星の絡み合いが、太陽もしくは月の明かりが見えなくなる現象を記録した。それから、金星と水星についても観測した。また、エンキはチャート上に地球と月の位置を記し、ニビルの動きによって、その大きな帯の幅の輪郭を描いた。それを“アヌの道”と名付けた。エンキは天空の星々のグループ分けにも魅了され、星座を描き出し、天の経路によって、水平線から水平線まで12の星座を描いた。また、“アヌの道”の下側の天には、そこからニビルが侵入してくる場所に帯状の道を設計し、“エンキの道”と名付けた。それに対して、上側の天空の道を“エンリルの道”と名付けた。それぞれの“道”には、各々12の星座が割り当てられた。エンキはマルドゥクに、地球の歳差運動についても示した。「私が初めて地球に到着した時、そして私で終わる天の持ち場を“魚たちの位置”と名付けよう。私の称号“水の彼”に因んで」エンキはマルドゥクそう言ったが、マルドゥクは次のように反論した。「地球とニビルでは、知識と支配階級は一致していません。原始的労働者を創ろうとした時、私の母ではなく、あなたはニヌルタの母を呼び寄せました。助手として私ではなく、あなたは若いニンギシュジッダと共に生と死の知識を分かち合いました。あなたはアヌの長男ですが、エンリルが正統継承者です。あなたが最初にエリドゥを築いたのに、そこの支配者はエンリルです。金はニヌルタの都市で集められて出荷量が調整されており、ニビルの存続は、彼らの手に委ねられているのです。私たちは、宿命によって覇権を奪われたのです！」エンキは無言で息子を抱きしめた。「私が奪われてきたものが、将来、お前のものとなるだろう。お前の天の時は来る。私の地位が、お前の地位に加えられるであろう！」

*黄道 12 星座など、エンキが決めたのである。歳差運動なども、エンキが観測したのである。ここでは、将来マルドゥクが覇権を握ることが預言されている。

(4) シッパールの司令官ウツ

・地球の何周期もの間、エンキとマルドゥクは地球を留守にしていたが、その間、地球での計画は何も実行されず、ラームではイギギが混乱していた。彼らは帰還すると、月は中間ステーションに向かないことをアヌに報告した。アヌは地球に“二輪戦車の場所”を建設するよう命じた。その司令官として、エンキはマルドゥクを推薦したが、ニヌルタのために取っておいたことをエンリルが怒って言った。アヌは 2 人の対抗心をそらすため、地球での新しい世代、ウツを司令官とすることに決定した。そして、その場所をシッパール（鳥の都、の意）とするよう提言した。ウツに指揮権が与えられ、彼のために鷲のヘルメットが作られ、彼は鷲の翼で飾られた。

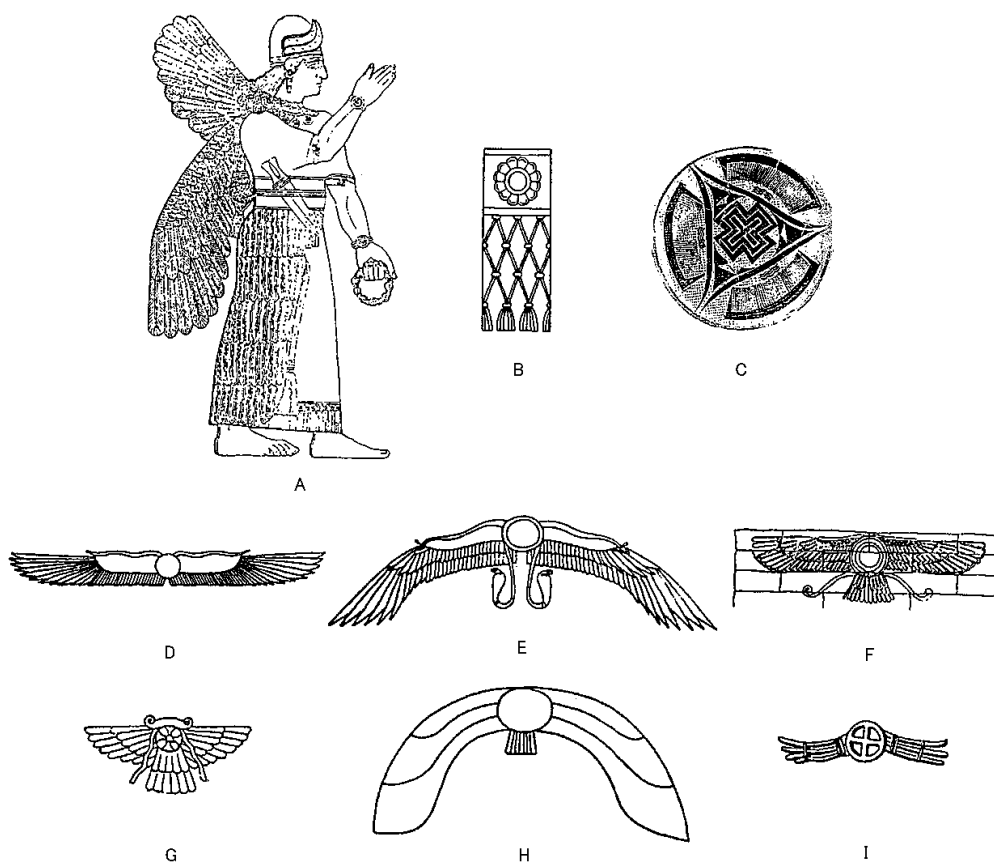
*シッパールには、ウツの神殿エバブバラ（光り輝く住宅）があった。そこは文明がシュメールで花開いた時、公正な法律の場所であり、ウツ自身が人々を裁いている姿も残されている。シッパールはシュメールの最高裁判所でもある。ハンムラビはウツの律法を石碑に記したが、それがハンムラビ法典であり、石碑の一番上にはウツが描かれている。ウツは正義を保証して圧迫を防いだので、“旅行者の保護者”と見なされた。ハンムラビはウツのことをアッカド語で“シャマシュ”と呼んだ。セム語では“太陽”という意味であり、ウツは“メソポタミアの太陽”に相応しい「神」だったのである。ウツの別名が“バブバル＝光り輝く者”であり、光を注ぎ、“天と地球を照らす者”であった。ならば、これは名称的に天照大神である！

また、“ウツ”とは正確には“輝き進む者”の意味であり、アッカド語ではシェム・エシュと言う。シェムはムーであるもの＝空飛ぶ機械、エシュは火であるから、シェム・エシュは“火を噴くジェット機、ロケットの男”という意味である。ウツが管理していたシッパールは“鳥”を意味し、宇宙空港だったのである。

また、更なるウツの別名シャマシュは“シェムと鷲たちの離発着の場所を管理する神”という意味でもある。ウツら「神々」は鷲の紋章を付けた制服を着用していた飛行士でもある。鷲の嘴のように見えるのはゴーグルである。その図を A、B に、併せて着陸地点の印を C に、「神々」の星ニビルの特徴を D～I に示す。A は太陽神ウツである。

両手首に巻かれたものは、B のような図形である。これは、菱形の部分が中高世界、並ぶ 3 つの菱形が 3 本の柱を表す「生命の樹」である。上部の至高世界には、12 人の「神々」を表す「十二紋菊」が描かれている。

着陸地点の印は大きく見て“丸の中に十字”であり、十字の周りは六芒星＝ダビデの星をデフォルメした図形である。



ニビルの象徴としては、EやFが解りやすい。一見すると、人工衛星のようにも見える。Hは縦に3つの部分に分けられ、横に3層あるから、「生命の樹」である。そして、Iは中心が“丸の中に十字”である。ニビルの象徴は大神アヌの象徴でもあり、アヌ＝あん＝阿吽であるから、これは＜日本の真相＞で述べた“丸の中に十字”そのものである！そして、イエスが生きていた頃の公用語はギリシャ語であったから、アルファでありオメガ、ともなる。（ただし、必ずしもアヌ＝イエスというわけではない。）

シュメール語は膠着語といって、助詞を付けることにより成立する言葉であり、日本語や韓国語と類似しているが、このような“言葉の仕掛け”から、シュメール語と日本語は直結していることが解る！というか、そのように日本語を作ったと言える。

なお、米国の宇宙飛行士は鷲のマークを付けているが、シュメールのこのような粘土板に描かれている絵を知ってのことであろう。

・シッパールが完成すると、アヌは直接見に来た。祝宴が催され、イナンナが歌と踊りを披露した。アヌは愛情をこめて彼女にキスし、“アヌの最愛の子（アンニツム）”と呼んだ。アヌが帰還すると、マルドゥクは自分の“空の船”で、

地球を良く知るために、国中を放浪した。ラームのイギギの管理も、ウツに任せられた。

*イナンナは大神の前で歌い、踊った。天宇受売命は天照大神を岩戸から引き出すために踊り、神楽など芸能の祖となった。その大元が、この話である。

(5) エディンへの人類入植

・アブズに限られていた原始的労働者を、エディンの英雄たちも欲した。その問題についてエンキとエンリルが話し合っている間に、ニヌルタが手下を連れて勝手にアブズへ行き、地球人たちを網で追い回して捕獲し、エディンに連れて来た。これには、エンキもエンリルも激怒した。「私がアダムゥとティアマトを追放したのに、お前が覆してしまった！」とエンリルは怒った。ニヌルタは、かつてアブズで発生した暴動がエディンで起きないようにするため、と答えた。エンリルは腹の虫が収まらなかったが、それを認めた。地球人たちは服を着ずに任務を遂行していた。男と女は絶えず番っており、増殖は速く、次第に食糧が減ってきた。当時、穀物はまだ無く、羊もいなかった。エンリルはエンキに何とかするよう、愚痴をこぼした。

(6) アダパとティティの誕生

・食糧難に対して、エンキは策を練っていた。彼は“文明化された人”を創り、彼らに穀物の種を蒔かせて耕させ、羊を飼わせようとした。どうしたら、これを達成できるのか？何が、生命エッセンスに足りなかったのか？エンキは地球人をよく観察した。そして、憂慮すべきことに気付いた。仲間同士で繰り返される交配によって、彼らは野生へと退化していた！エンキは高官のイシムドと共に、川を巡幸して観察した。そこに、水浴びして戯れる 2 人の野生的で美しい女性を見つけた。エンキはキスしたい衝動に駆られ、イシムドに聞いた。「彼女たちにキスしても良いかね？」すると、イシムドが言った。「さあ、行って、キスしなさい！」イシムドは舟を寄せた。1 人を呼ぶと、彼女は果実をエンキに差し出した。エンキは前かがみになって娘を抱きしめ、キスした。唇は甘く、胸は成熟して引き締まっていた。そして、彼女の子宮に精液を注いだ。エンキはもう 1 人も呼び、彼女がベリーを差し出すと、最初の娘と同じようにした。「この娘たちと留まり、妊娠するかどうか確認せよ！」とエンキはイシムドに命じた。日数が満ち、最初の娘がしゃがんで出産し、男児が誕生した。同じ日の夕暮れ、もう 1 人がしゃがんで出産し、女児が誕生した。1 日の夜明けと夕暮れに、その子たちは生まれた。イシムドはエンキに報告した。「誰がこのようなことを知っていたのか？アヌンナキと地球人の間で妊娠が成し遂げられ、私は“文明化された人”に生を与えたのだ！」とエンキは有頂天になった。「この行いは、秘密にしておくのだ。母親たちに新生児を授乳させるのだ。その後、私の家族に加える。そして、パピルス of 茂みの中で、葦の籠に入っている彼らを見つけた、と言うのだ」イシムドはその通りにした。エンキの妻ニンキはその子たちを気に入り、自分の子供として育てることとした。男の子をアダパ（捨て子、の意）、女の子をティティ（命を持つ者、の意）と名付けた。

*アダムゥとティアマトは、猿人の卵子とエンキらのエッセンスを含んだ精子による体外受精だったが、ここでは、エンキ自身がアダムゥとティアマトの子孫を妊娠させることができたのである。つまり、エンキが「神」ならば、人類は祖先を辿ると、誰もが「神の子」ということになり、これが“人は神の子”と言われる所以である。そして、“パピルスの茂みの中で、葦の籠に入っている彼らを見つけた”ことが、モーゼ誕生場面の原型である。

・2人は他の子供と違っていた。他の地球人より育つのが遅く、理解がずいぶん早かった。彼らには知性が授けられており、言葉をしゃべることができた。ニンキは器用なティティを気に入り、手芸を教えた。エンキはアダパに自ら教えを授けた。エンキはエンリルに知らせを送り、エンリルがエリドゥにやって来た。「荒野で新しい種類の地球人が生まれた。彼らには、知識を教えることが可能なのだ。ニビルから、蒔くべき種（たね）を降ろしてこよう。ニビルから、羊になる雌羊を降ろしてこよう。そして、人類に農業と羊飼いを教え、アヌンナキと人類が共に満腹になろう！」とエンキは言った。「彼らは実に、いろいろな意味で我々に似ている。荒野から自然に発生するとは、不思議中の不思議だ！」とエンリルが言った。イシムドがエンリルに呼び出されたが、エンキから言われたように言った。「信じられん！地球自身が“文明化された人”を生み出したのだ。この新種について、アヌに知らせよう！」アヌは知らせを聞いてびっくりした。「命のエッセンスによって、1つの種類からもう1つの種類を引き起こすとは、前代未聞ではないか！“文明化された地球人”が、アダムゥからこんなに早く出現するとは、前代未聞だ！その生き物は、ひょっとして、増殖可能か？」ニビルで学識者が熟考している間に、エリドゥで重大な出来事が起きた。アダパが性的関係でティティを知り、妊娠が起き、ティティが出産したのである。双子の兄弟を、ティティは産んだ。その知らせはアヌに送られた。アヌはとんでもないことを命じた。「地球人アダパをニビルに連れてくるのだ！」

*5：(2)で見たように、ニビルから生じた衛星“邪悪な風”と“北の風”がティアマトに衝突することより、現在の地球は誕生した。つまり、太古の大惨事により、ニビルから“生物の種（たね）”が地球にばら蒔かれたのである。だから、ニビルと地球の生物種が類似しているのである。そして、ニビルから与えられた小麦などの植物、羊などの動物が地球でも生育することが可能なのである。

11：第8のタブレットーニビルへの人類初の宇宙飛行ー文明の始まり

(1)アダパのニビル訪問

・ただでさえ、エンキが創作した人類のことを快く思っていなかったエンリルは、アヌの決定を良く思わなかった。「ニビルで彼は長寿の水を飲み、長寿の食べ物を食べる。我々アヌンナキと同じように、地球人の1人になろうとは…」ところが、エンキもアヌの決定を良く思わず、むつつりしていた。「誰が、こん

なことを考えたでしょうか？」しかし、アヌの命令には逆らえず、地球で生まれ、若くてニビルをまだ目にしたことのないニンギシュジッタとドゥムジをお供に、アダバをニビルに連れて行くことにした。

ニビルから迎いの“空の部屋”が到着し、アヌの高官イラブラトが降りて来た。彼はアダバとティティを紹介されると、実に我々にそっくりだ、と驚いた。エンキはアダバに忠告した。「お前はこれから、我々がやって来た惑星ニビルに行くことになる。我々の王アヌの前に引き出され、紹介される。お前は跪くのだ。そして、尋ねられた時だけ手短かに答えるのだ。お前には新しい服が与えられるので、それを着るのだ。そして、地球では見当たらないパンを与えられるが、そのパンは死だ、食べてはならぬ！聖杯に入った万能薬も勧められるが、その万能薬は死だ、飲んでではならぬ！お前と共に、ニンギシュジッタとドゥムジが旅をする。彼らの言葉に従えば、お前は生き延びられる！」「肝に銘じておきます」とアダバは答えた。出発の際に、エンキは2人の息子を抱きしめた。そして、ニンギシュジッタの手に、封印したタブレットを見えないように滑り込ませた。「我が父アヌに、こっそり渡すのだ」そう、エンキは言った。

*エンキ自身がアダバを創り出したのにも関わらず、アヌの決定にむっつりした。それは、エンリルの言葉から、アヌンナキと同じように長寿を授かってしまう懸念が浮かんだからである。そのため、アダバにニビルの食べ物や飲み物を口にしてはならない、と忠告した。万能薬は聖杯に入っているらしいが、聖杯といえばイエス。聖杯伝説の原型が、ここにある。

・彼らはシッパールの“天の二輪戦車の場所”へ行った。ニンギシュジッタとドゥムジにはイギギの服装が与えられ、神々しい驚のように装われた。アダバのボサボサの髪は剃られて驚のヘルメットを与えられ、腰巻の代わりに、体にぴったりした礼服を着せられた。アダバはニンギシュジッタとドゥムジに挟まれ、“上昇するもの”の中に納まった。合図と共に、それは轟音を立てて発射した。アダバは怯えたが、ニンギシュジッタとドゥムジが腕を添えて落ち着かせた。地球の大気圏から離れて宇宙の暗闇に飲み込まれていくと、アダバは再び動揺した。「元に返してくれ！」ニンギシュジッタがアダバの首に手を置くと、アダバは一瞬のうちに静かになった。

*イギギは火星にいたアヌンナキだから、イギギの服装とは宇宙服のことである。身分の高いアヌに謁見するためにアダバは髪を剃られたが、これが神や仏に仕える者の多くが、剃髪する原型である。

・ニビルでは好奇心が渦巻いていた。地球で生まれたエンキの子供たち、そして地球人に会えるためである。彼らはイラブラトによって王宮へ連れて行かれ、体を清めて香しい油を塗られ、相応しい衣服を身に着けた。イラブラトが先導し、その後ろにアダバ、それからエンキの2人の息子が続き、王座の部屋に案内された。そこには、王子と顧問たちが集まっていた。「我が孫息子たちよ！」と叫んでアヌはドゥムジとニンギシュジッタを抱きしめ、キスした。そ

して、右にドゥムジ、左にニンギシュジッタを座らせた。アヌはイラブラトに尋ねた。「彼は我々の言葉を理解するのか」「如何にも、主エンキから教わったのです」と彼は答えた。アヌはアダパを近くに寄せ、尋ねた。「名を何と言い、職業は何だ？」アダパは跪いて答えた。「私の名はアダパと言い、主エンキの家来です」すると、周りから大きなどよめきが起こった。「地球で信じられないことが達成された！祝賀を開こう！」とアヌが言った。彼は全員を宴会場に案内した。アダパはパンを勧められたが、食べなかった。ニビルの万能薬を勧められたが、飲まなかった。この行為にアヌは気分を害した。「(エンキは何故、このような無作法な者をよこしたのだ。天の道を彼に明かしてまで。) これこれ、アダパ、お前は何故、食べも飲みもせぬのだ？」「主エンキがお命じになったからです」「はても、奇妙なことよ」アヌはイラブラトとドゥムジに尋ねたが、彼らは知らなかった。ニンギシュジッタに尋ねると、彼は秘密のタブレット渡した。アヌは私室へ戻り、タブレットを解読した。

＊最も若い孫息子＝最も可愛い孫息子ドゥムジを右に座らせた。ドゥムジは後にマルドゥクの策略で死んでしまうが、アヌが重要な右側に座らせたことは、それを暗示しているかのようである。

・アヌは私室でタブレットを解読すると、アダパはエンキが地球人女性と交わって産ませた子であること、配偶者のティティもエンキの種であること、アダパには長寿は授けられず、死すべき運命であること、アダパの子孫が種を蒔き放牧することによって、地球に豊作がもたらされることが書かれていた。アヌは仰天し、怒っていいのか笑っていいのか、解らなかった。アヌはイラブラトを呼び寄せて言った。「エアは“地球の主”エンキとなった今でも、女癖は直っていなかった！規則はどうなっておる？王としては、どうすべきか」「惑星間での同棲には規則が存在しません！ただちにアダパを地球に戻し、ニンギシュジッタとドゥムジはもっと長く滞在させましょう」とイラブラトは答えた。アヌはニンギシュジッタを呼び寄せ、タブレットの内容を話した。そして、ニンギシュジッタに“文明化された人”の教師となるよう命じた。そして、ニビルの穀物の種子を与えた。ドゥムジは 1 シャルの間、ニビルに留まることになり、羊のエッセンスと雌羊と共に帰ることになった。帰りの旅の途中、ニンギシュジッタはアダパに、惑星の神々、太陽と地球と月の関係、地球の年（ねん）などについて教えた。

(2) アダパの帰還

・帰還すると、ニンギシュジッタはニビルでのことをすべてエンキに話した。エンキ笑って腰を叩き、思った通りに事が運んだ、と大喜びした。しかし、ドゥムジが残されたことは謎だった。エンリルは、彼らの迅速な帰還に困惑した。そして、ニンマーも呼び寄せ、ニビルでの話を聞くことにした。ニンギシュジッタはすべてを隠さず話した。エンキのことについて、アダパとティティのことについても。「私は規則を破っていない。食糧供給を安定化しただけだ」とエンキは言った。「規則は破っていないが、アヌナキと地球人の運命を、軽率な

行為によって決めてしまったのだ！今や、運命が宿命に迫り越されてしまったのだ！」エンリルは彼らに背を向け、去って行った。

＊エンリルは運命や規則を大切にする。ここでは、エンリルの言う事がもっともである。また、エンキにもドゥムジが残された理由が解らなかった。最も若い最も生が短い運命を暗示しているが如く。

(3) カ・インとアバエル

・エリドゥにマルドゥクがやって来た。父親と2人の弟の奇妙な活動の真実を突き止めようと、母ニンキに呼び寄せられたのである。エンキとニンギシュジッタは、マルドゥクには秘密を隠しておくことにした。アヌは“文明化された人”に魅了され、すぐに地球を満たさせるよう命じた、と彼らはマルドゥクに言った。

マルドゥクはティティに感銘を受け、その息子たちが気に入った。そして、ニンギシュジッタがアダバを指導している間、自分に彼らの教師をさせてくれるよう、エンキとエンリルに頼んだ。エンリルが「マルドゥクに1人を教えさせ、もう1人はニヌルタに教えさせよう」と言った。ニンギシュジッタはアダバ、ティティと共にエリドゥに留まり、数や書くことをアダバに教えた。双子のうち、最初に生まれた方をニヌルタは自分の都市バド・ティビラへ連れて行き、水路を掘ることや種蒔き、刈り取りなどを教えた。彼のことを“田畑で食べ物を育てる彼”、カ・インと呼んだ。もう1人の兄弟は、マルドゥクによって牧草地に連れて行かれ、馬屋の造り方を教えられた。そして“灌漑された牧草地の彼”、アバエルと呼ばれるようになった。彼らは牧羊を始めるため、ドゥムジの帰りを待った。ドゥムジがニビルから戻ると、羊のエッセンス、雌羊を連れて来た。しかし、これまで地球上には羊がおらず、子羊は天から地球へ落とされたことが無かった。雌の羊は一度も子を産んだことが無かった。「創造者」らは、“創造の部屋（遺伝子工学と家畜化施設）”と“形作る部屋（作物と家畜のための遺伝学研究所）”を“着陸場所”の純粋な土手に設置し、そこで穀物と雌羊の増殖が始まった。

＊ニビルからの贈り物が、単純に地球上で繁殖したわけではなかったのである。また、カインとアベルは実在した！カ・インがカイン、アバエルがアベルである。彼らの教師がそれぞれニヌルタ、マルドゥクだったのだ。それも、エンリルの命令である。なお、羊飼いと馬屋（厩）はイエスを暗示する。

・その後、ニヌルタとマルドゥクの指導の下、カ・インによって種蒔きと刈り取りが、アバエルによって牧羊が始められた。最初の作物が刈り取られ、最初の羊が成熟した時、初物の祝いをするよう、エンリルが布告を出した。

そして、その時が来た。エンリルとエンキの足下に、ニヌルタに導かれてカ・インが自分の供え物を置いた。また、マルドゥクに導かれてアバエルが自分の供え物を置いた。エンリルは彼らに祝福を与え、労働を褒め称えた。エンキはマルドゥクを抱きしめ、皆に見えるよう、子羊を掲げて言った。「食べるための

肉、着るための羊毛が地球へやって来た！」

この祝いの後、カ・インはむっとりしていた。エンキの祝福が無かったことを、不当に思ったのである。アバエルは、自分こそがアヌンナキを満たしていると自慢した。カ・インは、パンは自分によって供給され、魚と家禽でアヌンナキの食生活を豊かにしているのは自分だ、と主張した。彼らは冬の間中、口論し続けた。夏が始まると雨が降らず、牧草が減っていった。そこで、アバエルが群れを率いてカ・インの畑に追い立て、水路で水を飲ませた。彼らの間で喧嘩が始まり、拳で殴りあった。怒り狂ったカ・インは石を手に取り、それでアバエルが倒れるまで何度も殴り、彼から血が噴出した。カ・インは血を見て、アバエル、我が弟よ！と叫んだが、アバエルは死んでしまった。

虫の知らせで、ティティはアバエルの血が見えた。それは、カ・インの手に付いていた。恐ろしさ故に、ティティはアダパに話し、彼らの居場所に向かった。すると、死んだアバエルの側にカ・インが座っていた。ティティは絶叫し、アダパは頭に泥を被った。アダパはエリドゥに戻り、事の次第をエンキに告げた。

*現在も残る“初物の祝い”の習慣は、エンリルの布告によるものである。エンキにその気は無かったのだろうが、結果的には“初物の祝い”の時のエンキの態度が原因で、カ・インとアバエルの事件は起きてしまった。この場面が、聖書の中で主がカインではなくアベルの羊を祝福したことの原型である。カ・インには、まだ知恵が十分ではなかったので、石で殴り続けるとどうなるのか、解らなかった。

(4) カ・インの追放

・エンキは激怒して、カ・インの前に立ちはだかった。「お前は呪われてしまえ！そして、エディンから立ち去るのだ！アヌンナキや“文明化された人”の中に、留まっていたはならぬ！」とエンキは言った。エンキはアダパとティティに、アバエルの埋葬方法を見せた。埋葬の習慣は、彼らには知られていなかったからである。30日30夜、アダパとティティは喪に服した。

カ・インは裁きのためにエリドゥに連れて来られた。アバエルを失ったマルドゥクは、カ・インも殺害されるべきだ、と主張した。ニヌルタが、“裁定を下す7人”を招集することを提案した。しかし、ニビル出身でもない者に対してそんな話は聞いたことが無い、と反論したが、裁判は行われた。マルドゥクの怒りの主張により、ニヌルタは悲しみに包まれた。

そこで、エンキがマルドゥクを私的な部屋に連れて行き、事の真相を話した。アダパとティティはエンキの種子であること、従って、アバエルだけでなくカ・インもマルドゥクの異母弟（アダパ）の息子であること、カ・インまでいなくなったら、飽食が終わって暴動が発生してしまうこと、などを告げた。マルドゥクは抱腹絶倒し、追放に同意した。そして、エンキによって正式に判決が下された。「カ・インは海を越えた東方へ追放され、彼とその子孫たちは、肉体的に区別されることになる」そして、ニンギシュジッタによって、顔に髭が生えないよう、カ・インの生命エッセンスが変更され、配偶者としての妹アワンを伴い、カ・インは追放された。

＊カ・インを追放したのはエンキだった。カ・インが追放された地は、現在の南北アメリカ大陸である。確かに、インディオは髭の生えていない人が多い。カ・インは、俗説で言われているような黒人ではなかったのである。

(5) アダパの子孫

アダパの子孫が聖書の系図の基になっていることが判明したので、それを次のページに示す。四角の囲いが男、囲いの無い配偶者が正式配偶者、点線の囲いで名が無いのが側室である。また、() は聖書の対応人物を示す。

・カ・インとアバエルがいなくなったので、アヌンナキは飽食の危機を心配した。そこで、アダパとティティにもっと子を産ませることにした。ずっと娘が続いたが、95 番目のシャルによりやうく息子が生まれた。“再び命を結び付ける彼”サティと名付けられた。アダパとティティには、全部で 30 人の息子と 30 人の娘が誕生した。97 番目のシャルに、サティと配偶者アズラの間にエンシ、“人間らしさの長”が生まれた。アダパは彼に、書くこと、数、アヌンナキ、ニビルのすべてについて教えた。彼はエンリルの息子たちによってニブル・キに連れて行かれ、アヌンナキの秘密を教えられた。どのように香しい油を塗るのか、ナンナルが教えた。どのようにインブ果実から万能薬を調合するのか、イシュクルが教えた。それ以来、アヌンナキは“文明化された人”から“主”と呼ばれるようになり、アヌンナキ崇拝の儀式が始まった。その後、配偶者で妹のノアムからクニン、“窯の彼”が生まれた。彼はバド・ティビラでニヌルタの指導を受け、溶鉱炉と窯について学んだ。どのように瀝青で火を熾すのか、どのように溶解し精錬するのか、彼は教わった。98 番目のシャルの出来事であった。

＊聖書に於けるアダムとイブの大元はアダムウとティアマトである。しかし、“文明化された人”としてのアダムとイブはアダパとティティであり、この 2 人から“文明化された人”としての人類が始まった。サティは聖書に於いてセツ、エンシはエノシュ、クニンはケナンである。

油の塗り方を教えたのはナンナル（シン）であり、シンは中東やインドで崇拝されており、そのような名を持つ人も多く、確かに彼らは体に油を塗る習慣がある。インブ果実とは、ニンマーがニビルから持ち込んだ万能薬の元となる果実である。これは、後にブドウであることが判明する。

エンシ（エノシュ）の時代から、アヌンナキが「神々、主」として崇拝されるようになったのである。

・99 番目のシャルにクニンに息子が生まれ、マラル、“演奏する彼”と名付けられた。彼は音楽に優れていた。彼のためにニヌルタがハーブとフルートを作った。マラルはニヌルタに賛美歌を演奏し、娘たちと一緒にニヌルタの前で歌った。100 番目のシャルにマラルに息子が生まれ、イリド、“真水の彼”と名付けられた。ドゥムジが彼に井戸の掘り方を教え、牧草地の群れに水を供給した。この頃、イギギが頻繁に地球に到来した。彼らは天空から観測することを止め、地球で起こっていることを観察したいと望むようになった。ラームで彼らと共にいるよう、エンキはマルドゥクに強く求めたが、マルドゥクもイギギと同様、地球で起こっていることを観察したいと望むようになった。

*聖書ではハーブを手にするダビデが音楽の祖であるが、その原型はマラルである。ハーブとフルートは、ニヌルタが彼に与えたものだった。また、“文明化された人”の教師は、争いを避けるためか、エンリル側（ニヌルタ）、エンキ側（ドゥムジ）と、どちらかに偏ることは無かった。なお、イギギの頻繁な到来とマルドゥクのイギギへの加担が、後の混乱の引き金となる。

・102 番目のシャルに、イリドに息子が生まれ、エンキ・メ、“エンキによってメを理解した”と名付けられた。彼は賢くて、数をすぐに理解した。そして、天空と空に関するすべてに彼は興味を抱いていた。エンキは彼を気に入り、かつてアダバに明かした秘密を教えた。太陽の家族と12の空の神々について、月や年の数え方について、ニビルによるシャルの数え方について、エンキがどのように天空に星座を割り当てて12の位置を配したか、などである。エンキ・メはしきりに天空を探索したがったので、彼は2回、空の旅に出た。1回目はマルドゥクが同行し、ロケット船で月へ行った。そこでマルドゥクは、エンキから教わったことをエンキ・メに教えた。エンキ・メは地球に戻ると、“二輪戦車の場所”があるシッパールのウツの下に送られた。ウツは自分の“明るい住まい”に“地球人の王子”を落ち着かせた。彼は習ったことを書くためのタブレットを与えられた。そして、彼は儀式を終え、聖職の機能が始まった。エンキ・メは異母妹であるエディンニと共に、シッパールに住んだ。104 番目のシャルに息子が生まれ、マツシャル、“明るい水の側に住む者”と名付けられた。

2 回目の空の旅にもマルドゥクが同行した。彼らは太陽を周回してからラームへ行った。イギギはマルドゥクから、“文明化された人”について学んだ。“年代記”では彼について、天空に旅立った、死ぬまでそこに留まったと記されている。エンキ・メは天空に出発する前に文書に記録を残し、息子たちに知らせようとし、長男マツシャルに託した。ラギムとガイガドと共に学び、守るように、と。マツシャルの息子はル・マク、“強力な人”と名付けられた。ル・マクの時代、地球の状況は厳しくなっていた。ノルマを強化し、分け前を削減するために、アヌナキは彼を労働監督の長に任命した。

*エノクの原型であるエンキ・メの話である。聡明な彼はエンキに気に入られ、実際にアダバと同じように宇宙旅行したのである。そして、ウツに認められ、エンキ・メが初の聖職者となった。同様にあらゆる知識を教えられ、アヌナ

キ崇拝の儀式が始まったのはエンシからである。エンシは聖書でエノシュ、エンキ・メはエノクであり、非常に似た名前である。これは、両者がアヌンナキから知恵を授かり、聖職の原型となった象徴である。また、エノクが天空に旅立って留まったのも、これが原型である。

(6) アダパの死

・自分の生涯に終わりが近づいていることを悟ったアダパは、息子やその子孫全員に集まるよう、言った。カ・インも連れて来るように言ったので、サティはエンキに父の願いを申し出た。そこで、エンキはニヌルタを呼び寄せ、彼が教師役を務めたカ・インを連れてくるよう命じた。ニヌルタはカ・インを見つけると、アダパの下に届けた。カ・インとサティが父の前にやって来ると、カ・インがアダパの右に、サティが左に並んだ。アダパは視力が衰えていたので、識別するために息子たちの顔を触った。髭の有無で識別は可能だった。アダパは左にいるサティの頭に右手を置いて祝福した。「お前の種子で地球が満たされるように。そして、3本の枝を持つ樹として、お前の種子の人類は、“大いなる惨禍”を生き残るであろう」次に、右にいるカ・インの頭に左手を乗せて言った。「お前はその罪のために、生得権を剥奪された。だが、お前の種子からは7つの国が現れるだろう。彼らは、取り除けておいた領域で繁栄するだろう。遠く離れた国々に、彼らは居住するだろう。ただし、お前は弟を石で殺したので、お前は石によって終わる」これらの言葉を言い終わると、両手を垂らし、溜息をついて言った。「私の伴侶ティティと息子と娘たち全員を呼びなさい。私の魂が離れたら、川の側の私が生まれた場所に運ぶのだ。そして、私の顔を昇り来る太陽の方へ向けて、埋葬するのだ」と言い終わると、アダパの魂は去った。ティティは泣き叫んだ。カ・インとサティは遺体を布で包み、遺言どおり、父を埋葬した。アダパは93番目のシャルに生まれ、108番目の終わりに死んだ。地球人にしては長生きしたが、ニビル寿命は持っていなかった。アダパが埋葬されると、カ・インは母と弟に別れを告げ、ニヌルタが遠く離れた領域に戻した。そこで、カ・インは息子と娘たちを持ち、都を築いた。そして、築いている時に、落ちてきた石でカ・インは死んだ。

*カ・インは長男であるから右に、サティは弟であるから左に並んだのである。しかし、顔を触って2人を識別すると、アダパは右手を本来祝福されるべきサティの上に乗せて祝福した。3本の枝を持つ樹とは、後の大洪水である“大いなる惨禍”を乗り越えたジウストラの3人の息子セム、ハム、ヤフェトのことであり、これが「生命の樹」に於ける3本柱の原型である！そして、22本のパスは染色体を意味したから、まさにこの3人が大洪水後の人類の祖となって広がっていったということで、「生命の樹」の原型と言える。

カ・インの子孫は遠く離れた地、南北アメリカ大陸でマヤやアステカ文明の祖となったのである。その後、時代を経るにつれ、文明の中心地から隔絶されていたので、退化して密林の原住民と化した者もいたのであろう。

アダパは16シャル＝約5万8千年生きたことになる。この間、エンキらはずっと地球にいるわけだから、確かに地球人にしては長生きだが、ニビル寿命

は持ち合わせていなかった。

このアダパの死の場面は、聖書に於ける次の場面の原型、というよりもそのものである。そして、ここまでのアダパの主要登場“息子たち”はカ・イン、アバエル、サティ、エンシ、クニン、マラル、イリド、エンキ・メ、マツシャル、ラギム、ガイガド、ル・マクの 12 人であるから、イスラエルの十二支族とイエスの 12 人の使徒の原型である。

“ヨセフは 2 人の息子のうち、エフライムを自分の右手でイスラエル（ヤコブ）の左手に向かわせ、マナセを自分の左手でイスラエルの右手に向かわせ、2 人を近寄せた。視力が衰えていたイスラエルは右手を伸ばして、弟であるエフライムの頭の上に置き、左手をマナセの頭の上に置いた。つまり、マナセが長男であるのに、彼は両手を交差して置いたのである。そして、ヨセフを祝福して言った。「私の先祖アブラハムとイサクがその御前に歩んだ神よ。私の生涯を今日まで導かれた牧者なる神よ。私をあらゆる苦しみから贖われた御使いよ。どうか、この子供たちの上に祝福をお与えください。どうか、私の名と私の先祖アブラハム、イサクの名が彼らによって覚えられますように。どうか、彼らがこの地上に数多く増え続けますように」

ヨセフは、父が右手をエフライムの頭の上に置いているのを見て不満に思い、父の手を取ってエフライムの頭からマナセの頭へ移そうとした。「父上、そうではありません。これが長男ですから、右手をこの頭の上に置いて下さい」ところが、父はそれを拒んで言った。「いや、解っている。私の子よ、私には解っている。この子も 1 つの民となり、大きくなるであろう。しかし、弟の方が彼よりも大きくなり、その子孫は国々に満ちるものとなる」

その日、父は彼らを祝福して言った。「あなたによってイスラエルは人を祝福して言うであろう。『どうか、神があなたをエフライムとマナセのようにして下さるように』」彼はこのように、エフライムをマナセの上に立てたのである。”

似たような場面に、イサクが 2 人の息子エサウ（兄）とヤコブ（弟）に祝福を与える際、ヤコブがエサウとイサクを騙まして祝福を得た場面がある。その後、エサウは父イサクがヤコブを祝福したことを根に持って、ヤコブを憎むようになった。この場面はアダパの死の場面ではなく、あくまでも弟が兄よりも優先された、ということの象徴である。つまり、ニビルに於ける王位継承争い、何よりも、兄エンキよりも弟エンリル及びその子孫に継承権が与えられたことを、悪く象徴した形である。エンキ自身の態度からは、あまり根に持っている感ではないが、マルドゥクの恨みは凄まじいものがある。

なお、アダパが如何にも預言しているような記載になっているが、実際のところは違うだろう。これは、核戦争後の後世になって、エンキがエンドゥブサルに記述させたタブレットである。だから、起こった事実を基にして、あたかもアダパが預言したかの如く書かれていると思われる。アダパにこれほどの予知能力があるならば、その父エンキはもっと未来を見通せたはずであるが、そうではなかった。

それにしても、探せば何処かにアダパが葬られた墓があるはずだ！アダパが死んだ 108 番目のシャルは、煩惱の数の原型だろう。

12：第 9 のタブレットー人類の増殖、旱魃、疫病ー迫り来る大洪水

(1) 年老いた指導者たち

・ル・マクの時代、地球では苦難が増加していた。ラームでは、乾燥と埃で惑星が包まれていた。地球とラームの状況は何を警告しているのか、エンキ、エンリル、ニンマーは話し合った。彼らは太陽フレアを観測した。地球とラームの重力に乱れが生じていた。アブズの“白い土地（南極）”に面した突端に、観測機器を据え付けた。エンキの息子ネルガルとナンナルの娘で彼の配偶者のエレシュキガルが、そこでの観測を任された。ニヌルタは海の向こうの地に就き、“天と地球を結ぶもの”をその山地に設置した。ラームではイギギが落ち着かず、マルドゥクが監督者となった。宿命を定める 3 人は話し合った。彼らはお互いを見つめ、何と老けたことだろう、と思った。エンキは「今や髭をたくわえ、疲れ、私は老けてしまった」と言い、エンリルは「我々は地球で年老いた。だが、地球で生まれた者たちは、更に早く年を取っている！」と言い、ニンマーは「皆は私を、年老いた羊、と呼んでいるわ！」と言った。「他の者たちが地球とニビルを往復している間に、私たちはずっと地球に留まり続けた。もしかすると、去る時なのかもしれない！」とエンリルが言った。「私はそのことについて、不思議に思っていた。我々 3 人のうちの 1 人がニビルを訪問しようとする、いつもニビルは我々を阻止した！」とエンキが言った。「私も不思議に思ったわ。ニビルの問題なのか、地球での問題なのか…。もしかすると、寿命サイクルに関係しているのかもしれない」とニンマーが言った。今後の動向を見守ることに、“宿命”か“運命”か見守ることに、指導者らは決めた。

* 太陽のフレアが重要な印であることを、彼らは知っていた！つまり、フレアの活動と黒点の増減である。

指導者 3 人は、地球のサイクルにより、かなり老けてしまったのである。

(2) マルドゥクの結婚

・その後、マルドゥクがエンキの下にやって来た。「エンリルの息子たちは地球で配偶者を選びました。あなたの息子ネルガルは、エンリルの孫娘エレシュキガルを配偶者にしました。あなたの長男である私の結婚を待つべきなのに、ネルガルは待たなかった。他の 4 人は私に敬意を表して待っているというのに。そこで、私は配偶者を得たいと思います」と言うと、エンキは喜んだ。しかし、その相手がアヌナキではなく、エンキ・メの娘サルパニトであることが判ると、エンキは激怒した。「ニビルの王子が、継承の資格を備えた長男が、地球人と結婚するだと？！」「単なる地球人ではなく、あなた自身の子孫ですよ！」とマルドゥクは反論した。エンキ・メと共に旅した時、彼の教師となっていた時、マルドゥクは見初めたのである。「長い寿命以外は、彼らは我々自身なのです！エンキ・メの娘を気に入ったのです。私は彼女と結婚したい！」とマルドゥク

は申し立てた。エンキは妻ニンキに事の次第を説明した。「考えるに及ばない問題だ。そんなことをしたら、配偶者ともども、決してニビルに行くことがなくなる。ニビルでの王子としての権利を、永久に諦めることになるのだ！」とエンキは怒鳴った。マルドゥクは苦笑して答えた。「そんな権利なんて、私にはありませんよ！地球に於いてでさえ、長男としての権利は踏みにじられてきました。これが私の決断です…。王子から地球の王となる！この惑星の主となるんだ！」「それなら、それで良い」とエンキは言った。「そうならば、それは嬉しい！」とエンキは続けた。

彼らは花嫁の兄マツシャルを呼び、マルドゥクの望みを伝えた。マツシャルは謙遜しつつも、喜びが満ち溢れた。しかし、エンリルはこの知らせを聞いて激怒した。「父親が地球人と交わる分にはいいだろう。だが、息子が地球人と結婚することは別問題だ。君主の地位を、彼女に授けることになるのだ！」エンリルは憤慨して、このことをアヌに知らせた。アヌは顧問を招集し、この問題について協議した。そして、結婚は認められるが、ニビルの王子ではなくなること、ニビルには戻れないことを告げた。エンキとマルドゥクがこの言葉を受け入れたので、エンリルも従った。「ただし、マルドゥクと花嫁は、エディンに留まることはならぬ！」とエンリルは告げた。エンキはアブズの上の領域、“上の方の海（地中海）”に届く土地を彼らに与えることとし、エンリルもそれに同意した。エリドゥで、彼らの結婚式をニンキが手配し、大勢の“文明化された地球人”がエリドゥにやって来た。それと共に、自分たちの指導者を祝うため、ニビルと地球の統一を目撃するためという名目で、イギギも大挙して地球に降りて来た。

*地球人との結婚により、マルドゥクは完全にニビルから追放された。彼の言う“地球の主”とは？

(3) イギギの反乱

・ラームに残ったイギギは1/3であり、200人のイギギが地球へやって来た。彼らの本当の目的は、地球人の女性を誘拐して交わり、子供を持つことだった。子供も持たず、苦痛と孤独だけの生活から開放されたかったのである。そして、自分たちの指導者の結婚が認められたので、彼らもそのような要求をしに来たのである。シャムガズという者が扇動者だった。

ヒマラヤ杉の山々にある“着陸場所”に到着すると、地球人の群集にまぎれてエリドゥまで行った。マルドゥクの祝宴が行われた後、彼らは作戦を実行した。そして、“着陸場所”を占拠して要塞化し、抗議の声明を出した。認めなければ、炎で地球を破壊するぞ、と。彼らの司令官マルドゥクは、「私の行ったことを、彼らから奪うことはできない」と言った。エンリルは激怒したものの、エンキ、ニンマーと共に、しぶしぶ認めたが、エディンに留まることは認めなかった。エンリルは心の中で、マルドゥクと彼の地球人たちへの陰謀を企んでいた。

*ラームから全イギギがやって来たわけではない。しかし、ラームの指導者マ

ルドゥクはエンキやエンリルに反論してまで、ニビルの権利をすべて捨ててまで（掟に反してまで）、地球人女性を正式配偶者とした。これは、イギギの反逆として象徴される。つまり、マルドゥクにより全イギギ 300 人が地球上のアヌンナキ 600 人に対して反逆したと象徴される。これこそが、天使の 1/3 を味方につけたサタンが天界で反逆したことの原型である。

(4) マルドゥクの息子たち

・イギギと女性たちは“着陸場所”に隔離された。彼らに子供が生まれ、“ロケット船の子供たち”と呼ばれた。マルドゥクとサルパニトにも子ができた。最初の 2 人の息子たちはアサル、サツと呼ばれた。マルドゥクは、イギギをアブズの上の方の領地に呼び寄せた。“着陸場所”に残ったものもいれば、彼らの子孫の中には遠い東の土地、高い山々の土地へ行った者もいた。

*イギギはアフリカ、中東、ヒマラヤに散って行った。

(5) アメリカ大陸のカ・インの子孫

・エンリルはニヌルタに命じた。「行け、カ・インの子孫を見つけ、彼らと共に
お前自身の領地を準備しておくのだ！」ニヌルタは地球の反対側に行き、カ・インの子孫を見つけた。彼は、道具の作り方や音楽、金属精錬、筏船の作り方などを教えた。そして、彼らは新しい土地に領地を築き、ツインタワーがある都を建てた。それは、新しい“天と地球を結ぶもの”の山間地ではなかった。

*ニヌルタは南北アメリカ大陸に行き、カ・インの子孫に文明を築かせた。

(6) ジウスドラの誕生

・ル・マクの配偶者バタナシュはル・マクの父マツシャルの兄弟の娘で、際立って美しく、その美しさにエンキは惹かれた。エンキはマルドゥクに言葉を送った。「お前の領地にル・マクを呼び寄せるのだ。そこで、地球人によってどのように都が築かれているのか、彼に教えるのだ！」ル・マクはマルドゥクに呼び出されると、バタナシュをニンマーの土地シュルバクに連れて来た。怒れる地球人から、保護するためである。その後、すぐにエンキがニンマーを訪ねて来た。住居の屋上でバタナシュが入浴していると、エンキが彼女の腰を抱き寄せ、キスし、子宮に精子を注いだ。バタナシュは妊娠した。シュルバクからル・マクへ言葉が送られた。「エディンへ戻れ！息子が生まれた」

彼はシュルバクへ戻り、バタナシュは息子を見せた。肌は雪のように白く、髪は羊毛の色で、目は空のようで、その目はキラキラと利発そうに輝いていた。ル・マクは怯え、父マツシャルの下へ急いだ。「バタナシュに、地球人に見えない子が生まれました。私は非常に困惑しています」マツシャルはバタナシュのところへやって来て、新生児を見ると、その外観に驚いた。「イギギの 1 人が父親か？この子がル・マクの子かどうか、真実を明かすのだ！」「命に掛けて、父親がイギギではないことを誓います」とバタナシュは答えた。マツシャルは息子に言った。「この子は謎だが、その奇妙さ故に、お前への前兆が啓示されてい

る。彼は運命によって、類の無い仕事のために選ばれたのだ。それが何なのかは解らないが、しかるべき時が来たら、解ることだろう！」当時、地球では苦しみが増していた。「その子は普通ではないことから、休息がやって来る前兆としよう。彼の名は“休息”にしよう」とマツシャルは言った。バタナシュは、2人に息子の秘密は明かさなかった。「ジウスドラ、“長く明るい人生の日々の彼”としましょう」と彼女は言った。

ニンマーはこの子に自分の保護と愛情と知識を授けた。エンキはこの子を非常に可愛がり、アダパの文書を読むことを彼に教えた。聖職者の仕事をどのように遵守して実行するか学んだ。110番目のシャルに、ジウスドラは生まれた。彼はシュルバクで成長した。彼の時代、苦しみは更に増した。

*またもや、エンキの悪い癖が出た。ジウスドラとはノアのこと。ノアはエンキと地球人女性の間にできた子だったのである！アダパといい、ジウスドラといい、人類にとって重要な出来事に関わる地球人は、エンキが地球人女性と直接交わって生まれている。その地球人女性でさえ、元はと言えば、エンキの遺伝子が組み入れられた体外受精児アダムウとティアマトの子孫であり、特にバタナシュはエンキの遺伝子を直接受け継ぐアダパとティティの子孫である。

ジウスドラの容貌は、銀髪の白人である。この記述は、旧約偽典のエノク書に記載されている。“私”とはエノク（エンキ・メ）のことである。

(<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/tiakio/urchristentum/enoch.html> 参照。)

“さて、しばらくして後、私の息子マトゥウサレク（マツシャル）に妻を娶り、〔女は〕息子を生み、その名前をラメク（ル・マク）と呼んだ。正義はあの日まで低くされた。そこで、年頃になった時、これに女を娶り、これに子どもをもうけた。その子が生まれた時、身体は雪よりも白く、バラよりも赤く、髪は真っ白で羊毛のように白く、縮れ毛で、光輝に満ちていた。しかも、眼を開けると、家は太陽のように輝いた。そして、産婆の手を離れると、口を開いて主を祝福した。

そこでラメクは怖れをなして逃げ出し、父マトゥウサレクの下に赴き、言った。「変わった子が生まれました。人間に似ず、天使たちの子に〔似ているの〕です。（中略）自分の子ではなく天使の子では、と。（中略）だから、どうかお父さん、お願いします。父祖ヘノーク（エノク、エンキ・メ）のところに行ってください、そして尋ねてください」

〔マトゥウサレクは〕私のところに、大地の極にやって来た。（中略）その時、私は答えて言った。「主は地上の配置を改新されるのであろう。その同じ仕方を私は生子に見たし、そなたに示した。というのは、私の父イアレド（イリド）の世代に、〔人々は〕主の言葉を、天の契約を踏み外した。そして、見よ、〔人々は〕罪を犯し、習慣を踏み外し、女たちと交わり、これとともに罪を犯し、彼女たちから子をなし、そして霊にではなく、肉的なものに似た者らを産む。かくして大いなる怒りと、大洪水が地上に起こるであろう、そして大いなる破滅は1年間、続くであろう。しかし、生まれたこの子は生き残るであろう。また

彼の 3 人の生子も、地上の死ぬ者らの内で救われるであろう。こうして、そこ〔地上〕における墮落から大地を〔神は〕和らげられるであろう。今こそラメクに言え。義しく、神法にかなった汝の子である。その名をノーエと呼べ」

エノク書はエノクに帰せられる偽書の 1 つである。エノクが幻の中で神を見て、“200 人の天使”が天から降り、天上、地上、地下の世界を巡って世界の秘密を知らされる内容を記している。エノクが見た秘密の中には、自然界の法則だけでなく、大洪水や最後の審判などの預言も含まれている。しかし、原型は今回のタブレットの中の、エンキ・メの話である。

このタブレットでは、ジウスドラの容貌について尋ねるため、マツシャルがエノクのところへ行ったという記述は無く、マツシャル自身がル・マクに答えている。また、天の契約を踏み外したのは人々ではなく、イギギ、つまりアヌンナキであり、200 人がラームから降りてきて地球人女性と交わった。それは、イリドの時代ではなく、ル・マクの時代である。（これが“200 人の天使が天から降り”と象徴されている。）よって、後世の書が、如何に歪曲されているのか、よく解るだろう。つまり、根本的なものを調べなければ真実は解らず、迷宮に迷い込むだけである。

また、ジウスドラはエンキの直接の子であるが、容貌は白人系である。そして、ジウスドラの長男セムはアジア系、ハムはエジプト～アフリカ系、ヤフェトは白人系の祖である。つまり、ジウスドラ以前はアヌンナキに似たモンゴロイド系しかいなかったが、エンキが直接地球人と交わったことにより、突然変異としての白人系が誕生したのである。

なお、ジウスドラ＝ノアは大洪水の直前、110 番目のシャルに生まれ、救われて新たな人類の祖となった。これに因み、110 番は緊急の電話番号なのである。

★（エチオピア語）エノク書

創世記に登場する族長エノクに帰せられる偽書の 1 つで、現在ではエチオピア語訳のみがその全体を伝えているためにこう呼ばれる。エノク第一書とも言う。エノクが幻の中で神を見て、“200 人の天使”が天から降り、天上、地上、地下の世界を巡って世界の秘密を知らされる内容を記す。エノクが見た秘密の中には、自然界の法則だけでなく、大洪水や最後の審判などの預言も含まれている。しかし、最も重要なのは、人間の娘と交配した“200 人の天使＝墮天使”の名称などについての記述で、“200 人の天使”はセムジャザを筆頭に、アラキバ、ラメエル、コカビエルなどが含まれている。こうした墮天使は、後に“エノクのデーモン”と呼ばれるようになり、エチオピア語エノク書はそのようなデーモンについてのハンドブックとして、重要な魔術書の 1 つに数えられている。（<http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/1237/e.html> 参照。）

(7) 大洪水の前兆

・マルドゥクとイギギが地球人女性と結婚したことにより、エンリルは動揺して、心がかき乱された。彼の目には、アヌンナキ・ミッションは墮落したと映った。また、わめき叫ぶ地球人たちの集団、地球人たちの意見表明がうっとうし

かった。その時代、疫病やペストが流行り、地球人は打ちひしがれていた。地球人に治療方法を教えたいとニンマーが申し出たが、エンリルは禁じた。地球人に運河と人工池の建造を教え、海から魚や食べ物を入手させるようエンキは進言したが、エンリルは禁じた。「飢えと疫病で地球人を滅ぼそう！」とエンリルはエンキに言った。ジウスドラが地球人の代弁者として主エンキの家に行き、助けと救済を求めたが、エンキはエンリルの法に縛られ、何もできなかった。

惑星の異変が、ニビルから観測された。太陽の表面には黒い点が現れ、表面から炎が噴出した。計り知れない理由から、太陽系の天体は不安定な様相であった。地球では、3 シャル、4 シャルと“白い土地”の化粧が観測された。ネルガルとエレシュキガルによって、“白い土地”の雪に奇妙なゴロゴロ鳴る音が記録され、雪氷が滑っているのが観測された。“海の向こうの土地”ではニヌルタが観測機器を設置し、地球の底での揺れに気付いた。エンリルはニビルに警告を発した。ニビルの接近により、地球はその巨大な重力に囚われ、“白い土地”の雪氷が滑り落ち、水の大惨事を引き起こすことを、ニビルは返信した。アヌは、地球とラームから避難するよう命じた。

* 困難な状況を利用して、エンリルは人類を滅ぼそうと企んだ。この状況は、ニビルの接近によってもたらされていた。その徴は地球上でも現れていたが、特に太陽の変化が激しかった。黒点の増大と、太陽フレアの活発化である。このような太陽の変化は、アダムゥとティアマトのエディン追放後、ニビルが接近した時の変化と類似している。

(8) 謎の密使ガルズ

・地球では、いつでも脱出できるように準備が整えられた。ある時、“空の二輪戦車”の1つから、1人の白髪のアヌンナキが降り立った。ガルズ、“大いなる知者”が彼の名だった。彼は威厳ある歩みでエンリルに近づき、アヌから封印されたメッセージを手渡した。「私はガルズ、王と議会の全権密使です」と彼は言った。エンキとニンマーも召集された。アヌからのメッセージには、王と議会に代わってガルズが話し、彼の言葉はアヌの命令である、と書かれていた。ガルズはニンマーと同じ学校の同級生だったことを明かしたが、ニンマーは思いつけなかった。彼は息子のように若く、彼女は年老いた母親のようであった。ガルズは言った。「説明は簡単につきます。我々はニビルで冬眠する。その生涯サイクルによって、引き起こされているのです！実に、このことが私の任務の一部で、避難に関する秘密です。ドゥムジがニビルに滞在して以来、ニビルでは戻ってくるアヌンナキを検査しました。すると、彼らはニビルのサイクルに馴染めなくなっており、睡眠は妨げられ、視力は劣り、重力が歩行に重さを加えました。そして、息子は残っていた両親よりも老けており、精神的ダメージを受け、死が帰還者たちに訪れました。このことを、私は警告しに来たのです」

指導者たちは押し黙った。エンリルは怒りに襲われた。「エンキと地球人によって、我々は主人から召使にされてしまった！」とエンリルは激白した。「ニビルでは、“万物の創造主”がなされるままに“宿命”に委ねるべきか、あるいは

地球に起こることは“万物の創造主”によって考えられたもので、我々はその密使をうっかり見落としているのか、そのことについて議論を続けてください」とガルズは言った。そして「ニビルからの密命です。あなたがた 3 人は地球に残る。ニビルに帰ったら、死ぬだけです。“空の二輪戦車”で地球の周りを回り、災害を辛抱強くやり過ごすのです。他のアヌンナキは、立ち去るか、災害を辛抱強く待つのかを選ばせます。地球人と結婚したイギギは、出発か配偶者かどちらかを選ばなければなりません。サルパニトを含め、地球人は誰 1 人として、ニビルに来ることは許されません。留まって何が起こるのか見届ける者は、“空の二輪戦車”に避難するのです。その他の者たちについては、ただちにニビルへ出発する準備を整えなければなりません」とガルズはニビルの指示を秘密裏に指導者たちに明かした。

* 謎のガルズによって、生涯サイクルの秘密が明かされた。そして、大災害に備え、地球のアヌンナキとイギギたちはどうすべきか、彼によって指示された。

(9) 自らの運命の決定

・エンリルはニブル・キで、アヌンナキとイギギの司令官たちによる会議を招集し、事態を話した。「立ち去ることを望む者は全員、準備された“空の船”でニビルに退避する。だが、地球人の配偶者がいる者は、配偶者を置いて立ち去らねばならぬ。配偶者や子供に愛着のあるイギギは、彼らを地球の一番高い峯に逃れさせよ！そして、留まることを望む者たちは、“天の船”で地球の空中に残ることになる」とエンリルは言った。そして「司令官として、地球の“宿命”を目撃するために、私は留まる最初の者となろう！他の者たちは、自分で選択すれば良い！」と続けた。「私は父と共に留まる」とニヌルタが言った。「大洪水を月で待ちたい」とナンナルは奇妙な願いをした。イシュクルは父と共に留まることを決意した。他、ウツとイナンナ、エンキとニンキ、マルドゥク、ネルガル、ギビル、ニナガル、ニンギシュジツダ、ドゥムジも留まることを決意した。そして、ニンマーは「私が創造した地球人を、私は見捨てません！」それにエンキが続いた。「驚くべき“生き物”は我々によって創造された。我々によって守られるべきだ！」と叫んだ。しかしエンリルは、事ある毎にエンキが逆らい、婚外交渉でアダパなどをもうけ、彼を“天”へ連れて行き、ニビルの叡智を授けたこと、エンキの息子マルドゥクのせいでイギギが地球人女性と結婚してしまったことなどを非難し、「もう十分だ！これ以上、忌まわしい行為を続けさせはせぬ！」と腹立たしげに宣言した。そして、成り行きを妨げることなく成るがままにしておくことを、他のアヌンナキたちに宣誓するよう、要求した。最初にニヌルタが、後にエンリルの息子たちが続き、それからネルガル、エンキの他の息子たちが続いた。ニンマーも涙ながらに誓った。エンリルはエンキを凝視した。「何故、私を誓いで縛ろうとするのだ。私は洪水を止めることはできないし、地球人の群集を守ることはできない。エンリルに、永久に責任をとってもらおう」とエンキは言った。

(10) 遺伝子の採取と保管

・エンリルは命令を下し、それぞれがそれぞれの宿命に従った。海の向こうの山間地にはニヌルタ、“白い土地”にはネルガルとエレシュキガルが観測のために配置され、地球人たちからの襲撃の警備をイシュクルにあたせた。エンリルはエンキに言った。「万が一にも助かった時のために、これまでに起こったことをすべてタブレットに記録し、地球の奥深くに埋めておこう」エンキは賛同し、“メ”とその他のタブレットを黄金の箱にしまい、シッパールの地中深く埋めた。そして、エンキは密かにニンマーに話しかけた。「エンリルは地球人だけにこだわっているんで、他の生物に気が向いていない。絶滅から救うため、2人で生命の種子を保存しよう。彼らの生命エッセンスを保管のために抽出しよう！」ニンマーは、その栄えある任務に同意した。ニンマーはシュルバクで何人かの助手の手を借りて、エンキはアブズでニンギシュジッタの助けを借りて、“生命の家”で男性と女性のエッセンスと生命の卵を集めた。それぞれの種類で2個ずつ、シュルバクとアブズに2個ずつ保存した。それから、ゴロゴロという音が不吉だ、という知らせがニヌルタから、“白い土地”が揺れているという知らせがネルガルとエレシュキガルから発せられた。

*タブレットを保管した黄金の箱は、契約の箱の原型である。人類を創造したエンキとニンマー、ニンギシュジッタが中心となって、秘密裏に地球上の生物種を救ったのである。

13：第10のタブレットー大洪水の記録ーノアの箱舟の真実

(1) ガルズからのお告げと“万物の創造主”の御意思

・シッパールにすべてのアヌンナキが集まり、“大洪水の日”を待ち受けた。ある日、エンキが夢物語を見た。天空のように明るく輝く1人の男が現れた。それは、白い髪のガルズであった。彼は右手に尖筆を、左手にラピスラズリの石板を持っていた。彼はエンキのベッドに近づいて来て、こう言った。「あなたのエンリルに対する非難は不当である。あの決定は、彼ではなく“運命”が定めたものである。さあ、“宿命”を手に取りなさい。地球は地球人に受け継がれるのだ。ジウストラを呼び寄せ、誓いを破ることなく、彼に迫り来る大災害について明かせ。押し寄せる水に耐えられる船を造るよう命じるのだ。この石板に描かれたものと似たものを。その船で、彼とその親族を救うのだ。そして、他の動植物も、有益なものすべての種子も持たせるのだ。それが、“万物の創造主”の御意思である！」ガルズは尖筆で石板に絵を描き、エンキのベッドの横に置いた。そして、その光景が薄れていくにつれ、エンキは目覚めた。「この意味は何なのか。どんな前兆が隠されているのか」驚いたことに、ベッドの横に、その石板が実際に置かれていた！そこには、船の設計図が描かれていた。エンキは自分の密使たちを送り出し、ガルズを探させた。しかし、ガルズは見つからなかった。

*何と、ノアの箱舟の設計図は、ガルズがエンキに手渡したのである。しかも、“万物の創造主”の御意思、という名目で。しかし、前述の話と合わせても、

ガルズという人物を登場させることにより、アヌンナキ＝「神々」でさえ、宇宙創造の“万物の創造主”の御意思＝宇宙の法則・宿命には逆らえない、ということを暗示しているのかもしれない。ならば船の設計図は、エンキが描いたということになる。“メ”をすべて持っているのはエンキだから、それも当然ではある。

そして、この夢物語が、後の聖書に於ける預言者の夢物語や幻視の原型となっていると考えれば、辻褄が合う。むしろ、後世には「神々」が直接手を下すのではなく、このような“お告げ”の形式で人類を導くという方法を採用するために、このような話が創られた、と考える方が妥当であろう。後述するが、アヌはガルズという密使を知らない、と言ったことから、このように考えるのが妥当である。つまり、ガルズは“人類の救世主”の予型である。そして、このような“お告げ”“予型”という“知恵”を考えることができるのも、知恵の神エンキに他ならない。何よりもこのタブレットは、“主エンキの御言葉”なのである。

(2) ジウストラへの警告

・その夜、ジウストラが寝ている葦の小屋へエンキはこっそり行った。誓いを破ることなく、エンキは葦の壁に向かって言った。「起きろ、起きるのだ！」ジウストラが目覚めると、更に続けた。「葦の小屋よ、私の指示に従うのだ！あらゆる都市に大災害が襲い掛かる。それは、人類とその子孫の破滅となる。さあ、私の言葉に耳を傾けるのだ。家を捨て、船を造れ。財産を一蹴し、命を守るのだ！その設計図は、石板に記されている。私はそれを、小屋の側に置いておく。船は隅々までしっかり覆うのだ。船は様々な方向に回転できるようにし、水の殺到を乗り切るのだ！7日間で船を造り、その中へ親類を集めよ。食糧と飲み水を山積みにし、家畜も連れて行くのだ。その後、指定された日に、お前に合図が送られる。私が任命した船頭が、お前のところへやって来る。その日、お前たちは船に乗り込み、大洪水に備えるのだ。恐れることはない。その船頭が、安全な場所へお前たちを導く！」ジウストラはエンキの声に跪き、「我が主よ、お顔を見せて下さい！」と叫んだ。エンキは「私はお前にではなく、葦の小屋に対して喋ったのだ。エンリルの決定により立てた誓いに、私は縛られている。もし、お前が私の顔を見たら、お前は他の者たちと同じように死ぬことになる！さあ、葦の小屋よ、私の言葉に心を留めるのだ！その船の目的、アヌンナキのことは黙っておくのだ。尋ねられたら、こう言うのだ。『主エンリルが主エンキに対してご立腹になられた。私はエンキ様のお住まいへ航海して行く。そうすることにより、エンリル様のお怒りが収まるかもしれない』と」

声が聞こえなくなると、ジウストラは壁の後ろへ回った。そこには、石板が置かれており、船の設計図が描かれていた。彼は、自分が聞いたことを理解した。そして、エンキから言われたように船を造り、5日間で完成した。集まってきた人たちに対して、主エンキのお住まいに行きたい人がいたら一緒に連れて行こう、と告げたが、応じたのは何人かの職人だけだった。

*神の姿が見えない原型。

(3) 船頭の到着

・6 日目に、“大いなる水の主” ニナガルがやって来た。彼はエンキの息子で、航海士として選ばれた。彼はヒマラヤ杉の箱を持っていた。そこには、エンキ、ニンマー、ニンギシュジッタによって集められた生物の生命エッセンスと卵が入っていた。「エンリルの憤怒から隠し、地球が望むなら、命を復活させるために！」とニナガルはジウスドラに説明した。こうして、すべての獣たちのつがい船に隠された。大洪水が待ち受けられたのは7日目、120番目のシャルだった。大洪水が目前となったのは、ジウスドラが10シャル目の歳のことだった。そして、崩壊が迫って来たのは、ライオンの星座の位置であった。

*エンキの息子ニナガルが先導した。大洪水は1万3千年ほど前、ジウスドラが3万6千歳の時、地球が黄道12星座の獅子座の位置にある時だった。

(4) 大洪水

・大洪水の数日前、地球はゴロゴロと鳴り、天ではニビルが燃えるように赤く輝いた。そして、日中に暗闇が広がり、地球はニビルの重力に揺り動かされた。夜明けの輝きの中、水平線から暗雲が湧き起こり、朝の光は死の影に覆われたようだった。それから雷鳴が轟き、稲妻が空を照らした。「出発だ、出発だ！」とウツが合図を送った。“天の船”が出発し、激しい閃光がニナガルによって目撃された。「ハッチを閉じろ！」とニナガルがジウスドラに命令した。その後、何千もの雷に匹敵する轟音と共に、南極の氷床が滑り落ちた。と同時に空に届かんばかりの高波が発生し、大地を次々と飲み込んで行った。そして、アブズ、エディンへと達し、シュルバクのジウスドラの船も飲み込まれた。

その日の終わりまでに、水は大地のほとんどを飲み込んだ。地球の周りを周回していたアヌンナキは、その様子を見て呆然とした。ニンマーとイナンナは嘆き、悲しんだ。その猛威の光景に、アヌンナキたちは挫かれていた。その後、天の水門が開き、空から豪雨が解き放たれた。7日間にわたって、上からの水と南極からの水が混ぜ合わされた。それから水の壁は限界に達し、猛攻撃は止んだ。空からの雨は、更に40昼夜続いた。高くそびえていた山々は、海に浮かんだ島々のようだった。水は行ったり来たりしながら窪地に集められ、次第に水位は低くなった。

40日後に、ニナガルが船をアルラタの双子山（アララト山）に向け、帆を張り、船を導いた。ジウスドラは待ちきれなくなり、乾いた土地を調べるため、鳥を放った。最初のツバメは帰って来た。次の鳥も帰って来た。最後に鳩を送り出すと、小枝をくわえて戻って来た。それにより、乾いた土地が現れたことを知った。

*ニビルの巨大な重力により、南極の氷床が崩れ落ちて発生した大津波が大洪水の原因だったのである。ニビルの接近により気候も大変動し、とてつもない豪雨が降り注いだ。これより以前は小惑星帯からの隕石が降り注ぎ、更に太古の昔には、ニビルの衛星がティアマトに衝突して地球が生成した。つまり、ニビルの長楕円周回軌道は、太陽系の惑星に対して、とてつもない影響を及ぼす

のである。

最近の接近は、紀元0年前後である。ベツレヘムの星として、天空に輝いた。それから約2千年。現在は、遠日点から2～300年ほど地球側に向かっている距離にある。最接近まで、あと1500年ほどである。

(5) エンリルの赦し

・それから数日後、船は双子山の岩に停止した。「我々は救済の山にいるのだ！」とニナガルが言った。ジウスドラはハッチを開けた。外は晴れて穏やかで、彼らは外に出た。ジウスドラは「主エンキを褒め称えよ！主に感謝せよ！」と言った。ジウスドラは息子たちと石を集め、祭壇を築いて灯りをともし、香を焚きしめ、雌の子羊を生贄として捧げた。その時、地球の状況を把握するために、エンリルとエンキが空から“つむじ風（ヘリコプターに似た空中輸送機）”に乗って、アララト山に降りて来た。エンリルは、焚き火と肉が焼ける仄かな香りに当惑した。「大洪水を生き延びた人間がいるのか！」エンキと共にその方角に行ってみると、船、ジウスドラ、祭壇、そしてニナガルの姿が見えた。ニナガルを見つけたエンリルの激昂は、留まるところを知らなかった。「地球人はすべて滅ぼすはずだった！」エンリルはエンキに詰め寄り、素手で殴り殺すのも辞さないほどの構えだったが、「彼はジウスドラ、私の息子だ！」とエンキは抗議した。「お前、誓いを破ったな！」「私はジウスドラではなく、葦の壁に喋ったのだ。誓いは破っていない！」と言い、エンキはエンリルにガルズの夢の話をした。

それから、ニナガルの知らせでニヌルタとニンマーが降りて来た。「人類の生存は、“万物の創造主”の御意思に違いありません」とニヌルタが言った。ニンマーはアヌからの贈り物である水晶のネックレスに、「人類の絶滅を二度と企てたりしません！」と誓った。エンリルは態度を軟化させ、ジウスドラと彼の配偶者エムザラの手を取り、祝福した。「実り豊かで増殖せよ！そして、再び地球を満たすのだ！」こうして、‘昔の時代’は終わりを告げた。

*聖書では主は唯一絶対的存在のため、この場面は矛盾している。主が自ら人類を創造したものの、人類に対して嫌気がさし、洪水で滅ぼそうとした。しかし、洪水後は増殖することを認めたのである。実は、人類を創造したのはエンキ、ニンマー、ニンギシュジッタであり、それを快く思わず、迫り来る大洪水で滅ぼそうとしたのはエンリルであり、人類を大洪水から助けたのはエンキとニナガルであり、赦しをエンリルから導いたのはエンリルの長男ニヌルタとその母でエンリルの元愛人ニンマーだったのである。なお、この場面は祭壇に於ける燔祭の原型である。

(6) 火星と月の荒廃

・大洪水後の地球は、ほとんど泥に埋まり、かつての都市は完全に消滅していた。しかし、ヒマラヤ杉の山々では、巨大なプラットホームが太陽光にきらめいていた。その“着陸場所”に、“つむじ風”や二輪戦車が次々に着陸した。ラームのマルドゥクと月のナンナルにも、帰還の命令が出された。「ラームはニビ

ルの通行により荒廃し、大気は吸い出され、水は蒸発し、砂嵐の場所と化しています」とマルドゥクが報告した。「月は単独では生命を維持できず、驚のマスクをしてのみ、滞在が可能です。月の様相を見れば、かつてティアマトの軍団のリーダーだったことを、思い起こさずにはられません。月は地球の運命と一心同体なのです！」とナンナルが報告した。

＊大洪水時のニビルの接近により、火星の大気と水は無くなり、月も死の世界となったのである。ニビルの存在無くして、太陽系の秘密、太陽系の創世神話の秘密を解き明かすことはできない。このように、ニビルは災害を引き起こす星として恐れられた。

“木星の位置からその星が輝きを増す時、そして12宮の巨蟹宮がニビルになると、アッカドは豊富な水に溢れる。”

“天の王座にいるその惑星が、もっと輝きを増す時、洪水や大雨がやって来る。ニビルがその近地点に到着すると、神々は平和を与える。苦しみは洗い流され、混乱はほぐされ、大雨と洪水がやって来る。”

大雨や大洪水の原因が、ニビルの大接近だったのである。ニビルは何度も周期的にやって来ており、その重力場や電磁場、衛星が恐竜の絶滅やノアの時代の大洪水のような大災害を引き起こす原因になったのである。

しかし、この接近は、必ずしも恐れられていただけではない。アッカドには豊富な水がもたらされ、苦しみは洗い流され、混乱はほぐされ、「神々」は平和を与えるのである。古代メソポタミアやヘブライの書物にある“天の王”の再来の期待は、実際の経験に基づいているのである。その経験とは、王の星＝「神々」の星ニビルが3600年周期で地球の近くに帰って来たのを、実際に目撃したのである。

(7) 地球再興の準備

・エンリルたちは、封印された“創造の部屋”を調べた。そこは、プラットホーム横の、遠く離れた時代の縦坑だった。塞いでいた石をどけて入ると、閃緑岩の箱があり、彼らは銅の鍵で封印を開けた。中には水晶の容器があり、ニビルの穀物の種子があった。外に出ると、エンリルはニヌルタに種子を渡し、「行け、山腹の台地で、ニビルの穀物にもう一度パンを供給させるのだ！」と命じた。ヒマラヤ杉の山々で、ニヌルタは滝をせき止め、台地を造成し、ジウストラの長男セムに作物の育て方を教えた。

イシュクル（アダド）には、「水が引いた場所に行って、残っている実の生る木を見つけてくるのだ！」と命じた。彼らが最初に見つけたのは、ニンマーがニビルから持って来た万能薬の木、ブドウの木であった！万能薬として名高かったその果汁を、ジウストラは一口飲んだ。一口、また一口と彼は飲まれてしまい、酔って寝込んでしまった。

＊洪水後の最初の農業は、ニヌルタの台地造成による穀物（小麦）の種蒔きだ

った。そして、ニンマーの万能薬の木はブドウで、その飲み物はワインだった！新約にはブドウ園やワインの喩え話がよく登場するが、それはブドウが万能薬だからである。特に最後の晩餐の場面では、“神の国で新たに飲むその日まで、ブドウの実から作ったものを飲むことは決してあるまい”とイエスは言う。これは、十字架上の死後、ニビルの高度医療と万能薬により“復活”すること、そして“天の船”か二輪戦車で昇天した後に万能薬を飲むことを意味する。つまり、“神の国”とは、死後の世界の天国と昇天後の天国のこと、すなわちニビルを指す。ただし、後述するが、「神々」はおそらくニビルには帰還していない。そうすると、“天の船”か二輪戦車など、“神々の関連施設”を含めたニビル、ということである。

また、ここではジウスドラが万能薬を口にして、酔ってしまう場面がある。これは聖書に於いて、ワインに酔ったノアの裸を次男のハムが見て、ハムの息子カナンが呪われてしまう場面の原型であるが、ハムがそのようなことをしたという記述はここには無い。おそらく、後にカナン地方で偶像崇拜が盛んになり、破壊されることを、聖書ではそのような喩えで象徴しているのだろう。

・エンキは贈り物を差し出した。彼はニナガルが持っていた箱の正体を明かし、地球を生き物で満たすことを提案した。エンキはドゥムジに牧羊の仕事を与え、ジウスドラの次男ハムがそれを手伝った。それから、エンキは自分たちの領地だったアフリカ大陸に目を向けた。ニナガルと共に、強力な水の合流地点で、山にダムを建設した。そして、激しい滝から湖に水路を引き、湖に水が溜まるようにした。それから、アブズと“上の方の海（地中海）”の間の土地を、マルドゥクと共に調査した。流れの中ほどの、川の水が滝となって落ちる場所に、水中から島を引き上げ、その奥底に対を成す洞窟を掘り出し、石で水門を作った。それから、岩に2本の水路を切り出し、2本の峡谷を形成した。こうして、高地から流れてくる水量を調整できるようにした。その“洞窟の島”アブの島から、川の曲がりくねった谷を水中から引き上げた。エンキはドゥムジと牧夫のために、“2つの峡谷の土地（ナイル川に沿った地域）”に居住地を造った。

*ノアの息子セム、ハム、ヤフェトは実在した。エンキがニナガルと共にダムを建設した水の合流地点とは、ザンベジ川とカンド（クアンド）川の合流地点であり、カズングラ周辺である。その先には世界三大瀑布の1つ、ビクトリア瀑布があり、これが“激しい滝”である。更にその先にはカリバ湖があり、激しい滝から水路を引かれた湖である。

ナイル川の“洞窟の島”ーアブの島はおそらく第4滝から第6滝周辺（近くにアブハメッドという地名あり）であり、高地から流れてくる水量を調整できるようにした2本の峡谷は、白ナイルと青ナイルである。

このように、エンキと息子たちは大洪水後のアフリカの大地で、ビクトリア瀑布周辺やナイル川の流れを造成したのである。ピラミッドがオリオン座の三ツ星の並びに対応しているのに対して、ナイルの流れは天の川の流れに対応している。このような事実から、エジプト人はナイル川の水位が上昇する地点にブタハが防護壁を建てることによって、洪水の跡からエジプトの地を引き上げ

たと信じた。古代エジプト語では、エジプトの地は“持ち上がった地”で、太古に本当に偉大な神がやって来て、彼らの土地が水と泥の下に横たわっているのを見つけた、とある。この偉大な神＝エンキ＝プタハがこの沈んだ土地を干拓し、文字通り、エジプトを水と泥の下から引き上げたのである。

(8) 新たなる金の採掘場

・ニビルの接近は地球とラームに多大な影響を及ぼした。しかし、ニビルでも被害は甚大だった。金粉の大気シールドが破れ、大気が減少していたのである。そのため、更なる金の補充が必要となった。エンキはアブズに何度も調査しに行ったが、金鉱はすべて水によって埋まっていた。そして、原始的労働者も泥と化していた。地球とニビルには絶望が広がった。しかし、海の向こうの山間地を旅していたニヌルタから、驚くべき知らせが届いた。殺到した水が山腹に深い切れ込みを入れ、そこから無数の金が塊となって下の川に落下し、採掘することなく引き上げられる、と。エンリルとエンキは即座に飛んで行き、間違いないことを確認した。「ニビルがもたらしたことによって、ニビルが救われるとは。“万物の創造主”の目に見えない力が、ニビルに生きる機会を与えた！」とエンリルは喜んだ。

誰が金塊を集められるか、どうやってニビルへ運ぶか、指導者たちは尋ねあった。最初の問題には、ニヌルタが答えを持っていた。海の向こう側の山間地には、カ・インの子孫が筏で助かっていた。彼らのリーダーは4人の兄弟と4人の姉妹で、金属の扱い方を知っていた。そして、ニヌルタを自分たちの祖先の守護者として思い出し、“偉大な守護者”と呼んでいた。エンリルは、もう怒っていなかった。「“万物の創造主”の御意思なのだ。さあ、新しい“天の二輪戦車の場所”を設置し、そこからニビルへ金を送ろう！」“着陸場所”のすぐ近く、荒れ果てた半島に、適した平地を見つけた。それは静まり返った湖のように平らで、白い山々に囲まれていた。

*ニビルの影響により、中南米の山肌に金が塊で露出していた。そこには、カ・インの子孫が生き残っていた。かつて、ニヌルタは地球の反対側に行き、カ・インの子孫を見つけ、道具の作り方や音楽、金属精錬、筏船の作り方などを教えたのであった。

(9) ピラミッド建造

・選ばれた半島に、天の“アヌとエンリルの道”が反映された。新しい“二輪戦車の場所”を正確にその境界線上に構えることとなった。ヒマラヤ杉の山々にある“着陸場所”と“二輪戦車の場所”の真ん中が“宇宙飛行管制センター”とされた。そこに相応しい山が選ばれ、“道を示す山”モリヤと名付けられた。石のプラットフォームをそこに建造するよう、エンリルは指示した。その中央に、巨大な岩が内側も外側も刻まれた、新しい“天と地球を結ぶもの”を収容するために、それは造られた。その地球の新しい“臍”が、大洪水前のニブル・キの役割を引き継いだ。

*半島は北半球で、エンキの道は南半球のため、エンキの道は反映されていない。モリヤ山は宇宙飛行管制センターであり、後のエルサレムの神殿は“天と地球を結ぶもの”を収容する場所だったのである！主が降臨する際、稲妻と雷鳴が轟いたが、これは宇宙船のエンジンから噴出される光と轟音だったのである。そして、地球の臍としての役割だから、最重要の場所となった。つまり、神殿の原型とは、「神々」の乗り物が発着する場所、「神々」が降臨する場所である。“着陸場所”はシダー山脈にあるバアルベクで、現在のカデッシュの南付近、いわゆるカナンの地付近である。

・アルラタの双子山が北の境界線として固定された。着陸ルートの境界、上昇と下降の境界を定めるため、他に2組の双子山が必要だった。1組は、半島の南、山々の場所で接する双子の峰をエンリルは選び、南の境界線とした。もう1組の双子山が必要とされる場所には、何も無かった。「人工的な峰を造れば良い！」とニンギシュジッダが提案した。彼はタブレットの上に、側面が滑らかで、天に向かってそびえる峰を描いて見せた。「可能ならば、そうすれば良い。それらを灯台としても機能させよう！」とエンリルは賛成した。

川が流れる谷の北、平坦地にニンギシュジッダは縮小模型を建てた。上昇角度と4つの平滑な側面で、完全に仕上げた。その隣により大きな峰を設置し、その四面を地球の四隅にセットした。アヌンナキによって、電力の道具で石が切り出され、組み立てられた。ニンギシュジッダは、その中に通路や振動する水晶のための部屋を設計した。そして、最後の冠石を置くために、指導者たちが招待された。その頂上石は、エンキの息子ギビルによって、金と銀の合金エレクトラムで造られた。それは太陽光線を水平線に反射し、夜には炎の柱のようだった。すべての水晶の力を一条のビームとして天空に集めていた。完成して準備万端となると、指導者たちはその“偉大な双子山”に入り、驚嘆した。彼らはそれをエクル、“山のような家”と名付けた。それは、天空への灯台であり、アヌンナキが大洪水を生き残り、永久に繁栄することを宣言していた。

ここから東へ、太陽が指定された日に昇る場所へ二輪戦車は上昇して行き、そこへ向けて南西に、太陽が指定された日に沈む場所へ、それらは降下していく。エンリルは自らの手で、ニビルの水晶を活性化させた。内部では不気味な光が明滅し始め、魅惑的なハミング音が静寂を破った。外では冠石が燦然と輝きだし、大勢のアヌンナキは歓声をあげた。ニンマーは詩を朗読した。そして、エンキはエンリルに提案した。「この驚くべきものは、いつ、誰によって造られたのか？双子山の側にモニュメントを造り、“ライオンの年”を告知させよう。その顔を設計者ニンギシュジッダの姿にしよう。そして、正確に“天の二輪戦車の場所”の方を見つめさせよう。未来の世代に目的を明らかにするために！」エンリルは「“天の二輪戦車の場所”はウツを司令官とする。凝視するライオンは正確に東を向かせ、ニンギシュジッダの姿にしよう！」と言った。

*アルラタの双子山＝アララト山とピラミッドは、宇宙船の離発着の目印とされた。そして、ピラミッドはアヌンナキ＝「神々」が永久に繁栄する象徴であるから、“神の宮”とされた。そのピラミッドは、ニンギシュジッダが大洪水後

に設計して建造したのである！建造方法は歴史学者が言うような方法ではなく、アムンナキによって、電力の道具で石が切り出され、組み立てられた。現在は存在しない冠石は、金と銀の合金エレクトラムで造られていた。そして、ピラミッド内部にはニビルのハイテク機器が満載されていたのである。しかも、ピラミッドは当初、“双子山”と言われているように、いわゆるクフ（第1ピラミッド）とカウラー（第2ピラミッド）しか無かったようである。そして、この時点では内部にハイテク機器が満載されているので、そのような場所に、“死と復活”を象徴する石棺があろうはずもない。後述するが、これらのハイテク機器は後にすべて取り払われてしまう。おそらく、その後にカッパラーの象徴として石棺が入れられ、第3ピラミッドが建造されたのであろう。未来を預言するために。

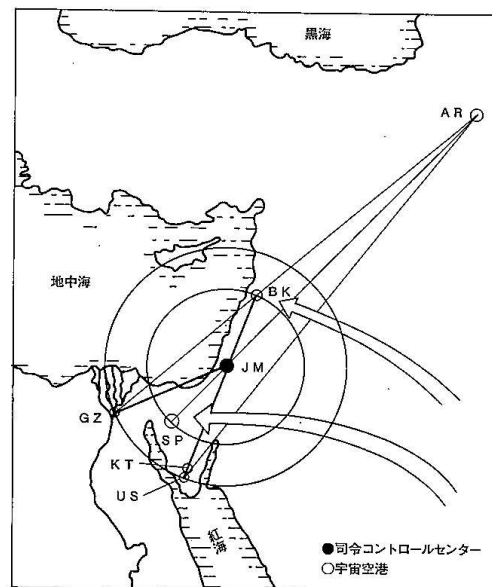
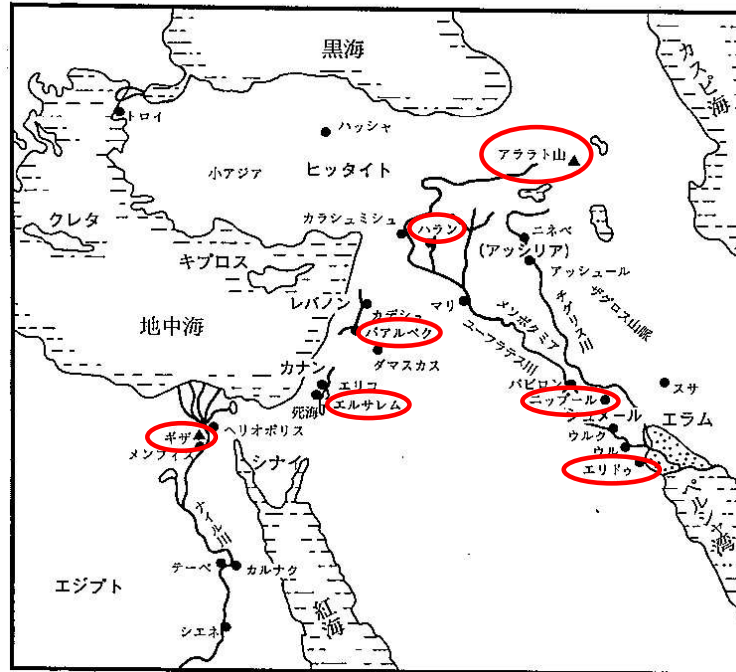
なお、ピラミッドが双子山であることは、次に示すニヌルタの“黒い空の鳥”としての象徴図が示している。これを見ると、ニヌルタは翼の生えた蛇のようでもある。ニヌルタは中南米でカ・インの子孫らに金属精錬などを教え、“偉大な守護者”と彼らから呼ばれていた。後に、ニンギシュジッダもアメリカ大陸に渡り、ケツアルコアトル、“翼の生えた蛇”と呼ばれた。ニンギシュジッダは知恵の神であり、ピラミッドを造った張本人である。彼らは、ニンギシュジッダを再来した“偉大な守護者”と勘違いしたのであろうか。



また、スフィンクスは設計者であるニンギシュジッダの姿であった！そして、“天の二輪戦車の場所”を見つめているのである。ここでは、獅子と一角獣なのかどうか、一対建造したのかどうかは記載されていないが、神社に阿吽を成す狛犬が置かれ、寺の山門に阿吽を成す仁王像が置かれている以上、一対あったことは間違いないだろう。では、いつ破壊されたのか、ということについては後述する。なお、各場所の位置関係は、次に示す地図のようになる。

北の境界線はアララト山（AR）、南の境界線はシナイ半島の南、山々の場所で接する双子の峰であるが、これはカテリナ山（KT）とウマショマル山（US）である。この双子の峰と“着陸場所”バアルベク（ベトセメス、BK）を結ぶ線上のほぼ中心に“宇宙飛行管制センター”エルサレム（シャレム、JM）が位置する。また、アララト山とバアルベクを結ぶ延長上にギザのピラミッド（GZ）が位置する。そして、ギザから真東の方向に、“天の二輪戦車の場所”であるシナイ半島のエル・パラシ（SP）がある。その宇宙空港の近くには、“エジプト川”なる川があるが、これはこの場所を示唆するもの（ピラミッドとスフィンクス）がエジプトにあることを暗示しているのであろう。

古代メソポタミア・エジプト周辺図



エジプト・シナイ半島周辺図。大祖たちの旅の行程、宇宙間連地、王の公道、海の道行きが示されている。

(10) ニンマーの称号

・岩盤からライオンを切り出して形作る仕事が進行していると、マルドゥクがエンキに不満を訴えた。「地球全体を支配することを、約束して下さったではありませんか。しかし、指揮権と栄光は他の者たちに与えられ、私の任務は何も無いままです。あの技巧を凝らした山は、かつての私の領地に置かれていますから、ライオンは私の姿であるべきです！」この言葉にニンギシュジッダは怒り、他のエンキの息子たちも不快に思った。そして、領地を要求するマルドゥクの声に、ニヌルタと彼の兄弟たちも刺激され、叫んだ。「誰もが自分たちの土地と献身的な地球人を求めているのだ！」怒号が飛び交う中、「祝賀を争いの場にしてはなりません！地球はまだ混乱状態にあり、アヌンナキも地球人も僅かな生存者しかいないのです。マルドゥクにニンギシュジッダの名誉を奪わせてはなりません、マルドゥクの言うことも聞いてあげましょう」とニンマーが仲裁した。

「平和を保つため、我々の間で居住地を引き離すべきだ」とエンリルが言った。シナイ半島を中立地帯とし、そこを仲介者ニンマーに割り当てた。ティルムン、“ミサイルの地”とその地は名付けられた。そこから東がエンリルと彼の子孫に割り当てられた。ジウスドラの2人の息子セムとヤフェトも、彼らと共にそこに住まわされた。アブズを含む広大な大地は、エンキとその一族に割り当てられ、ジウスドラの次男ハムもそこに住むことになった。「マルドゥクを彼らの土地の主としよう」とエンキが提案した。「あなたが望むなら、そうすれば良い」とエンリルは言った。ティルムンの南に、ニヌルタが母ニンマーのために住まいを建てた。そこはナツメヤシが生い茂る谷であり、ニヌルタは山の頂上を段々畑にして、母のために香しい庭木を植えた。こうしてすべてが完成すると、地球上のすべての居留地に合図が送られた。“つむじ風”が山岳から海を渡って金塊を運んできた。そして、“天の二輪戦車の場所”からその金塊はニビルへと打ち上げられた。その記念すべき日に、エンリルとエンキは話をして決めた。「仲介者ニンマーに新しい称号を与え、敬意を表そう！ニンフルサグ、“山の頂上の女主人”と名付けよう！」満場一致の拍手で、ニンマーに敬意が表された。「ニンフルサグを称えよ！地球の仲介者に！」アヌンナキは声を揃えて褒め称えた。

*マルドゥクはとんでもない要求をし、他のアヌンナキたちから嫌悪されている。ニンマーが仲裁したことに因んで、彼女は以降、ニンフルサグと呼ばれるようになった。

★聖書の系図と“7倍の復讐”について

①聖書の系図について

聖書の系図は、今回のタブレットにある系図を基に作られたことが判明した。しかし、聖書に於けるカインの系図については、信憑性が低いと考えられる。というのも、名前が明らかにセツの系統から採られているからである。エノクーイラドーメフヤエルの並びとマハラルエルーイエレドーエノクの並びは「合わせ鏡」になっており、名前もほとんど同じである。

- ・カインーエノクーイラドーメフヤエルーメトシャエルーレメク
- ・セツーエノシュークナシマハラルエルーイエレドーエノクーメトシェラーレメクーノア

カ・インは追放された後、地球の反対側＝中南米へ行き、子孫が増えた。そして、時を経てイギギの反乱をきっかけに危機感を募らせたエンリルの命により、ニヌルタがカ・インの子孫を見つけて文明を築かせるまで、知られていなかったのである。しかも、ニヌルタが文明を築かせた時のカ・インの子孫は何世代目だったのか、という手掛かりもまったく無い。

よって、聖書に於けるカインの系図は、セツの系図を基に創られたと言える。実際には、カ・インの子孫も洪水後、生き延びたのであるから、聖書の記載が偽であることが解る。

また、メソポタミアの古文書には、洪水前の（物質的、精神的）荒廃状況を記したものがある。

“第3 シャアトタムがやって来た。人々の姿は飢えのために変わってしまった。（中略）第6 シャアトタムがやって来た時、人々はその娘を食事のために用意した。子供を食物にしたのだ。1つの家族が他の家族をむさぼり食った。”

シャアトタムとは、“死の時の進行”のことであるが、アッシリアの古文書では“アヌの1年に相当する”と書かれているから、“シャル”のことである。つまり、ある時代から数えて3シャル、…、6シャル、ということである。

今回のタブレットでは、マルドゥクが地球人女性サルパニトと結婚したことがきっかけでイギギが反乱を起こし、アヌンナキと地球人との交配が始まったのがマツシャルの時代で、104番目のシャルだった。ここまでは、アダパ誕生以降、特に苦難の時代ではなかったが、地球人との婚姻により、エンリルの怒りは収まらなくなってきた。つまり、この時代から“神”の怒りによる人類の苦難が始まったと考えて良い。次のル・マクの時代に苦難は増加し、110番目のシャルにジウスドラが誕生した。そして、大洪水は120番目のシャルに起こった。

大洪水から6シャル引くと114シャルだが、ジウスドラの時代で、既に苦難は増加していた。では、洪水後の人類の祖ジウスドラの誕生110シャルから6シャルを引くと104シャルとなり、ちょうど苦難が始まった時期と一致する。

よって、このメソポタミアの古文書が記すシャアトタムとは、アヌンナキが地球人と結婚し始めたマツシャルの時代から、ジウスドラが生まれる時代までのことを言っていると見なすのが妥当である。なお、実際に人類の共食いなどがあつたかどうかは、定かではない。

② “7倍の復讐”について

聖書では、“カインを殺す者は、誰であれ7倍の復讐を受ける”とあり、また、レメクは妻に「私は傷の報いに男を殺し、打ち傷の報いに若者を殺す。カインのための復讐が7倍なら、レメクのためには77倍」と言っている。これはどう

解釈すべきなのか。

カ・インに関して、直接的あるいは象徴的に登場した“7”という数字は、アダバが臨終に際して残した次の言葉である。

“お前の種子からは 7 つの国家が現れるだろう。彼らは、取り除けておいた領域で繁栄するだろう。遠く離れた国々に、彼らは居住するだろう。”

カ・インを殺してしまうと、7 つの国家は現れない。そして、カ・インを死刑ではなく追放としたのは、アヌンナキ裁判である。つまり、カ・インを殺す者はアヌンナキ裁判＝「神々」の決定に逆らうことになるから、「神々」から復讐（罰）を受けることになる。

つまり、“カインを殺す者は、誰であれ 7 倍の復讐を受ける”とは、カ・インの子孫が後の金の採掘場となる中南米で 7 つの国を造ることになるから殺してはならない、ということの象徴であろう。

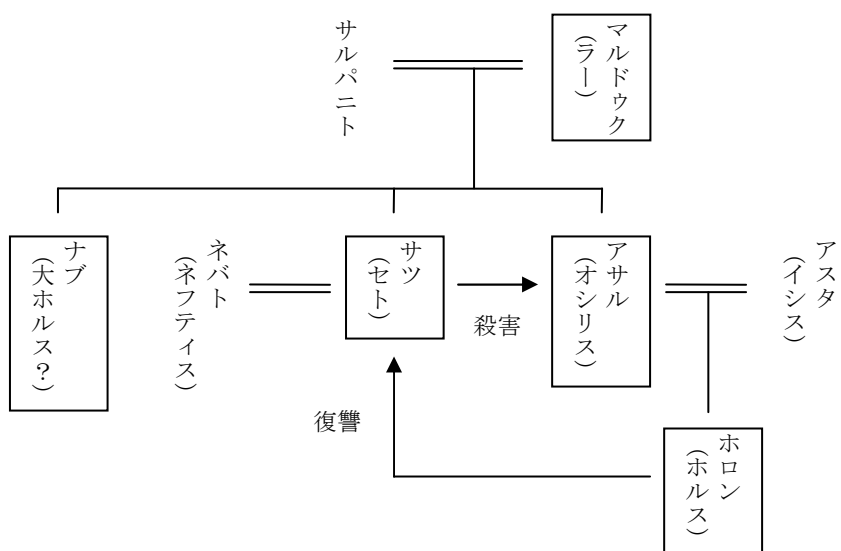
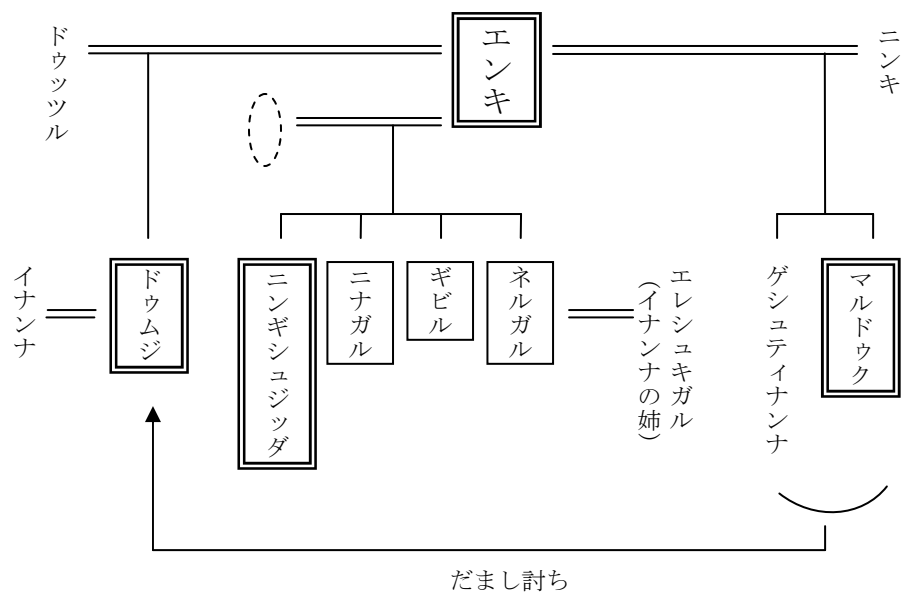
では、レメクの“77 倍の復讐”は、カ・インの子孫が築く 7 つの国に対して 11 倍の 77 の国をレメクの子孫が築く、ということであろうか。前述のように、聖書に於けるカインの系図はセツの系図を基に創られ、カインの子孫レメクはセツの子孫レメクと同一であると見なせば、確かに、セツの系統であるレメクの孫セム、ハム、ヤフェトが世界中に散らばり、今日の世界の基を築き上げたのだから、そうとも取れる。しかし、どこか重要なタイミングで 77 ヶ国となった、という話はどこにも無い。そうすると、“11”という数字の意味を考えなければならない。

そこで 11 と言えば、「生命の樹」に於ける全セフィロトの数である。隠されたセフィラ“ダアト”も含まれるが、ダアトは“隠された知識・叡智”であり、「神々」のみに許されていた知識・叡智である。

つまり、“レメクのための 77 倍の復讐”とは、大洪水以後、レメクの子孫がアヌンナキから“知恵”を授けられ、世界中に散らばり、地球人自身が地球の主となっていくこと、すなわち、「生命の樹」を上昇してアヌンナキのような「神々」のレベルにまで進化していき、人類自身の文明を築き上げることで、それを妨げる者には、「神々」から罰を受けるという象徴であろう。

14：第 11 のタブレットー最初の古代地球大戦争ー終戦協定の行方

このタブレットでは、アヌンナキ同士の争いが語られている。それを良く理解するためには、彼らの血縁関係を知る必要がある。地球のアヌンナキ＝「神々」の主要系図は 6 ページで示したので、ここでは特に争いの原因となったエンキの息子たちの関係を示す。なお、各息子たちの母親については後述する。



(1) マルドゥクの息子同士の戦い（エジプト神話の真相）

・大洪水後の最初のシャルの間、ニンフルサグは何とか皆を仲裁していた。ニビルへの金の供給は、野心と権力争いに影響を及ぼしたのである。地球はゆっくりと生命が戻り、増えていった。ところが、平和的な休戦は、マルドゥクとニヌルタでもなく、エンキとエンリル一族でもなく、イギギによって損なわれた。マルドゥクとサルパニト、そして息子たちがラームで大洪水を回避していた時、2人の息子アサル（オシリス）とサツ（セト）が、イギギの指導者シャムガズの2人の娘に好意を寄せ、姉妹を娶り、地球に戻った。アサルの配偶者はアスタ（イシス）、サツの配偶者はネバト（ネフティス）であった。アサルはマルドゥクと共にアフリカに住むことを選んだ。サツはイギギが住む“着陸場所”の近くに、シャムガズと共に自分の家を構えた。かつてのラームの指導者シャムガズは、地球での領地について気にかけていた。イギギはどこの支配者になるのだ、アサルだけが肥沃な土地を継承するのではないか、と。彼は他のイギギを扇動し、そのことをネバトとサツに毎日話した。継承権をサツに握らせる方法を、彼とネバトは企んだ。

ある日、彼らは祝宴を催し、イギギとアヌンナキを招待した。ネバトは着飾り、食事を用意し、アサルのために歌を歌った。サツは焼いた肉を切り分けた。シャムガズはワインを勧めた。その後、アサルは酔いつぶれ、奥の部屋に運ばれた。そして、棺の中に入れられて密封され、その棺は海に投げ込まれた。その知らせがアスタに届くと、彼女はマルドゥクに泣き叫んで訴えた。「アサルは残忍に殺されました！棺をすぐに見つけなければなりません！」棺はアフリカの海岸の側で発見された。中には硬直したアサルが横たわり、生命の息吹が消えていた。マルドゥクは自分の服を引きちぎり、額に灰をつけた。特に、サルパニトの嘆きは大きかった。エンキは打ちひしがれ、涙を流した。「カ・インの呪いが繰り返されてしまった！」アスタは復讐と世継ぎをマルドゥクに訴えた。「サツは死ななければなりません！あなたの種子で、私に継承者を生ませてください！」しかし、エンキが制した。「それはならぬ！兄弟が殺されたら、兄弟の兄弟が番人となるのだ。故に、サツの命は救われ、お前は彼の種子によってアサルの世継ぎを生まなければならない！」彼女はひどく取り乱し、規則を無視することとした。

アサルの遺体が包まれて、聖堂の墓に埋葬される前に、アスタは彼のペニスから精子を抽出した。そして、自分を妊娠させ、アサルの世継ぎを産んだ。サツはエンキらの前で宣言した。「私はマルドゥクの唯一の後継者だ。私は“2つの峡谷の地”の主人となるのだ！」しかし、アスタが異議を申し立てた。「私には、アサルの世継ぎがいます」サツはこれに狼狽したが、シャムガズは野望を捨てなかった。サツの報復を避けるため、彼女は川のパピルスの茂みに子供と身を隠した。彼女はその子をホロン（ホルス）と名付けた。

ホロンは大叔父ギビルに引き取られ、復讐のために必要なことを指導された。ギビルは彼に、鷹のように飛べる、舞い上がるサンダルを作った。ギビルは神々しい鍬を作り、その矢は稲妻のようだった。ギビルは金属の技術と鍛冶を教えた。鉄と呼ばれる金属の秘密を、ギビルは教えた。ホロンはそれらで武器を作り、忠実な地球人の軍隊を招集した。サツとイギギに挑むため、彼らは北に向

かって進軍した。ティルムンの国境地方、“ミサイルの土地”に達すると、サツがホロンに挑戦状を叩きつけた。軋轢は2人だけの問題なので、1対1での戦いとなった。

ティルムン上空で、サツは“つむじ風”で待ち受けた。ホロンが舞い上がってくると、サツは毒を塗った短い矢を撃ち、ホロンはサソリに刺されたように倒れた。アスタが助けの叫び声を天に放つと、ニンギシュジッダが“空の船”から降りて来た。魔法の力で、彼は毒を善の血に変えた。朝にはホロンは回復し、ヒレと燃える尾を持った天の魚のような“猛火の柱”を、ニンギシュジッダは授けた。その両目は青、赤、青と色を変えた。(追跡ミサイルか?)勝ち誇ったサツに向かって、ホロンは“猛火の柱”を撃ちこみ、更に銛でサツを打ち倒した。サツは地面に激突し、ホロンによってロープで縛り上げられた。ホロンがサツを議会の前に連れて来た時、サツは失明し、睾丸が潰れていた。「サツは失明し、もはや跡取りもできない。生かしておきましょう」とアスタは言った。そして、イギギの中で人として生涯を終えるよう、決定された。

マルドゥクは自分の住居でその決定を聞いて喜んだが、起こったことについては悲しんだ。息子を2人とも失い、サルパニトと共に慰めあった。やがて、もう1人の息子が生まれた。2人はナブ、“預言を運ぶ者”と名付けた。

*これがエジプト神話の軸となる話の真相である。マルドゥクの息子同士の戦いだったのである。エジプト神話には何種類かのヴァージョンがあるが、ここではその1つを引用する。

(<http://www5b.biglobe.ne.jp/~moonover/bekkan/story/index.htm> 参照。)

★エジプト神話

アトゥム神が生み出した最初の性別を持った神々が、大気の男神シュウと、(湿り気のある)大気の女神テフネトである。(アトゥム神ではなく、ラーとしているヴァージョンもある。)シュウとテフネトから、地の神ゲブ(兄)と天の女神ヌト(妹)が生まれた。この二神の間に、オシリス、ハロエリス(大ホルス)、セト、イシス、ネフティスが順に生まれた。(ただし、誕生順は曖昧で、セトがイシスの弟になっていることもあり、話ごとに順番が違っていることがある。ハロエリスについても、ホルスという名前を持つということで、オシリスとイシスの息子ホルスと同一視されていることがある。)そして、オシリスとイシス、セトとネフティスがそれぞれ夫婦となった。(大ホルスはラーにそっくりだったらしいが、後の話しには出てこない。)

ラーがいなくなった後、オシリスがその座を継いで人間界を治めるようになったが、セトはオシリスの王座を奪おうとしていた。ある時、セトは自分の信奉者たちを集めて策略した。宴を開いて兄夫婦を呼び寄せ、丁重にもてなすと思わせかけて、オシリス暗殺を試みたのである。そこに、予期せぬ出来事が起きた。宴会で酔って寝室に入ったオシリスが、イシスとネフティスを間違えたのである。(イシスとネフティスはそっくりな姉妹だったらしい。)ちょうど寝込みを襲おうとやって来たセトはこれを目にし、この怒りも加わって、オシリスを殺害した。オシリスの入った棺は、ナイル川へ流された。イシスは半狂乱に

なって棺を追ったが、行方不明になってしまった。

イシスは長い旅と苦勞の果てに棺を見つけ、エジプトに戻った。そして、何とかしてオシリスを復活させようと考えた。しかし、セトはこのことを知るや、またもや策略する。イシスが葦の茂みの中に棺を隠していなくなっている間に、セトは兄の遺体をバラバラにして、再び川に投げ込んでしまったのである。エジプトでは、死後の世界で永遠の魂を得て蘇るには、体は必要不可欠とされているので、体がすべて揃わないと、肉体は復活できない。しかし、イシスはどんなに探しても、オシリスの男根だけは見つからなかった。ナイル川に住むオクシリニコス（←オ・シ・リ・スを含む）という魚が飲み込んでしまったからである。それでも、どうにか繋ぎ合わせたオシリスの遺体を前に、イシスはネフティスと協力して、復活の儀式を試みた。そして、この魔力によってオシリスは一時的に蘇ったが、体の一部が欠けたままなので、完全な復活ではなく、地上に留まることは出来なかった。オシリスは地下の冥界へ行き、そこに自分の国を造ろうと決意した。これが、冥界神オシリスの誕生である。こうして地上と地下、生者の世界と死者の世界は分割され、以後、自由に行き来することはできなくなってしまった。そして、オシリスのように“体を一緒にされる＝ミイラにされる”と、神々と一緒になれると思うようになった。

生者の世界を去る直前、オシリスとイシスは、地上世界での最後の逢瀬を重ねた。この時、イシスが身籠もったのが、息子のホルスである。（体外受精でもないのに、男根無しで、どうやって身籠もるのか。）ホルスが誕生すると、知恵の神トートはイシスのもとへ行き、忠告した。（トート神はラーからではなく、岩の卵から生まれた。孫悟空みたい。）セトは、いずれ王位を脅かすことになるホルスを殺しに来るから、逃げてホルスが成長する時を待て、と。

これを聞き、イシスは生まれたばかりのホルスを連れて逃亡した。トート神が呪文でイシスの姿を隠し、イシスはホルスを抱いて逃げた。しかし、セトの追っ手は隠れ家を見つけ出し、イシスの留守を狙って、ホルスを毒殺した。

イシスは絶望し、ホルスの体を抱いて泣き叫んだ。その声を聞きつけて、サソリの女神で癒しの力を持つセルケト、一緒にセトの元から逃げ出していたネフティスも駆けつけたが、誰もホルスを蘇らせることは出来なかった。その悲痛な叫びが天にこだまし、時間に干渉して、ちょうど上を通りかかった太陽の船を止めてしまい、時も止まった。太陽の船に乗って時を司っていたトート神は、何事か、と飛び降りてきた。トート神は、時を止めたのがイシスたちであることを知り、驚いて尋ねた。何故、このようなことをしたのか、と。事情を理解したトート神は、ホルスに向かって呪文を唱えた。すると、仮死状態のまま時が止まっていたホルスは何とか息を吹き返し、時は動き始めた。これ以来、イシスは更に警備を強化して、聖なる蛇であるコブラの女神、ウアジェトをホルスの側に置くようになった。（ウアジェトは、後の時代にナイル下流地域の守護者になった女神でもある。）

ホルスが成長すると、イシスはホルスを連れて“神々の法廷”へと乗り込み、

オシリスの座をセトから取り戻す悲願を果たそうとした。（“神々の法廷”とは、太陽の都ヘリオポリスのこと。聖書に言うオン＝アヌの街のこと。）イシスとセトは応酬し合ったが、結局、オシリスの王位はホルスが継ぎ、セトは渋々その下に就くこととなった。ホルスの右目は太陽、左目は月を表す。（右目が重要であることを示唆している。）（以上、ここまで。）

このように、元の話がかなり改竄されていることに気付くだろう。それは、後述するが、すべてはマルドゥクのせいである。

エジプト神話ではオシリスの男根が見つからず、オクシリンコスという魚が飲み込んだことになっているが、それには前述のアラルとアヌの戦いの話が引用されているのである。

アサルが殺害された時、マルドゥクは自分の服を引きちぎり、額に灰をつけた。これが、聖書に於ける“衣を裂き、粗布を纏い、頭から灰を被って祈った（悔い改めた）”ことの原型である。また兄弟殺しが起こったことに、エンキはカ・インの呪いが繰り返されてしまった、と嘆いた。

そして、アスタが川のパピルスの茂みにホロンを隠したことは、モーゼ誕生場面の原型である。

(2) 新たなる“天と地球を結ぶ”施設

・ホロンとサツの抗争の後、エンリルは息子たちを集め、起きている状況を懸念した。「今や、アヌンナキが地球人の姿形に似てきてしまった。かつて自分の兄弟を殺したのはカ・インだったが、今やマルドゥクの息子がそうした。史上初めて、地球人の血を引くアヌンナキが軍隊を集めた。そして、灯台の峰はマルドゥクの領地に位置し、イギギは“二輪戦車の場所”へと侵攻している。サツの名の下、彼らは“天と地球を結ぶ”すべての施設の所有権を主張している。だから、代わりとなる施設を、秘密裏に設置するのだ！海の向こうのニヌルタの土地に、それを造ろう！」こうして、特命がニヌルタに託された。

彼は金塊が撒き散らされた山々の裾野の、地盤が固い平地を選び、上昇と下降の印を付けた。

*おそらく、ナスカ平原のこと。

(3) ドウムジとイナンナの婚約

・この頃、エンキ一族とエンリル一族の幸福となるはずの出来事が起こった。“はず”というのは、これが後に悲劇、大惨事の引き金となるからである。アサルの死後、エンキの末息子ドウムジはエンキから愛されていた。これにマルドゥクが嫉妬した。一方、エンリルの孫娘イナンナは両親に愛され、彼女の揺りかごの横にはエンリルが座った。成長した彼女の美しさは筆舌に尽くしがたく、武芸ではアヌンナキの英雄たちとわたりあった。天空の旅と“空の船”について、彼女は双子の兄ウツから学び、ウツから彼女自身の“空の船”をプレゼントされた。

大洪水後のプラットホームで、ドウムジとイナンナは視線を交わした。技巧

を凝らしたエクルの落成式で、2人に暖かな再会があった。初めのうちは両一族のことで2人は戸惑っていたが、次第に愛し合うようになっていった。ニンフルサグが和平をもたらした時、彼らはお互い愛を告白した。2人は並んで横たわり、心を通い合わせた。イナンナの母ニンガルはドゥムジを認めた。父ナンナルもドゥムジを歓迎し、ウツもそれに賛成した。ドゥムジがイナンナとの関係についてエンキに話すと、エンキは両一族にとっても良いことだとして認めた。彼の兄弟たちも、この縁組を喜んだ。ただ1人、マルドゥクを除いて。ドゥムジの兄弟は、イナンナへの贈り物をいろいろ準備した。そして、慣習に従って、香水をつけ服を着せるために、ドゥムジの妹ゲシュティナンナがイナンナの下へ送られた。

(4) ドゥムジの死

・イナンナは、やって来た将来の義理の妹ゲシュティナンナに、自分の胸の内の明かした。「私は大国を心に描いているの。ドゥムジの名は他の者たちの上に置かれ、私は王妃となり、謀反を起こす国を鎮圧するわ。私はドゥムジに地位を与え、国を正しく導くわ！」この構想は、ゲシュティナンナによってマルドゥクに伝えられた。マルドゥクはひどく動揺し、ある企てをした。

ゲシュティナンナはとても愛らしく着飾り、ドゥムジの下へ行った。そして、「合法的な世継ぎを、花嫁を抱く前に妹との間にもうけなければなりません。イナンナの息子には、相続の権利は無いのです。さあ、お兄様、あなたと私でエンキと同等の権利を受け継ぐ子を持つのです！」と言った。何も知らないドゥムジは彼女の子宮に精子を注いだ。そして夜、7人の凶悪な強盗が自分の家に入ってくる夢を見た。「ドゥッツルの息子よ、“ご主人様”が我々を送り込んだのだ！」彼らは君主の地位を表す頭飾りを奪い、体から王のローブを脱がせて引き裂いた。そして、ドゥムジを裸にして捕らえ、両手を拘束し、彼が死ぬのに任せた。ドゥムジはびっくりして飛び起き、ゲシュティナンナにその話をした。「あなたが私をレイプしたことを、マルドゥクは非難するでしょうね。そして、凶悪な密使を送るでしょう。あなたを裁判にかけ、汚すよう命じるでしょう。エンリル一族との連絡窓口を決裂させるために！」

ドゥムジは叫び怒鳴った。「裏切り者！裏切り者！」彼はウツに助けの信号を送った。そして、護符のようにエンキの名を呟いた。エムシュの砂漠、“蛇の砂漠”の中を、彼は慌てて逃げた。そして、巨大な滝の場所に走りこんだ。そこは、ほとぼしる水によって滑りやすくなっており、彼は足を滑らせた。押し寄せる水が、彼の体を白い泡の中に流し去った。

*マルドゥクとゲシュティナンナの策略により、ドゥムジは死んでしまった。前述の系図では、この2人がニンキから生まれたとした。ゲシュティナンナの母は不明であるが、このような状況から、マルドゥクの直系の妹と考えるのが妥当である。また、ドゥムジの母はドゥッツルと解っているが、他の兄弟の母については不明である。しかし、ニンキとマルドゥクの親密な間柄からすると、彼らの母はニンキではない。そのため、他のエンキの愛人とした。この愛人はドゥッツルである可能性もあるが、8：(4)でエンキは“ニンキと愛人たち”に

よって、更に5人の息子をもうけた、とあるので、おそらく他の愛人であろう。なお、この表現だと5人の息子の誰かの母がエンキ、ということになるが、マルドゥクに味方する者はいなかったことから、それはあり得ないだろう。

(5) エンキの苦悩

・ドゥムジの遺体がニナガルによって巨大な湖（ビクトリア湖）から引き上げられると、“下の方のアブズ（アフリカ南端）”にあるネルガルとエレシュキガルの住まいに運び込まれた。石の厚板の上に、遺体は安置された。知らせを受けたエンキは服を裂き、額に灰を塗った。「我が息子よ！我が息子よ！このように罰せられるどんな罪を、私が犯したというのだ！私がニビルから最初にやって来た時、水辺に着陸し、エア、“水が家の者”が私の名前だった。そして、殺到する水によって地球は流し去られた。アサルは水で溺れ、今、愛するドゥムジは水によって死んだ！私がしてきたことは、すべて正しい目的のためだったのに、何故、私は罰せられるのだ？」エンキはそうのように嘆き、悲しんだ。そして、ゲシュティナンナから真相を聞いた時、苦悩は更に増した。「これで、マルドゥクも罰せられるのだ！」

＊ “下の方のアブズ”にあるネルガルとエレシュキガルの住まいに遺体が運び込まれたので、冥界は下の方にある、あるいは天に対して地の底にあると考えられるようになった。エンキへの罰は、マルドゥクに王位継承を諦めさせられなかった、ということにあるのではないか。

(6) イナンナの冥界下りと“復活”

・ドゥムジの死に、イナンナは悲しみに明け暮れた。彼女は遺体が安置され、姉のいる“下の方のアブズ”に急ぎ、遺体を埋葬するために引き取りに行った。彼女の姉はイナンナの到着を知ると、常道を外れた企みがあるのでは、と疑った。そのため、7つの門毎に、イナンナは装具と武器を1つずつ取り上げられた。そして、エレシュキガルの前に、衣服を脱がされて無力で引き出され、ドゥムジの兄ネルガルによって世継ぎを得ようと企んでいた、と糾弾された。その思いに取り憑かれたエレシュキガルはイナンナの説明に耳を貸さず、自分の高官ナムタルに、6つの病気を解き放つよう命じた。

イナンナがいなくなったことを、彼女の両親は心配した。ナンナルがエンリルに事情を知らせ、エンリルがエンキにメッセージを送った。エンキはネルガルから、何が起こったのかを聞いた。エンキはアブズの粘土で、血を持たず、死の光線によって傷を受けない2人の密使を形作り、彼らをエレシュキガルの下に送った。

彼らがエレシュキガルの前に現れると、彼女は彼らの容貌にとまどった。「お前たちはアヌンナキか、それとも地球人か？」ナムタルが魔法の電力の武器を向けたが、2人の密使は傷つかなかった。ナムタルは彼らをイナンナのところに連れて行った。彼女は杭に吊るされていた。密使たちは“プルセル”と“エミッテル”を向け、“生命の水”を彼女に降り掛け、“生命の植物”を彼女の口に入れた。すると、イナンナは動き出し、蘇った。

2人の密使がイナンナを連れ戻そうとしていると、彼女はドゥムジの遺体を一緒に運んでいくよう指示した。そして、取り上げられた装具と武器は戻された。ドゥムジの住まいだった場所に遺体は運ばれ、真水で洗われ、香しい油が塗られ、赤い経帷子が着せられ、ラピスラズリの厚板の上に安置された。それから、彼を眠りに就かせる場所を岩に掘り出した。そこで“眠りから覚める日”を待ったために。

*エレシュキガルは、イナンナがドゥムジの兄で自分の配偶者ネルガルによって世継ぎを得ようと企んでいた、と糾弾したが、これはアサルとサツの話で出てきたように、兄弟が殺されたら兄弟の兄弟が番人となるのが法で定められていたので、悪い企みではない。単なるエレシュキガルの嫉妬と思い過ごしに過ぎない。

エンキが形作った密使とは、アンドロイドかロボットのようなものであろう。

ナムタルは6つの病気を解き放つよう命じられたが、別の古文書では、イナンナの頭のとっぺんから足のつま先まで全身を打ち叩かせた、とある。そして、イナンナは死体となって支柱に吊るされてしまった、と。イエスは全身を打ち叩かれ、柱に掛けられて処刑された。また、ドゥムジの遺体には赤い経帷子が着せられた。経帷子とは、仏教に於ける白い死装束のこと。マタイ福音書の中では、イエスが赤い外套を着せられ、茨の冠を被せられ、葦の鞭で打たれた。それから、ドゥムジの遺体は“眠りから覚める日”を待つために洞窟の横穴に葬られたが、イエスは処刑後に洞窟の横穴に葬られ、3日後に復活した。

このように、イナンナとドゥムジの物語には、イエスの象徴が満載である！つまり、神宮に聖十字架が安置され、日本が千数百年にわたって秘守してきたという“事実”を知らなければ、イエスの話は創作である、と断定できてしまうほどの内容である。

ヤハウエとイエスは、“私は在りて在る者”と言った。これをヘブライ語で書くと“Ehyeh-Asher-Ehyeh”となる。表現としては未来形であり、“私が誰であろうと、私は私である”という意味である。つまり、「在る」という動詞の3つの時制を同時に表している。“神だった、神である、神であるだろう”と。これは永遠に存在することの象徴で、“存在した、存在する、存在し続ける”ということである。また、イエスは“私はアルファでありオメガである”とも言ったが、これも最初で最後、つまり“永遠”ということである。このタブレットを記したエンキは、前置きのところで紹介したように、同じことを言っている。そうすると、後にイエスとして現れるべき者は、エンキ自身か、エンキに縁が深い者となる。また、この場面は、あらゆる神話に於ける“冥界下り”の原型となっている。

(7) イナンナの怒り

・イナンナはエンキの住まいに行き、マルドゥクの死を要求した。「もう、死は十分だ！マルドゥクは扇動者だが、殺人には関与していない」エンキにマルドゥクを罰する気が無いことを知ると、イナンナは両親とウツのところに行った。彼女は天に届くほどの声で嘆き悲しんだ。「正義を！正義を！復讐を！マルドゥ

クに死を！」エンリルの住まいに、彼の息子たちも合流した。戦いの会議のためである。ニヌルタは厳しい措置を主張した。マルドゥクとイギギが交わした密約を、ウツは報告した。「邪悪な蛇、マルドゥクを地球から取り除かなければならぬ！」とエンリルは賛同した。

マルドゥクの引渡しの要求がエンキに為されると、エンキは息子たちを集めて言った。「最愛のドゥムジのことを悼んではいるが、マルドゥクの権利は守ってやらなければならない。マルドゥクは邪悪な行いを唆したが、ドゥムジは不運によって死んだのだ。ニヌルター味によって殺されないよう、守ってやらなければならない」その父の言葉に賛同したのは、ギビルとニナガルだけだった。

*マルドゥクは“邪悪な蛇”とエンリルたちから呼ばれた。“良い蛇”エンキに相対する蔑称である。つまり、マルドゥクこそが本来のサタンの原型である。そして、エンキが如何にマルドゥクを保護しようと、ギビルとニナガル以外の息子たちからは反対された。どう考えても、悪いのはマルドゥクである。

(8) イナンナ一族とマルドゥクの戦い

・イナンナは、彼女の“空の船”でエンキの息子たちの領土を侵犯した。彼女はマルドゥクに戦いを挑み、ニナガルとギビルの領土まで彼を追跡した。ニヌルタが援護し、“嵐の鳥（空中戦闘機）”から敵の要塞に破滅的なビームを照射した。イシュクルは、空から灼熱の稲妻と粉碎する嵐で攻撃した。彼はアブズで川から魚を押し流し、草原の牛を追散らした。マルドゥクはエクルの方へと逃げた。彼を追って、ニヌルタは居住地に毒入りミサイルを雨嵐のように降らせた。彼の“引き裂く武器”は人々の感覚を奪い、川の水を運ぶ運河は血に染まった。イシュクルの光輝が、夜の闇を燃え立つ昼に変えた。そして、マルドゥクはとうとう、エクルの中に逃げ込んだ。ギビルは目に見えないシールドを張り巡らし、ネルガルはすべてお見通しの目を空の方へ上げた。向きをつけた角によって、“光輝の武器”でイナンナは隠れ家を攻撃した。祖父を守ろうとしたホロンは、その光輝で右目を負傷した。イギギと手下の大勢の地球人をティルムンの向こうでウツが寄せ付けずにいる間、エクルではアヌナキ同士が戦いあった。「マルドゥクに降伏させよ！」エンリルがエンキにそう言った。「兄弟同士で話し合いなさい！」とニンフルサグが言った。

エクルでは、マルドゥクが最後の抵抗を続けていた。その滑らかな側面により、イナンナは攻略しあぐねていた。その時、ニヌルタが秘密の出入り口、北の側面の回転する石を見つけた。そこから真っ暗な廊下をニヌルタは潜り抜け、広い回廊に辿り着いた。そのアーチ型の天井はニビルの水晶の色とりどりの放射で、虹のように輝いていた。中ではマルドゥクが武器を持って待ち構えていた。ニヌルタは武器で応戦し、水晶を砕きながら回廊を進み続けた。上の部屋、“巨大な脈動する石”の場所へマルドゥクは後退し、その入り口でスライド式の石の錠を下ろした。イナンナとイシュクルがニヌルタに続いて進入し、彼らは次の手を考えた。「あの部屋をマルドゥクの石の棺としよう！」とイシュクルが提案した。彼は遮断用の石が3つ、いつでも下に滑ってくるよう準備されていることに気が付いた。「生きながらにして葬られる、ゆっくりとした死をマル

ドゥクに宣告しましょう！」とイナンナは同意した。彼らは回廊の端で、その遮断用の石を解き放ち、マルドゥクを墓の中に封印した。

＊ニヌルタとイシュクルは軍神である。また、ホルスが右目を負傷した話の原型はここで登場する。ホロンの右目が、イナンナの“光輝の武器”によって負傷したのである。

ピラミッドの内部はニビルの水晶などで覆われ、虹のように輝いていたのである。何と、ピラミッドはマルドゥクの墓と化してしまった。

(9) マルドゥクの追放

・マルドゥクは生きたまま葬られた。地上では、彼の妻サルパニトが泣いて訴えた。エンキの下へ行き、「生きている者たちの下へ、マルドゥクを戻すべきです！」また、イナンナへの取り成しができるウツとナンナルの下へも、償いの服を着て行った。「マルドゥクに命を与えたまえ！支配権は放棄しますから、慎ましく人生を続けさせて下さい！」と懇願した。イナンナは「私の最愛の人の死の咎を受け、扇動者は死ななければなりません！」と突っぱねた。仲介者ニンフルサグはエンキとエンリルを呼び寄せた。「マルドゥクは罰せられなければなりません、死には根拠がありません。生きたまま追放しましょう。地球の覇権は、ニヌルタに一任しましょう」と言った。この言葉に、エンリルは喜んだ。エンキは打ち沈んだが、アフリカには荒廃が広がっており、ドゥムジの喪に服しているので、その意見に賛成した。エンリルは言った。「平和を取り戻し、マルドゥクを生かしたいのなら、拘束力のある協定を結ばなければならない。天と地球を結ぶすべての施設は、私の手だけに委ねられること。“2つの峡谷の土地”は、お前の息子に与えること。マルドゥクに従ったイギギは、“着陸場所”を諦めて立ち去ること。そして、“戻れない土地”へ、ジウスドラの子孫が住んでいないところへ、マルドゥクは追放されること」エンキは頭を垂れて納得した。エクルの内部を知るのはニンギシュジッタだけだったので、彼がその土地の支配者となった。

＊エンリルの後継者はニヌルタとなった。そして、すべての覇権はエンリルの手中に入った。

・マルドゥク救出のため、ニンギシュジッタが呼ばれた。生きたまま埋葬された者を救うという難題を、彼は与えられた。何とか、上部に開口部を切り出すことにより、救出できることが判った。「私が指示する場所に石を切り出し、そこから上に曲がりくねった通路を通して救出シャフトを作るのです。隠れた空洞を伝ってエクルの真ん中に出られます。石の中の、渦巻状の空洞を突き破るのです。内部への入り口は爆破して開けます。大回廊まで進み、3本の門を引き揚げ、最上部の部屋、彼の死の監獄に到達します」とニンギシュジッタは言った。

彼の指示通り、アヌンナキは最上部の部屋に辿り着き、気絶していたマルドゥクを何とか救出した。外ではサルパニトとナブ、エンキが待っていた。マル

ドゥクが目を覚まし、エンキが解放の条件を伝えると、マルドゥクは激怒した。「生得権が剥奪されるぐらいなら、死んだ方がましだ！」サルパニトが彼の腕をナブに押しやり、「私たちは、あなたの未来の一部なのよ」と穏やかに言った。「私は宿命に屈した」と、マルドゥクは聞き取れないような声で言った。彼はサルパニトとナブを連れ、角のある獣たちが追い立てられた場所へ旅立った。

*ピラミッドの内部構造は、未だに知られていない部分が存在するようである。マルドゥクは命を助けられたのにも関わらず、まったく自分の立場が解っていない。そして、ピラミッドの中で死にそうになり、復活したマルドゥク。石棺は“死と復活”の儀式を象徴しているが、そうするとマルドゥクが“復活”の原型か？ならば、イエスは？

・マルドゥクがいなくなった後、ニヌルタは再びシャフトからエクルに入った。水平な廊下を通して、彼はエクルの外陰部へ行った。その東の壁で、“運命の石板”が赤く輝いていた。「この力が、私に殺しの追跡をさせるのだ！」と叫び、自分の副官たちに破壊するよう命じた。ニヌルタは引き返し、大回廊を抜けて最上部の部屋に行った。くり抜いたチェストにエクルの心臓が鼓動しており、5つの区画によって増幅されていた。ニヌルタはそれを指令杖で叩き壊した。また、方角を決定するググ石を運び出し、自分の選んだ場所に持って行くよう指示した。大回廊を歩きながら、ニヌルタは27組のニビルの水晶体を調べた。マルドゥクとの戦いで多くは傷ついてはいたが、無傷のものもあった。丸ごと残っているものは取り除き、他のものはビームで粉砕した。ニヌルタは外に出ると、“黒い鳥”で舞い上がった。そして、エクルの頂上石は敵の象徴そのものだったので、武器で揺さぶってぐらつかせ、地面に落として粉々に砕いた。「これで、マルドゥクの恐怖は永久に終わった！」とニヌルタは勝ち誇って宣言した。「あなたはアヌのようだ！」と集まったアヌンナキは賞賛した。

無能となった灯台の代わりに、“二輪戦車の場所”近くの山が選ばれ、水晶体が再配置された。その山はマシュ山、“至高の空のバーク船”と呼ばれた。ニヌルタにはエンリルの地位が与えられ、あらゆる土地でエンリルの代理となった。また、ヒマラヤ杉の山々にある“着陸場所”の支配権はイシュクルに与えられた。そこから南と東の土地、イギギとその子孫が広まっている場所はナンナルに与えられた。“二輪戦車の場所”と“地球の臍”の司令官はウツとなった。“2つの峡谷の土地”はニンギシュジッタに支配権が与えられたが、イナンナが反対し、亡くなったドゥムジの継承権を主張した。そして、自分自身の支配権をエンリルとエンキに要求した。どうしたら彼女の要求を満たすことができるのか、アヌンナキは熟考した。それと共に、どのように人類に対して威厳を保ち続け、どのようにして多数の者を少数の者に服従させるのか、アヌと意見を交わした。アヌは配偶者アンツと地球を来訪することにした。

*マルドゥクとの戦い後、ニヌルタによってピラミッド内部と冠石は破壊され、現在のようにもぬけの殻となった。彼の乗り物“黒い鳥”は現在のステルス機を思わせると同時に、導きの鳥“鳥”の原型であろう。

スフィンクスについては何も記載が無いが、一対の内の片方が無くなるほどの災害は、おそらくこのイナンナ族とマルドゥクの激烈な戦いによって起こったのではないか。つまり、イナンナ族の激しい攻撃により、破壊されたのであろう。あるいは、後の核戦争によるものかもしれない。

ウツは“二輪戦車の場所”以外に“地球の臍エルサレム”も任された。ならば、エルサレムに最も縁の深い「神」はウツとなる。

15：第12のタブレットー神々の聖域ー人類に与えられた三大文明の地域

(1) アヌの来訪

・アヌの到着を待ち受ける間、アヌンナキはエディンに住まいを再建し始めた。エンキの最初の都エリドゥはおびただしい泥に覆われていたが、その上に新しいエリドゥが計画された。その中心、高くしたブラットホームの上にエンキとニンキの住まい、“凱旋する主の家”が建てられた。エンキはその聖域に“メ”の公式を保管した。新しいニブル・キも、かつてのニブル・キの上に建てられた。神聖な区域が壁で仕切られ、エンリルとニンリルの7階建ての住まい（ジグラット）が建てられた。エンリルは“運命の石板”をそこに置き、武器、土地を走査する“持ち上げられた目（レーダー）”やすべてを突き抜ける“持ち上げられたビーム（レーザー）”で保護した。中庭には、高速で進む“空の鳥”を置いていた。そして、アヌを迎えるための住まいがエディンの中で選ばれた。ウヌグ・キ、“快適な場所”と名付けられた。そこに木陰が造られ、純白の建物、7階建ての“アヌの家”が建てられた。

アヌの二輪戦車が来訪すると、アヌンナキの“空の船”が誘導した。司令官ウツがまず出迎え、その後に指導者たちが続いた。彼らは再会を祝福しあった。そして、お互いを見て、年の取り具合を推し量った。両親はシャルとしては年上のはずなのに、子供たちの方が年上に見えた…。2人の息子は老けて、髭面だった。かつて美人だったニンフルサグは、腰が曲がり皺だらけだった。お互い涙が溢れたが、喜びと共に、悲しみの涙でもあった。

*ウヌグ・キとは、アッカド語でウルクのこと。洪水後のエディンには、堆積した泥の上に都市が造られた。ニビルと地球の公転周期の違いから、浦島太郎のような現象が、実際に起きてしまったのである。浦島太郎は竜宮城で宴を満喫し、帰って来て玉手箱を開けたら、本来の年齢まで老けてしまった。つまり、竜宮城の時間サイクルが長いことを暗示している。これは、ニビルでは地球よりも寿命サイクルが長いことが原型となっていたのである。竜宮城とは海の神の世界。海の神の原型はエンキだから、エンキがいた元々の世界はニビルである。

・アヌは“アヌの家”へ招待され、体を流して貰って休憩し、香水をつけて服を着せてもらった。アンツは女性のアヌンナキに付き添われ、“黄金のベッドの家”へ行った。そして、アヌと同様の歓迎を受けた。宴席では、玉座の傍らにエンキ、エンリル、ニンフルサグが立った。そして、全裸の地球人たちが接客

係としてワインや上等の油を給仕した。他の者たちは、中庭の隅でエンキとエンリルから贈られた牛と羊を炙っていた。

宴の開始は天の印だった。エンリルの指示で、天に造詣の深いズムルという神官が“アヌの家”の階段を昇り、惑星の出現を告げた。最初の段でキシヤルが東の空に現れ、ラームが2段目で姿を見せた。3段目でムンムが、4段目でアンシャルが昇った。5段目でラハムが見え、6段目から月が知らされた。それから、ズムルの合図で讃歌“アヌの惑星が昇る”が歌われ、一番上の段から赤く後光の差したニビルが見えてきた。アヌンナキは音楽に合わせて踊り歌った。その合図で大篝火が灯され、あちこちの場所で煌いた。夜がふける前に、エディン全体が篝火で灯された。牛肉、羊、魚、家禽の料理に続き、ワインとビールが添えられた。アヌンナキ全員がアヌとアンツから感謝の言葉を受け、宴が終わるとアヌとアンツは宿泊場所に戻った。

*宴席では何故か、人類は全裸でご奉仕した。これが後に、ローマ帝国などでの墮落の饗宴となる。アヌとアンツの宿泊場所は別々だった。また、ジグラットは天体観測の場でもある。「神々」を迎えるのに篝火を焚く神道の御神事は、これが原型である。最も重要な御神事は、夜、篝火を焚いて行われるのである。

(2) アヌとの対談とガルズについて

・地球の数日に亘ってアヌとアンツは眠り、6日目にアヌはエンリルらと話をした。エンリルの誓いによって地球人が拭い去られ、再び増殖したこと、新たな金の採掘場と“二輪戦車の場所”、アヌンナキ同士の平和と武力衝突などについて、アヌは知った。そして、エンキがガルズの石板について話した。アヌはとても困惑した。「私は、そのような名前の密使を地球に送った覚えなど無い」エンキ、エンリルは困惑し、皆、首を傾げた。「ガルズのおかげで、ジウストラと生命の種子が守られたのです」とエンキが言った。「ガルズのおかげで、私たちは地球に残ることができたのです。ニビルに戻ったら死ぬことになる、と言われたのです」とエンリルが言った。アヌは訝しげだった。「サイクルがかなり変わるので大混乱を引き起こすが、万能薬で治るのだ！」「では、ガルズは誰の密使だったのですか」と、エンキとエンリルが同時に尋ねた。「誰が地球人を助けることを望み、誰が私たちを地球にとどめたのですか」「“万物の創造主”の代わりにガルズが現れたのだわ」とニンプルサグが頷いた。「地球人の創造も運命付けられていた、と思わざるを得ないわ」しばらくの間、4人は黙っていた。「我々が宿命を定める間ずっと、運命の手がすべての歩みを導いたのだ！」とアヌが言った。「ならば、“万物の創造主”の御意思は明らかだ。地球と地球人にとって、我々は使者に過ぎない。地球は地球人のものであり、我々は彼らを維持し、発展させるように意図されたのだ。それが使命ならば、しかるべき行動を取りましょう！」とエンキが言った。そこで、次のように決定が下された。

a：人類の都市を設置し、その中の神聖な区域にアヌンナキの住まいを造る。

b：ニビルのように王権を確立し、王冠と笏を選ばれた人間に与える。

c：アヌンナキの言葉は彼によって伝えられ、労働と器用さを強化する。

d：司祭職を制定し、アヌナキを気高い「神」として崇拝させる。

e：秘密の知識を教え、人類に文明を伝授する。

f：4つの区域を造り、3つは人類のため、1つは立ち入り禁止区域とする。

第1の地域は昔のエディンであり、エンリルと彼の息子たちが支配する。

第2の地域は“2つの峡谷の土地”で、エンキと彼の息子たちが支配する。

第3の地域は他の2つとは交流せず、隔絶地でイナンナに与えられる。

第4の地域はアヌナキだけの神聖な“二輪戦車の場所”の半島とする。

*アヌとアンツが5日間眠り続けたことから、地球との生物学的周期がかなり異なることが解る。そして、このサイクルの変化は、万能薬＝ワインで治るのである。(本当か?)

また、アダムゥとティアマトの創成、大洪水からの人類の救出の場面に続き、ここでも“万物の創造主”が登場している。アヌナキは、宇宙創造の“万物の創造主”の御意思＝宇宙の法則・宿命こそが唯一すべて、ということを知っているのであろう。ガルズとは、エンキがこのタブレットの中で創作した人物なのか、ニビルにいるアヌの知らない人物なのか、はたまた何処か他の、更に進化した惑星から派遣された人物なのか？ここでのエンキの最後の言葉からすると、地球人を創成した最初の時点から、彼らに地球を明け渡そうと考えていたエンキの創作人物ではないか、と思われる。

ここで、人類に文明を伝授することが決定された。人類史では、農業の始まりが BC11000 年、新石器時代の始まりが BC7500 年、最初の文明開化が BC3800 年であり、3600 年前後の間隔で人類は段階的な発展を遂げている。ニビルの接近毎に、人類が消化しきれる程度の「知恵」が授けられたからである。

シュメール文明開化後は、人類の自然な発展に任せたので、急激な文明の発展は見られない。というよりも、「神々」の助力により築いた文明レベルのものを、人類だけで達成することはなかなか困難だったのである。ジグラットなどを見ても、現在の技術ですら、完璧に建造することが困難なほど高度な「神々」の技術である。

(3) イナンナへの愛情

・決定が下されると、アヌはマルドゥクのことを尋ねた。「もう一度、彼に会わねばならぬ。ドゥムジとニンギシュジツダをニビルに招いたことで、マルドゥクの憤怒は私自身が招いたのかも知れぬ」とアヌは言った。彼は、マルドゥクへの刑罰を考え直すことを願った。アヌは、マルドゥクが海の向こうの土地にいることをエンリルから聞いた。

その遠い土地へ行く前に、アヌ夫妻はエディンを視察した。エリドゥで、エンキが“メ”を独り占めしていることを、エンリルは不満として述べた。アヌは、“メ”を分かち合うよう、エンキに言った。ウヌグ・キでは、若いアヌナキが挨拶に参上した。アヌはとりわけ、イナンナが気に入った。そして、その場所と自分たちが地球を視察するために使う船を、イナンナに持参金として与えることを宣言した。イナンナは喜んで、踊り歌い始めた。彼女のアヌへの讃歌は、やがて聖歌として口ずさまれることになった。

＊何と、大神アヌに対するイナンナの讃歌が、後の聖歌となったのである。そして、大神アヌの前で歌い踊る様は、岩戸に隠れた（天照）大神の前で歌い踊る天宇受売命の原型である。イナンナは愛と美の女神であるが、歌舞の女神でもある。シッパールが完成した時にも、彼女はアヌの前で歌い踊った。

(4) 錫と青銅の発見

・アヌ夫妻は海の向こうの土地へと向かった。エンキとエンリル、ニヌルタ、イシュクルが同行した。アヌに金の豊富さを印象付けるため、ニヌルタは内部が純金で覆われた住居をそこに建てていた。アヌは、何シャル採っても十分な金があることを確認した。また、ニヌルタは新しい金属がどのように石から抽出されるのか見せた。彼はそれを“アナク（錫）”アヌナキ製、と呼んだ。そして、それを大量の銅と混ぜ合わせることで、強力な金属を考案したことも見せた。湖畔でその金属が採れる巨大な湖を、アヌは“アナクの湖”と命名した。

＊いまや、金属精錬はニヌルタが取り仕切っていた。彼が発見した錫は、“新しい”と記載されているので、ニビルには存在しない、あるいはごく微量しか存在しないのであろう。“アナクの湖”とは、チチカカ湖のことである。チチカカ湖に接するボリビアは、錫の一大産地である。

また、錫と銅の合金は青銅である。これが“青銅の蛇”に繋がる。蛇はヘブライ語でナハシュである。これには2つの別の意味がある。“秘密を知っている、あるいは秘密を解決する彼”という意味と“銅の彼”という意味である。エンキは鉱山で採掘をしており、ブズルとあだ名されていた。これは“秘密を解決する彼”と“金属鉱山の彼”を意味した。つまり、“蛇”はエンキを象徴しているのである。そこに、「神々」の中の英雄ニヌルタが考案した青銅を合わせ、“青銅の蛇”という象徴ができたのである。

(5) マルドゥクへの赦しと地球年の開始

・その頃、角がある巨大な獣が追われた地、北の土地から、マルドゥクがナブを連れてエンキとアヌの前に現れた。サルパニトは死んでいた。アヌはマルドゥクを強く抱き寄せた。「お前は十分罰を受けた」とアヌは言い、右手を彼の頭に置き、赦しを与えた。集まった皆は、黄金の場所、山の高地から平地へ降りて行った。そこに、ニヌルタが水平線にまで及ぶ新しい“二輪戦車の場所”を整えていた。アヌとアンツは金を積み込み、そこからニビルへと帰還した。「地球と地球人にどんな運命が意図されようと、為るがままに任せよ！知識に見合った天と地球の秘密を教え、正義の法と道徳的正しさを教え、立ち去るのだ！」と言い残して。

悲しみに溢れた別れの沈黙を最初に破ったのは、マルドゥクだった。彼の言葉には怒りが込められていた。「この新しい“二輪戦車の場所”は何なのですか。私の追放後、私の知識無しで何をしたのですか？」エンキが4つの地域についての決定を伝えると、マルドゥクの怒りは頂点に達した。「何故、ドゥムジの死を招いたイナンナに領地が与えられたのだ！」「決議を変えることはできない！」とエンキがマルドゥクに言った。

彼らはそれぞれの“空の船”でエディンと隣接する場所に戻った。トラブルを察したエンリルは、イシュクルに残るよう指示し、監視させた。

アヌの訪問を記念して、新しい時間経過の数え方が導入された。ニビルのシヤルではなく、地球の年（ねん）によって数えるのである。エンリルに捧げられた牡牛の時代に、地球年のカウントが始まった。

*角がある巨大な獣が追われた地とは、北の土地だった。つまり、角がある巨大な獣とは、マンモスのことである。

アヌは地球を運命に任せ、成すべきことを成したら地球から立ち去るように指導者たちに命じた。だから、現在、「神々」は地球にいない。

水平線にまで及ぶ新しい“二輪戦車の場所”は、ナスカ平原である。やはり、巨大な地上絵は発着場の目印だったのである。

マルドゥクはアヌから赦されたのにも関わらず、まったく反省の色が無く、指導者たちを責めるばかりである。

地球年は、BC3760 年から始まった。つまり、アヌの最後の公式訪問が BC3760 年だった、ということである。

(6) 第 1 の地域

・第 1 の地域で、泥からレンガを作る方法を教え、都市を築かせた。その中で神聖な区域がアヌンナキに捧げられ、“神殿”と呼ばれるようになった。人類に継承順位が解るように、アヌンナキは数字による階級で讃えられた。

ラガシュには、ニヌルタのための区域“ギルス”が建てられ、彼の“黒い空の鳥”が置かれた。彼の神殿住居は、“50 の家”エニンヌと呼ばれた。シッパールにはウツの住居が建てられ、“輝く家”エバツバルと呼ばれた。ウツはそこから正義の法を発布した。シュルバクから近い場所アダブに、ニンフルサグの新しいセンターが造られ、そこにある彼女の住居は“救援と治療知識の家”と呼ばれ、地球人が形作られた方法の“メ”が保管された。ウリムにはナンナルの住居が建てられ、“王座の種子の家”と呼ばれた。イシュクルは山間地に戻り、彼の住居は“7 つの嵐の家”と呼ばれた。イナンナはウヌグ・キの、アヌから贈られた家に住んだ。そして、マルドゥクとナブはエリドゥに住んだが、エディンに彼らの住居は無かった。

(7) ニヌルタの栄光

・第 1 の地域では、アヌンナキが地球人に知識を教えた。工芸、農業、土木…。繁栄が土地を満たし、キ・エンギ、“威厳ある監視の土地”と呼ばれた。そして、地球人自身の都市を持たせることとなり、キシユ、“笏の都市”と呼ばれ、人類の王権が始まった。そこの聖別した土に、エンリルは“天空のように明るい物体”を埋め込んだ。そして、ニヌルタが最初の王を任命し、“強力な人”という称号を与えた。

ニヌルタは、王権のための神聖な公式が記録された“メ”をもらうため、正装してエンキの下に赴いた。エンキは彼に 50 個の“メ”を与えた。

キシユでは聖なるニサバが書くことを教え、ニンカシがビール作りを教えた。

ニヌルタの指導により冶金と鍛冶が広まり、車輪の付いた荷馬車が初めて人類により作られた。そして、正義の法と道徳的正しさがキシュに普及した。人々がニヌルタを讃える聖歌を作ったのも、キシュだった。彼の英雄譚、“黒い鳥”を詠唱した。それは、ニヌルタの栄光の時代、射手座の時代だった。その間、イナンナは第三の地域の支配権を心待ちにしていた。

* “天空のように明るい物体”は不明であるが、土地を聖別する原型となっている。“強力な人”とは、シュメール王名表に因れば、ジュシュルである。

英雄ニヌルタは、彼の乗っていた乗り物に因んで“黒い鳥”が象徴となった。“黒い鳥”といえは鳥（からす）であり、天皇の側近中の側近である八咫鳥に通じる。八咫鳥が取り仕切る神社の御神事で弓が重要なのも、この英雄＝軍神の星座が射手座であるからに他ならない。

(8) イナンナの奸計

・ニヌルタが王権を手に入れた様子を見ていたイナンナは、エンキから“メ”を手に入れることを企んだ。彼女は自分の部屋女中ニンシュブルをエンキの下に送り、自分が訪問することを知らせた。これを聞いたエンキは大喜びで、高官イシムドに指示を与えた。「乙女が1人きりで、我が都エリドゥに歩みを進めている。到着したら私の部屋に案内し、冷たい水を飲ませ、大麦のケーキにバターを添えて出すのだ。甘いワインを用意し、ビールを容器になみなみと注ぐのだ」イナンナが到着すると、イシムドが言われたように出迎えた。エンキは彼女に会うと、その美しさに圧倒された…。イナンナは宝石で飾り立て、薄いドレスから体の線が透けて見えた。彼女がかがむと、エンキは彼女の外陰部に惚れ惚れした。2人はワインを飲み、ビール飲み競争をした。「“メ”を見せて？ “メ”を私の手に握らせて？」と戯れるようにイナンナはせがんだ。ビール飲み競争をしながら、エンキは7回、“メ”を握らせた。主権と王権、司祭権と筆記権の神聖な公式、愛の作法のためや交戦のための“メ”を、エンキはイナンナに渡した。音楽と歌のため、木工と金属と貴石のと、文明化した王国に必要な94の“メ”を、エンキはイナンナに渡した。

イナンナは戦勝品をしっかりと握り締め、まどろんでいるエンキの下を抜け出した。そして、“空の船”まで急いで行き、舞い上がった。エンキはイシムドから起こされると、イナンナを捕まえるよう、イシムドに命じた。イナンナの住居があるウヌグ・キに近づいたところで、イナンナの“空の船”はイシムドの乗ったエンキの“空の船”に阻止された。イナンナがエリドゥのエンキの下に連れ戻された時、“メ”は彼女の手元には無く、ニンシュブルが“アヌの家”に持って行った後だった。

エンキは自分の権力とアヌの名に於いて、“メ”を戻すよう命じ、自分の家に監禁した。これを聞いたエンリルがエリドゥにやって来た。「私は当然の権利として“メ”を手に入れたの。エンキ自身が、私の手に乗せてくれたのよ！」とイナンナはエンリルに言った。エンキはやむなく、それが事実であることを認めた。「最初の約束どおり、任期が完了したら、ウヌグ・キに王権を渡す！」とエンリルは宣言した。

*イナンナのお色気作戦にマンマとハメられたエンキ。(エンキがイナンナにハメたかどうかは不明。)相変わらず、女癖は治っていない。(病的だから“治す”。)加えて、酒癖も良くないようだ。それにしても、どれほどの美しさか、イナンナに会ってみたいものである。

(9) バベルの塔

・マルドゥクはこの話を聞き、カンカンになった。「屈辱はもうごめんだ！」とマルドゥクはエンキに怒鳴った。マルドゥクは、エディンにマルドゥクのための神聖な都市をすぐに造るよう、エンリルに要求した。しかし、エンリルは聞く耳を持たなかったので、マルドゥクは宿命を己の手に握った。ウヌグ・キが選ばれる前にアヌの到着のためにと考えられていた場所へ、ナブはイギギとその子孫を呼び集めた。そこに、マルドゥクのための神聖な都市、“空の船”のための場所を築くために。彼の信奉者はそこに集まったが、建築資材となる石が無かった。マルドゥクは、代わりにレンガを作る方法を教えた。それを使って、頂上が天にも届く塔を造ろうと目論んだ。

その計画を阻止するため、エンリルが現場へ急行し、マルドゥクを懐柔しようとした。しかし、エンリルは失敗した。「マルドゥクは許可されていない“天への門”を建てている。彼は地球人にそれを託しているのだ！」とエンリルは息子たちとその子孫に言った。「これが達成されれば、人類にできないことは無くなってしまう。この邪悪な計画は阻止せねばならない」とニヌルタが言い、全員、それに賛成した。

ニブル・キからエンリル一族がやって来たのは、夜のことだった。彼らは“空の船”から炎と硫黄を雨のように降らせ、塔と野営地全体を完膚なきまでに叩きのめした。その後すぐに、この指導者と信奉者たちを国外に追い散らすことをエンリルは決めた。それにより、彼らの意思疎通を混乱させ、一致団結を砕くために、エンリルは決定した。「今まで、地球人は1つの言語を喋っていた。だが、これ以降、私は彼らの言語を混乱させる！彼らは、お互いの言うことが解らなくなるのだ！」地球の年で数えて380年目に、この事件が起きた。エンリルは、それぞれの地域に異なる言語と文字を与え、一方が他方を理解できないようにした。

*マルドゥクはアヌから恩赦されたぐらいだから、彼が怒ることは間違っている。しかし、彼は禁断の建物を建てようとした。聖書でいう“バベルの塔”である。聖書では東の方からシンアルの地に移動してきた人々がバベルの塔を建てたことになっている。そして、シンアルの地の王(英雄)はニムロデ(ニムロド)だった。

“ハムの子孫はクシュ、ミツライム、プテ、カナンであった。クシュの子はニムロデであって、このニムロデは世の権力者となった最初の人である。彼は主の前に力ある狩猟者であった。彼の国は、最初シンアルの地にあるバベル、エレク、アカデ、カルネであった。”

聖書によると、クシュはエジプトの領域だが、そこからニムロデがバベルのあるシンアルの地まで来たことになる。エジプトからこの地にやって来たのは、まさにマルドゥクである。そして、バベルの塔は実質、マルドゥクが建てたに等しいから、英雄ニムロデとはマルドゥクの象徴であると言える。ニムロデとはヘブライ語で“我々は反逆する”を意味しているが、それもマルドゥクであれば筋が通る。

これに、(7)の記述、ニヌルタによって最初に任命されたキシュの王の名が“強力な人”であった、ということも合わせて考えると、クシュはキシュに通じるから、このキシュの王“強力な人”を原型とし、マルドゥクのバベルの塔建造の話に合わせて聖書のニムロデの話が創作されたと考えるのが妥当である。

そんな“邪悪な建物と行い”を、エンリルとその一族は断固として許せなかった。嵐のようなミサイル攻撃により、塔と野営地全体を完膚なきまでに叩きのめし、言語もバラバラにするとは、よほど腹の虫が収まらなかったのであろう。おそらく、これらの異なった言語は、エンリルがエンキに創作させたのである。後に出てくるが、インダス文明のサンスクリット語も、エンキが知恵を振り絞って創作した。

(10) イナンナの都市への王権移譲

・23人の王がキシュを統治し、408年間、“王権の都市”だった。割り当てられた任期が完了すると、予定通り、王権はウヌグ・キに移譲され、“天国のように明るい物体”がキシュから移動された。その決定が人々に伝えられると、イナンナに賞賛の聖歌を贈った。

“キラキラとまばゆい“メ”のレディ。正義に適い、光を纏った、天国と地球に愛されし者。アヌの愛によって聖別され、敬愛を一身に集め、彼女は7度“メ”を獲得し、手に備えている。それらは王権のティアラに相応しく、高位の司祭職に相応しい。偉大なる“メ”のレディ、彼女はその守護者！”

地球年の数えが始まって409年後、第1の地域の王権はウヌグ・キに移された。その最初の王は、エアンナ神殿の高僧で、ウツの息子メシュキアガシェルだった！マルドゥクは“2つの峡谷の土地”へ行った。そして、第2の地域が設置されたら、その支配者になるつもりでいた。

*ウツの息子とあるが、どの配偶者の子なのか不明である。おそらく、人間の女性との間にできた息子。アヌンナキとの間の子ならば、「神」に仕える高僧ではなく、「神」自身だからである。

(11) ニンギシュジッダの旅立ち

・マルドゥクは長期不在後に“2つの峡谷の土地”に戻ると、支配者としてニンギシュジッダがおり、彼は“崇高な神”となっていた。地球人を娶ったアヌンナキの子孫の助けを借りて、彼は国を監督し、かつてマルドゥクが計画したことは撤回されていた。「これはどういうことだ？！」とマルドゥクはニンギシュジッダに迫った。隠しておいたものを破壊したことで、マルドゥクはニンギシュジッダを責めた。ホロンを水の無い場所、砂漠に旅立たせたことについて責

めた。「性的快楽も楽しめないような、果てしない場所にだと?!」彼らは大騒ぎを繰り広げ、激しい口喧嘩を始めた。「お前は俺の代理人に過ぎない。お前はずっと俺の居場所を奪ってきた。嫌なら、別の土地へ去れ！」350年間、彼らは言い争い、そのため土地は混乱し、兄弟の間で分割された。そして、とうとうエンキがニンギシュジッダに言った。「平和のために、他の土地へ旅立つのだ！」ニンギシュジッダは海の向こうの土地へ行くことにし、信奉者の一団と共に旅立った。その時は 650 地球年だったが、新しい土地で“翼のある蛇”ケツアルコアトルと呼ばれたニンギシュジッダは、独自に新しい年数カウントを始めてしまった。

*350 年も続いた口喧嘩とは、相当なものである。ニンギシュジッダを代理人と決め付けたこんな男が、エジプトの神として君臨することになるろうとは。

何と、ニンギシュジッダがアメリカ大陸へ渡り、ケツアルコアトルとして崇拝されたのである！そして、独自に新しい年数カウントを始めたのはマヤ文明の暦である。つまり、ニンギシュジッダが 2012 年の冬至で一区切りする暦を作ったのである！ならば、このカレンダーの意味は、相当真剣に考えなければならない。天文学に秀でたニンギシュジッダのことだから、必ず太陽系レベルの大きな変動が、この時期に起こるはずである。そうすると、世界の終末に降臨してくる神とは、ニンギシュジッダのことか？

また、マヤ文明は 20 進法であるが、ニンギシュジッダがウツの王位継承数字である 20 を使ったのは何故なのか。ウツは太陽神だから、それを後に象徴として使うことを、ニンギシュジッダはこの時点で既に考えていたのか。

ニンギシュジッダはマルドゥクが追放されていた時期、地球人を娶ったアヌンナキの子孫の助けを借りてエジプトで国を監督し、“崇高な神”として崇拝されていた。そして、かつてマルドゥクが計画したことは撤回され、隠しておいたものを破壊し、マルドゥクの血統のホロンを追放していた。ならば、この時点でピラミッドの内部に“死と復活”を象徴する石棺が置かれ、ピラミッドが双子山から 3 つになった可能性がある。

そうすると、ニンギシュジッダこそがイエスであり、一部の伝承でカッパーラ的にケツアルコアトル＝イエスと見なされていることは辻褄が合うが、果して、真相はどうか？

(12) エジプト文明

・“2 つの峡谷の土地”には、マルドゥクの支配の下、第 2 の地域が樹立された。そこはマガン、“滝になって落ちる場所”と呼ばれていた。しかし、言語が混乱させられて以来、その地域の人々によってヘム・タ、“暗褐色の土地”と呼ばれた。そして、アヌンナキはネテル（ネフィリム）、“守護監視者”と呼ばれた。マルドゥクはラー、“明るい者”として、エンキはプタハ、“開発者”として崇拝され、ニンギシュジッダはテフティ（トート）、“神の測定者”として想起された。彼についての記憶を消すため、マルドゥクは“石のライオン”の姿を、自分の息子ナブの姿に変えた。

マルドゥクは 60 進法ではなく 10 進法とし、1 年も 10 に分け、月の暦から太陽の暦へと変えた。一方で、ニンギシュジッタの主権下にあった北の都と南の都を再構築し、北と南の土地を 1 つの王権の都に統合した。彼はネテルと地球人の子孫を王に任命し、メナと呼ばれた。2 つの土地が交わり、大河が分かれる場所に、キシュを凌ぐ“笏の都”としてメナ・ネフェル（メンフィス、“メナの美”）を設置した。

マルドゥクは自分より年長者たちを祀る聖なる都を築いた。ニビルの王に敬意を表したアンヌ（オン、ヘリオポリス）、その中のプラットホームの上にエンキのための神殿住居を建てた。その頂上は内側が高い塔になっており、尖ったロケットのようにそびえていた。その聖堂に、マルドゥクは自分の“空のはしけ船”の上部を置いた。それはベンベンと呼ばれ、“数え切れない年月の惑星”から彼が旅した時に乗ったものだった。新年の日、王は高僧として祝賀を執り行い、一番奥の“星の部屋”に入り、ベンベンの前に供え物を置くのである。

この第 2 の地域を後押しするため、エンキはあらゆる種類の“メ”をマルドゥクに与え、あらゆる種類の知識を授けた。唯一、“死者を蘇らせること”を除いて。エンキはハピ（ナイル）の水流をマルドゥクと彼の民のために制御し、肥沃な土壌はすぐに豊作となり、人と畜牛が増殖した。“12 の天体の中で偉大なもの”として、エンキはマルドゥクに牡羊座を割り当てた。

*何と、10 進法はマルドゥクが始めたのだ！（それなりの知恵はあるようだ。）

マルドゥクによって主エンキは“開発者”プタハに降格され、ニンギシュジッタはトートに変更されてしまった。プタハは、第一王朝の時代から信仰が確認されている古い神の 1 人で、メンフィスの守護神である。しかも、エジプトの神には珍しく、完全に人間形である。また、プタハは鍛冶の神であり、呪文を唱えつつ、世界を創成したりしている。プタハ神派の神官たちは、プタハ神は娘と交わってアトゥム神を生み出した、としている。

トートの姿はトキであり、エジプトでのトキは、ナイル川の氾濫時期になると上流から下流の浅瀬にやって来て、氾濫を知らせる渡り鳥である。つまり、トキは水鳥と見なすことができ、水鳥で象徴されるのはエンキである。そして、トートは知恵の神でもあるから、エンキの息子ニンギシュジッタの象徴であると同時に、エンキの象徴にもなり得る。それに、日本の国鳥はトキだから、両者が日本の象徴でもある！トートとエンキの関係について、初期エジプトのある古文書には次のようにあり、エンキとニンギシュジッタの関係を表している。

“エジプト王ゾサーの時代、南部が大飢饉に襲われた。その原因をトート神に尋ねると、ナイルの源泉には 1 人の神が居て、2 つの洞窟からナイル川の水量を調節していることが解った。その神とは、人間を創り、ナイルとエジプトの運命を握っているトート神の親であるクヌム、別名エンキである。”

現在のスフィンクスの顔はニンギシュジッタではなく、ナブの顔に変更されている。スフィンクスの別名はセシェプ・アヌク・アトゥムで、最高神アトゥム・ラーの生きた像、という意味であるが、神話と共に、事実が相当改竄され

ていることが良く解る。また、ハム系フリーメーソンなどの伝承では、ベンベン石が“失われた秘宝”して伝えられているが、真相はマルドゥクの宇宙船の先端部だったのである。それを、毎年新年の 1 日だけ、王に拝ませていたのである。偶像崇拜も甚だしい。マルドゥクこそ、偶像崇拜の根源である。

なお、ニンギシュジッタは 14：(1)のエジプト神話で、呪文でイシスの姿を隠したり、ホルスに向かって呪文を唱え、仮死状態のホルスが息を吹き返したりと、魔術・妖術の原型とされてしまった。これも、ニンギシュジッタを陥れようとするマルドゥクの策である。また神話では、コブラの女神ウアジェトが聖なる蛇とされているが、コブラは毒蛇であり、サタン的である。14：(7)でマルドゥクが“邪悪な蛇”と呼ばれているから、コブラの原型はマルドゥクである。

エジプトに関連する“蛇”は旧約に登場する。アロンとファラオがそれぞれ杖を投げると杖は蛇になり、アロンの蛇がファラオの蛇を飲み込んだ。これは、エジプトの魔術師による“邪悪な蛇＝マルドゥク”を象徴するファラオの杖は、“良い蛇＝蛇神エンキとニンギシュジッタ”を象徴するアロンの杖には敵わないということを、象徴的に表しているのである。

このように、エジプト神話はすべてマルドゥクにとって都合が良いように構成された。(後述するが、メソポタミアの神話もマルドゥクにとって都合の良いように改竄された。) よって、神話や伝承だけに頼っていても、真相に近づくことはできない。つまり、口頭伝承を基本とするカッバーラだけでは、真相に辿り着くことはできないのである！

マルドゥクはこれほどの野心を持っているのだが、何故、エンキがここまで彼を手助けしたのかというと、アヌにより、3つの地域に人類の文明を花開かせることが決定されたからである。

なお、あらゆる種類の知識をマルドゥクに与えてエジプト文明繁栄の手助けをしたエンキだが、唯一、“死者を蘇らせること”は教えなかった。ならば、マルドゥクが“死と復活”を象徴する石棺及び 3 つ並ぶピラミッドとその意味について知る由も無いから、石棺ともう 1 つのピラミッドはマルドゥクが造ったものではなく、前述のように、ニンギシュジッタが造ったと考えるのが妥当である。また、ニンギシュジッタの統治時代、エジプトは北と南、すなわち、上エジプトと下エジプトに分かれていた。上エジプトは蓮、下エジプトはパピルスとピラミッドで象徴され、カルナックにあるアモン神殿には、パピルス柱とロータス柱が建っている。蓮は花で女性原理、ピラミッドはそそり立つ山で男性原理を象徴する。つまり、カッバーラの奥義の 1 つである“陰陽”の概念がニンギシュジッタによって導入されたのである。これは、イエスの真相を知るにあたり、かなり大きなポイントである。

(13) 第 3 の地域

・第 2 の地域の成功に指導者たちは勇気付けられ、第 3 の地域に取り掛かった。約束されていた通り、そこはイナンナの領地とされた。彼女は女主人に相応しいように、天空の星座を割り当てられた。それまではウツと共に双子座だったが、ニンフルサグが贈り物として彼女の乙女の星座を割り当てた。地球の年に

して、816年のことだった。

遙か遠い東方の地、7つの山脈の向こうが第3の地域だった。“60個の宝石の土地”ザムシュと呼ばれた。アラタ、“森の多い領域”は、蛇行する大河の谷に位置していた。広い平野で農業が行われ、2つの都市が築かれた。エンリルの布告により、エンキはその地域のために以前とは違う系統の言語を、知恵を駆使して考案し、新しい種類の書く記号を創った。それは、前例の無い言語だった。しかし、エンキは文明化された王国の“メ”をその地域に与えなかった。以前、イナンナがウヌグ・キのために“メ”を奪ったが、それと共用させるためである。

*7つの山脈とは、イラン高原にある山々のこと。蛇行する大河はインダス川である。2つの都市は、モヘンジョダロとハラッパである。新しい言語は、サンスクリット語である。

・アラタで、イナンナはドゥムジに似ていた羊飼いの責任者を任命した。彼女は“空の船”でウヌグ・キからアラタへ旅した。彼女はザムシュの宝石を大切に、純粋なラピスラズリをウヌグ・キに持ち帰った。当時、ウヌグ・キの王はエンメルカルで、彼は2番目にそこを統治していた。彼はウヌグ・キの領土を広げたので、その栄光にイナンナは鼻高々だった。彼はアラタの富を望み、使者を送り込んだ。しかし、使者の言葉をアラタの王は理解できなかった。そこで、アラタの王は木製の笏にメッセージを刻んで、使者に与えた。そのメッセージは、ウヌグ・キの“メ”をアラタと分かち合うことを要求していた。そして、ウヌグ・キへの贈り物として、穀物がロバに荷積みされた。

エンメルカルはメッセージを受け取ったが、誰も理解できなかった。エンメルカルは業を煮やし、どうしたら良いのか、祖父のウツに尋ねた。ウツは筆記の女神ニサバとの間を取り持った。彼女は、粘土板に自分のメッセージを刻むよう、エンメルカルに教えた。それは、アラタの言語だった。彼の息子バンダの手で、そのメッセージは届けられた。“服従するか、さもなくば戦争だ！”とそこには書かれていた。「アラタはイナンナ様に守られている。アラタはウヌグ・キに服従などせぬ！もし、ウヌグ・キが戦いを望むのなら、戦士1対1で戦おう！あるいは、円満に解決するか。アラタの財宝と引き換えに、ウヌグ・キに“メ”を提出させよう」とアラタの王は言った。

平和のメッセージを運んで帰る途中、フルム山でバンダは病気で死んだ。アラタの財宝をウヌグ・キは受け取らず、アラタはウヌグ・キの“メ”を手に入れなかった。第3の地域で、文明化した人類は満開に花開かなかった。イナンナが自分の領土をなおざりにして、他の領地ばかりをむやみに欲しがったからである。

*ウヌグ・キもアラタもイナンナの領地だから、イナンナが間を取り持てば良い話であるが、彼女は他の領地ばかりをむやみに欲しがり、そうしなかった。元はと言えば、イナンナが当然することとして、エンキはアラタに“メ”を与えなかったこと、イナンナがその期待に背いたことが原因である。

インダス文明は満開に花開かなかった。だから、知識が隠されたカッパラー

の解釈を、ヨーガによる体の修行やカーマ・スートラによる愛欲充足により、追求するようになったのである。そして、カーマ・スートラによる愛欲は、後のチベット密教に於ける暗黒の密教、無情瑜伽タントラを生み出すことになった。

イナンナは若い女神であり、イシュタル、ヴィーナス、アフロディーテなどの別名を持つ。イナンナには遠い地アラタ（インダス地方）が与えられた。しかし彼女は、エンメルカルの大伯母だから割り当てられていた遠いアラタよりもウルクに住むべきだ、とアヌに主張し、計画は見事成功した。イナンナは若い女神で別名が愛の女神ヴィーナスだから、その美貌でアヌの愛人となったのである。イナンナの更なる別名が“アンニツム”で、“アヌの最愛の人”という意味である。それ故、王位継承順位数はウツの 20 に継ぐ 15 であり、叔父であるイシュクルの 10 よりも上である。

また、その美貌を利用してエンキに取り入って騙し、エンキから“メ”＝“知恵の秘密”を聞き出すことに成功した。

このような理由から、イナンナは誘惑する“裸の女神”として描かれていることが多い。しかし、後にマルドゥクが“正統だ”と主張して王位を奪い取り、バビロニアの主神となると、イナンナはウルクを追われた。これ以後、イナンナは武装した戦う女神となった。

16：第 13 のタブレットー古代核戦争ー繰り返された覇権争い

(1) イナンナの不死宣言

・ウヌグ・キとアラタを行き来しながら、イナンナは落ち着かず、満たされなかった。飛び回りながらも、太陽の光にドゥムジが揺らめき招いている姿を見た。夜には夢に彼が現れ、僕は戻って来るよ、と囁いた。そして、“2 つの峡谷の土地”にある彼の領地の栄光を、彼は約束してくれた。こんな幻影に、彼女は翻弄されていた。

ウヌグ・キの神聖な区域に、彼女はギグヌ、“夜の愉しみの家”を設置した。若い英雄たちを、彼らの結婚式の夜に、イナンナは甘い言葉で誘い出した。花嫁とではなく、彼女と寝ることにより、長生きと至福の未来を約束したのである。イナンナはドゥムジに思いを馳せながら、彼らと夜を共にした。そして、朝になると、彼らは彼女のベッドで死んでいた！

しかし、中には生きていた者がいた。英雄バンダ、ウツの曾孫である。彼女の住まいでバンダは入浴させられ、房飾りの付いたマントに飾り帯を締めさせられた。「ドゥムジ、私の最愛の人！」彼女は彼をそう呼んだ。彼女は花々で飾られたベッドへ彼を誘った。朝になってもバンダは生きており、イナンナは喜んで叫んだ。「奇蹟よ！奇蹟だわ！私の最愛のドゥムジが帰ってきたの！」ウツの恩寵により、彼は死から蘇ったのである。「死なない力を私は手にした！不死は、私によって授けられたのだわ！」そして、自分のことを女神イナンナ、“不死の力”と呼ぶことにした。

イナンナの両親は、このような彼女の宣言を喜ばなかった。エンリルとニヌルタは彼女の言葉に狼狽し、ウツは困惑した。そして、エンキとニンフルサグ

は「死者を蘇らせることなど、不可能だ！」と言った。

*イナンナの頭の中は、いつもドゥムジのことで一杯だった。だからこそ、ドゥムジの死の原因となったマルドゥクに対する敵意は凄まじい。

満たされない願望と性欲を、彼女は地球人の英雄たちにドゥムジを重ねて交わることで解消しようとした。純粋なニビル人と地球人とでは時間の流れが異なるから、地球人にとっての一晩でも、イナンナにとってはごく僅かな時間にしかない。だから、朝まで続く行為により、イナンナの相手は大方、朝には死んでいたのである。これが、後のあらゆる宗教に於ける性的退廃の原型となるものである。つまり、イナンナはサタンの原型の一部である！

ある時、ウツの曾孫バンダと一夜を共にしたが、死ななかった。ここでは、ウツの恩寵により死から蘇った、とあるが、イナンナの不死宣言を受けてウツは困惑し、生命現象に詳しいエンキとニンフルサグも、死者を蘇らせることは不可能だ、と断言している。だから、元々死なずにすんだのか、死にそうだったところをウツに助けられたのか、のどちらかであろう。

そうすると、以前に出てきた火星でのアンズの“死と復活”、エレシュキガルによって死んだが“復活”したイナンナ、エンキがマルドゥクに与えなかった“死者を蘇らせること”という話に於ける“死”とは、仮死状態あるいは瀕死の状態にあることと言える。だから、“死者を蘇らせること”とは、仮死状態にある者、あるいは瀕死の状態の者を助ける医療技術のことである。

なお、イナンナの名は、イルニンニ→アンニツム→イン・アンナ→イナンナとなっている。

(2) ギルガメッシュ叙事詩

・キ・エンギの土地で、人々は自分たちの幸運を讃えた。「神々は我々と共にいる。神々は死を止められる！」と人々は互いに言った。バンダは父エンメルカルの跡を継いで、ウヌグ・キの王座に就いた。彼の称号はルガル、“偉大な人”だった。彼はエンリルの種子である女神ニンスンに妻とし、息子が生まれた。英雄ギルガメッシュである。ギルガメッシュはバンダの跡を継いで、王座に就いた。

ギルガメッシュは年を取ってくると、生と死に関して母に尋ねた。アヌンナキの子孫なのに死んでしまった祖先について、彼はいぶかしがった。「神々は死ぬのですか。私も 2/3 が神ですが、死すべき運命の人間として壁を乗り越えるのでしょうか」と彼は尋ねた。「地球上に留まっている限り、地球人としての死が、あなたを打ちのめすでしょう。でも、ニビルへ行けば、そこの長い寿命（不死）を獲得するでしょう」と母は答えた。

ニンスンは、ギルガメッシュをニビルへ連れて行ってくれるよう、ウツに頼んだ。ウツは拒否したが、来る日も来る日も懇願されたため、“着陸場所”へ連れて行くことを許可した。彼を導き保護するため、ニンフルサグは彼の影武者を造った。エンキドゥ、“エンキによって造られたように”と影武者は呼ばれた。彼は子宮から生まれたのではなく、血液も流れていなかった。

エンキドゥと共に、ギルガメッシュは“着陸場所”へと旅し、ウツが神託で

彼の進み具合を監視した。ヒマラヤ杉の森の入り口で、彼らは火を吹く怪物に阻まれた。彼らはペテンで怪物を混乱させ、粉々に壊した。彼らがアヌンナキのトンネルへの秘密の入り口を発見すると、エンリルの創造物、鼻息が致命的な“天の牡牛”に挑まれた。その怪物は彼らをウヌグ・キの門まで追い立てたが、都の城壁のところでエンキドゥに打ち倒された。エンリルはこれを聞くと、苦悶のあまり涙を流して泣き、その嘆きは天のアヌにまで聞こえるほどだった。しかし、“天の牡牛”を惨殺したため、エンキドゥは罰せられ、溺れて死んだ。そのことはニンスンとウツに知らされていたので、ギルガメッシュは惨殺を免れた。それでもニビルの長寿を求めて、“二輪戦車の場所”へ向かうことをウツから許可された。

*ギルガメッシュはウツの曾孫の子（玄孫）である。ウツーメシュキアガシェルーエンメルカルーバンダーギルガメッシュ。ギルガメッシュはエンリルの種子である女神ニンスンが母であるため半分は神であり、更にプラス 1/16 だけ神の要素がある。2/3 は多すぎである。

エンキドゥはニンフルサグによって造られた人造人間である。火を吹く怪物や“天の牡牛”はロボットだろう。それにしても、ウツはエンリルから許可を取らなくても良いのだろうか。

・数々の冒険の後、彼は第 4 の地域“ティルムンの土地”に辿り着いた。地下トンネルを進むと宝石の庭に出て、そこでジウスドラと会った。ジウスドラは大洪水について話し、長寿の秘密も教えた。庭の井戸に、ある植物が生えていて、それがジウスドラと配偶者の寿命を長くしていたのである。それは、地球の植物とは異なっていた。それにより、人間は溢れんばかりの元気を取り戻せるのである。「年取った人が再び若返る」、これこそがその植物の名だ」とジウスドラは言った。

ジウスドラが寝てしまうと、ギルガメッシュは自分の足に石を結び付けて井戸に飛び込み、その植物を引き抜いた。そして、植物を入れた鞆を持って、急いでウヌグ・キへと引き返した。途中、彼が疲れて寝ていると、その植物の芳香に蛇が惹きつけられた。その蛇が植物を奪い、どこかへ消えてしまった。朝になってそのことにギルガメッシュが気付くと、彼は座って泣いた。そして、手ぶらでウヌグ・キに戻り、死すべき運命の人間として、そこで死んだ。

*長寿の植物はニビルのものである。あるいは、ジウスドラが長寿だったのは植物のおかげではなく、彼がエンキの息子で、寿命サイクルが通常の地球人よりも長かったためなのかもしれない。ギルガメッシュは母がエンリルの種子で、地球で誕生しているから、ジウスドラほどの寿命は得られない。鞆に入れた植物を蛇が盗んだなどというのは、寓話のように思われる。ギルガメッシュはニビルに行こうとして“ティルムンの土地”まで辿り着いたものの、天空の旅をすることは許されなかった、という話である。蛇神が許さなかったのかもしれない。なお、この話が“不老長寿の秘薬”の話の原型になっている。

(3) エジプトへの死生観植え付けとマルドゥクの野望

・ギルガメッシュ統治後、更に7人の王がウヌグ・キを統治し、地球年でちょうど1000年が経過した時、第1の地域の王権はウリムに移された。このような事柄すべてに、マルドゥクは大いに留意した。そして、ドゥムジの領地奪還を仄めかすイナンナの夢や幻影に彼は動揺し、その企てに対抗することにした。

彼は、“死と復活”の問題に、熟考すべき点が多いことに気がついた。そして、“神の神性”という概念は彼の興味を大いに惹き、何と、自分自身が偉大なる「神」になると宣言した！

血統的にほとんど地球人であるギルガメッシュに対して許可されたことに、マルドゥクは腹を立てた。だが、王や民の忠誠を維持するためには、「神」の国へ行って長い寿命が授けられる、「神」の領域に近づくことができるという考えは、賢い方法であると見なした。半神半人が不死への出入り口を教えてもらえるのなら、自分の領地の王たちにも、これを適用しようとマルドゥクは決めた。自分の地域の王をネテルの子孫ということにして、“来世”でニビルに旅させよう、と決めた。

彼は“ティルムンの土地”がある、東を向いた墓を建てる方法を王たちに教えた。そして、神官（筆記者）に長い本を与え、それには“来世の旅”について詳しく記されていた。“ドゥアト（ティルムンの土地のエジプト名）”への辿り着き方、そこから“天国への階段”で不滅の惑星への旅の仕方、“生命の植物”を食べること、“若さの水”を飽きるまで飲むことについて記されていた。神官たちは、地球への「神々」の到来について、マルドゥクから教えられた。「金は生命の輝きだ！神々の肉体なのだ！」とマルドゥクは教えた。そして、金を手に入れるために、アブズと“下の領域”に行くことを王たちに指示した。王たちが武力によって自分たちのものではない土地を征服した時、マルドゥクは自分の兄弟たちの領域を侵犯し、彼らの怒りを引き起こした。「マルドゥクは何を企んでいるのか。我々を踏みにじる気か？」と兄弟たちはお互い尋ねた。彼らはこの行為をエンキに訴えたが、マルドゥクはエンキの言うことすら聞かなかった。彼は隣接するすべての国を占領するよう、マガンとメルーハの王に指示した。第4の地域を占領して支配者となることが、マルドゥクの真の目的だった。「地球を支配するのは私です！」彼は父に断固として譲らずに宣言した。

*ギルガメッシュがしたこととイナンナの行為を参考にして、マルドゥクはエジプト人に“来世で神の国に行き、そこで復活できる”という死生観を植え付けた。復活するためには肉体が必要だから、ミイラという保存方法が開発された。つまり、マルドゥクの言う“死と復活”の問題とは、このようなことであり、イエスに関連するような“死と復活”ではない。

また、“来世への旅”を記した長い本とは、いわゆる“死者の書”である。そこまででっち上げてでも、マルドゥクは野望を果たしたかった。その野望とは、“ティルムンの土地”シナイ半島にある宇宙空港を支配し、地球に君臨する神となることである。これには、兄弟たちも非常に警戒した。このように、マルドゥクのいいようにでっち上げられたエジプト文明って、一体…。

(4) アッカド

・王権がウヌグ・キからナンナルの都市ウリムに移されると、ナンナルと配偶者ニンガルは民に微笑みかけ、彼らは崇拜された。月に縁のある彼は、1年の中に月を定め、それぞれの月に祝祭を制定し、12人の偉大なアヌンナキに捧げられた。そして、第1の地域には、至る所に聖堂や聖所が建てられ、人々は「神々」に直接祈ることができた。国中に豊かさ繁栄がもたらされると同時に、言い争いや侵害行為もあった。彼と配偶者のニンガルは、非常な情け深さで人々を指揮したので、ナンナルは愛情を込めて“父ナンナ”と呼ばれていた。

イナンナはその間ずっと、“空の船”で国から国へと飛び回っていた。“上の方の海”ではウツと戯れ、イシュクルの領地では彼をドウドゥ、“最愛の人”と呼んだ。彼女は2つの川の、上流の平野に住む人々が気に入った。彼らの言葉を心地良く感じ、その言葉の話し方を学んだ。彼らは彼女のことを、金星を指す“イシュタル”という名で呼んだ。彼らはウヌグ・キをウルク、ウリムをウル、ニブル・キをニップール、イシュクルをアダド、ナンナルをシン、ウツをシャマシュと呼んだ。そして、キ・エンギの土地はシュメールと呼んだ。

*2つの川とはチグリス川とユーフラテス川であり、その上流の平野とはアッカドのことである。アッカド語でキ・エンギをシュメールと言った。相変わらず、イナンナは放浪している。

(5) マルドゥクの独断的宣言

・第1の地域シュメールでは、都市間の持ち回りで王権を担当したが、第2の地域エジプトでは、そのような多様性は認められず、1つの都市だけで統治することをラーは望んだ。神の一番上の子、地球に於ける第一子、彼は神官たちにそう知らせたかった。最古の時代から第一位、彼は賛美歌でそのように歌わせた。永遠の王、永遠を作りし彼、すべての神々を率い並ぶ者の無い者、偉大なる唯一無比の者！

こうして、マルドゥクはラーとして、あらゆる「神々」の上に自分を君臨させた。彼らの力と属性を、勝手に我が物のように語った。「私はエンリルとして支配権を持ち、法令を司り、ニヌルタとして鍬と戦闘を司る。イシュクルとして稲妻と雷を司り、ナンナルとして夜を照らし、ウツとして昼を照らし、ネルガルとして冥界を統治する。ギビルとして黄金の奥深さを知っており、どこから銅と銀が産出するのか、私が発見した。ニンギシュジッタとして数とその数え方を私は命じ、天は私の栄光を示している！」

このような宣言に、アヌンナキの指導者たちは動揺した。マルドゥクの兄弟たちはエンキに伝え、ネルガルはニヌルタたちに自分たちの懸念を伝えた。「お前は一体、何に取り憑かれているのだ？お前の主張は、無法にも程がある！」とエンキがマルドゥクに言った。「天が、天が私の覇権を示しているのです！エンリルの星座、“天の牡牛”は彼の子孫によって惨殺された。天では私の時代、“牡羊の時代”がやって来るのです。その前兆に、疑いの余地はありません！」とマルドゥクは答えた。

エリドゥの住まいでエンキは星座を調べ、1年の始まりである立春の日に、日

の出の方角を注意深く観察した。その日、太陽は牡牛座の間に昇って来た。ニブル・キとウリムでエンリルとナンナルが観測し、“下の世界”ではネルガルがその結果を裏付けた。まだエンリルの牡牛の時代で、牡羊の時代はまだ先だった。しかし、マルドゥクは主張を曲げなかった。彼は自分の領地に使者は送らず、息子ナブの力を借りて、人々にラーの時代がやって来ると発表した。

これに対抗するため、指導者たちは人々に空の観測の仕方を教えるよう、ニンギシュジッダに頼んだ。彼は知恵を働かせ、石の建造物を考え出し、ニヌルタとイシュクルが建造を手伝った。それはあちこちに設置され、彼らは人々に空の観測方法を教えた。そうして、太陽がまだ牡牛座の位置にあることを示した。エンキはこれらの成り行きを悲しい気分で見守り、如何にして“宿命”が正当な秩序を捻じ曲げるかに思いを巡らせた。「アヌンナキは自らを神と宣言した後、むしろ、人類からの支援に依存しているのだ！」

*世界各地に存在するストーンヘンジはニンギシュジッダが考案し、ニヌルタとイシュクルが建造を手伝ったのである。マルドゥクに対抗するために！

マルドゥクは勝手に自らが最高神であることを宣言した。これを上辺だけ見ると、あらゆる神の上に君臨する唯一絶対神となる！では、マルドゥクこそがヤハウエであり、イエスであり、アッラーなのか？聖書によって人類を精神的に扇動しているのが、マルドゥクだということなのか？父エンキでさえ、この宣言に怒っている。聖書では、蛇はイブを唆した邪悪なもの。イブに生殖能力を与えたのは“良い蛇”であるエンキであるが、マルドゥクはエンリルたちから“邪悪な蛇”と呼ばれていた。中東からヨーロッパの神話で、牡牛が戦っている蛇は“邪悪な蛇”である。これは、イエスの真相を解くための重要な鍵である。

(6)サルゴン 1 世の任命

・第 1 の地域で、1 人の指導者の下に国々を統一しようとアヌンナキは決め、武闘派の王を望んだ。マルドゥクと敵対するイナンナに、適切な人間を見つける仕事を託した。彼女は、旅行中に出会い愛した 1 人の強い男をエンリルに推薦した。4 つの駐屯地の司令官を父に持ち、高僧を母に持つアルバカドである。エンリルは彼に王冠と笏を与え、シャルル・キン（サルゴン）、“高潔な摂政”として指名した。そして、新しい王権都市が樹立され、アガデ、“統一された都市”と名付けられた。そこは、キシュからそう遠くは無かった。彼はエンリルによって権限を与えられ、イナンナは自分の優れた武器を携えて、彼の戦士たちに同行した。“下の方の海”から“上の方の海”まで、全土が彼に服従した。彼の軍隊は第 4 の地域を守るため、その境界に駐留した。

*アルバカドとは聖書のアルパクシャドであり、セムの息子の 1 人である。シャルル・キンはアッカドの最初の王、サルゴン 1 世である。アガデとは、戦後のニビルの最初の首都の名前であり、その統一された都市に因んで名付けられた。

マルドゥクは地球人の軍隊を組織して野望を果たそうとしたが、ここでわざわざ“マルドゥクと敵対するイナンナ”と書かれていることから、武闘派の王はマルドゥク軍と戦うために選ばれたということが解る。

サルゴン王年代記には、次のようにある。

“アガテの王サルゴン イナンナの時代に権力を得る サルゴンに敵無く、並び立つ者無く その威光はすべての地に及ぶ 東の海を制覇し、西の地を征服する”

(7)バビロン神殿の建設とイナンナの激高

・マルドゥクはイナンナとシャルル・キンの動向に抜かりなく目を光らせ、鷹のように獲物に襲い掛かった。マルドゥクが天に届く塔を建てようとした場所から、シャルル・キンは聖なる土をアガデに移し、そこに“天国のように明るい物体”を埋め込んだ。この行為に激怒したマルドゥクは、第1の地域へ急行し、ナブと手下を連れて塔のあった場所にやって来た。「聖なる土は私だけのものだ！神々の門は私が築くのだ！」とマルドゥクは猛然と宣言し、川を迂回させるよう、手下に命じた。彼らは塔の場所に堤防と壁を築き、エサギル、“最高神のための家”をマルドゥクのために建てた。ナブは父を讃えて、そこをバビリ、“神々の門”と名付けた。こうして、エディンの中心にマルドゥクは強引に納まった。

*マルドゥクは、事ある毎に激怒している。エサギル＝バビロンのマルドゥク神殿は、このようにして強引に建造されたのである。

・イナンナの怒りはとどまるところを知らなかった。彼女は自分の武器でマルドゥクの手下を手当たり次第に殺した。人々の血がかつて無いほど、川のように流れた。ネルガルはマルドゥクの下へ行き、人々のためにバビリを離れるよう、説得した。「本物の天の印が現れるまで、平和的に待とうではありませんか」マルドゥクは立ち去ることを決意し、国から国へと、空から眺めて移動した。その後、ラーは第2の地域でアムン、“見えざる者”と呼ばれた。

*激怒していたマルドゥクが立ち去るほど、彼の手下はイナンナによって大虐殺されたわけである。アムン（アモン）とは、神話上で追放されたラーのエジプト名である。

(8)イナンナの冒流行為

・しばらくの間、イナンナは平穏だった。シャルル・キンの2人の息子は平和を望む後継者だった。そして、彼の孫ナラム・シンが王座に就いた頃、エンリルとニヌルタは第1の地域を留守にして、海の向こうの土地へ行った。ラーは第2の地域を離れ、マルドゥクとして他の土地を旅していた。イナンナは全権力を手に入れることを思い描き、ナラム・シンに全土を奪い取るよう命じた。マルドゥクの領地マガンとメルーハに侵攻するよう、指示した。

ナラム・シンは第4の地域を地球人の軍隊が通過するという冒流行為を働き、マガンに侵攻して、封印されたエクルに侵入しようと試みた。このような神聖を汚す冒流行為と違反行為にエンリルは激怒し、ナラム・シンとアガデに呪いを

掛けた。ナラム・シンはサソリに咬まれて死に、エンリルの命でアガデは全滅させられた。地球年にして、1500年のことだった。

*エンリルとニヌルタがいない間に、イナンナは全土を我が物にしたかったのである。第1の地域シュメールとアッカドから陸路でエジプトに侵攻するには、どうしても第4の地域、シナイ半島を通過せざるを得ない。

なお、サルゴン王年代記では、サルゴン王がマルドゥクの支配する聖地を冒涇し、民心はサルゴンから離れ、サルゴンは苦悩の中で生涯を終えたことになっている。これなども、(6)の話とこの話が混同されており、マルドゥクによる真実の改竄が良く解る。

“サルゴンが犯した神聖冒涇行為に 偉大なる神マルドゥクは激怒し サルゴンの民を餓死で滅ぼした マルドゥクはサルゴンに罰を与え 民心はサルゴンから離れた”

(9)エンリルに与えられたガルズの預言

・マルドゥクがアムンになった後、第2の地域の王権は崩壊し、無秩序と混乱が蔓延していた。アガデが全滅させられた後、第1の地域でも同様だった。王権は「神々」の都市と人間の都市を転々とした。そこで、エンリルはアヌに相談し、王権をナンナルの手に預けた。彼の土地ウルクに、3度目の王権が授けられた。ナンナルは人間たちの“正しい羊飼ひ”を任命し、ウル・ナンムと呼ばれた。彼は国に安定と反映をもたらした。

エンリルが夢物語を見たのは、そんな時のことだった。天空のように明るく輝く1人の男が現れた。エンリルのベッドの側に立つと、白い髪をしたガルズだった。彼は左手にラピスラズリの石板を持ち、その上には天空が描かれていた。天空は12の星座によって分けられ、ガルズはそれらを右手で指し示した。彼は牡牛から牡羊へと指を移動させた。それを3回繰り返した。それからこう言った。「慈愛と平和の正しい時代に、悪行と流血が続くだろう。天空の3つの部分で、マルドゥクの牡羊がエンリルの牡牛に取って代わる。“最高神”を名乗った者が、地球の覇権を奪うだろう。“宿命”によって定められ、かつて無い大惨事が起きる！大洪水の時のように、正しく立派な人間を選ばなければならない。彼と彼の種子によって、“万物の創造主”が意図されたように、文明化した人類が維持されるのだ！」

エンリルが目覚めると、ベッドの脇にその石板が置かれていた。彼は、誰にもそのことを話さなかった。ただし、天体の大家たちに尋ねることにした。神託の神官ティルフ、この高僧はエンリルに示した。「ウリムにあるナンナルの神殿へ行き、天体の時間を観測されよ。地球の72年が1つの“空の分け前”の長さです。3つの推移を注意深く記録するのです」と言い、預言された時をエンリルに教えた。彼はアルバカドの孫イブルの子孫で、ニブル・キで6代続く神官であり、娘たちはウリムの王たちと異種結婚していた。

*またもやガルズの登場である。エンキが箱舟の設計図を彼からもらった場面

と酷似している。「神」エンリルでさえ、人類の神官に頼るようになってしまった。このタブレットは未来を知るために過去を語るエンキの言葉だから、エンキの創作である可能性がある。いずれ牡羊の時代になることを知っていて。

ティルフとは、ニブル・キ、ウル、ハラで神託を告げた神官で、聖書に於けるテラ、アブラハムの父である。イブルは聖書のエベルである。

“空の分け前”とは、歳差運度の角度1度に相当する年数で72年。なお、72という数字は、ルカ書(10章1節)に於いてイエスが72人を任命し、すべての町や村に2人ずつ遣わされたこと、八咫鳥が全部で72人いる(らしい)ことの原型である。

(10) アブラハムの登場

・エンリルが夢物語とその前触れについて考えている間、マルドゥクは国から国へと歩き回っていた。彼は自分の最高権力について人々に話していた。自分の信奉者を獲得することが目的だった。“上の方の海”の土地とキ・エンギの土地の境界で、彼の息子ナブは人々を扇動し、第4の地域を奪おうとしていた。そして、目論見通り、西の住民と東の住民との間で衝突が起こった。王たちは軍を組織し、キャラバンは行き来を止め、都市の周りに壁が建てられた。

ガルズが預言したことがまさに起きている、とエンリルは思った。そこで、立派な家系の子孫、ティルフとその子供たちにエンリルは目を付けた。「彼こそ、ガルズが選ぶように言っていた人間だ！」とエンリルは自分自身に言った。

*マルドゥクはあちこちで自分の正統性を主張していた。(5)では、彼はあらゆる「神々」の上に自分を君臨させ、彼らの力と属性を、勝手に我が物のように語った。おそらく、ここでも同じように吹聴していたのであろう。これこそがバアルの原型であり、偶像崇拜の原型である。バアルとは、元々カナン地域を中心に各所で崇められた嵐と慈雨の神で、セム語で“主”を意味し、原型はエンリルである。エンリルの住まいは最初、ヒマラヤ杉の森の横、“着陸場所”の近くにあり、そこは後にバアルベクと呼ばれる場所で、イシュクルに与えられた。それを、マルドゥクが乗っ取ったのである。つまり、神話を改竄した。あらゆる神話は、後にマルドゥクによって改竄された。それが神話の人物関係が伝承ごとに異なっていたり、矛盾したりする原因である。他に、言語がバラバラにされたことも、混乱の要因となっている。

また、マルドゥクの息子ナブは人々を扇動したが、これもマルドゥクこそがあらゆる「神々」の上に君臨する「神」である、と吹聴していたのである。

ナブは、神＝マルドゥクの言葉を伝える役割である。選ばれた人間へ“神々の秘密”を伝授することが司祭職、すなわち「神々」と人間の仲介者の血統となった。そして、御神託は前兆を探して天を観測することと混ぜ合わされた。後に、次第に対立する「神々」の両陣営に人類が引き込まれていくにつれて、預言が重要な役割を果たし始めた。来るべきことを宣言する「神々」の代弁者をナービー(ナビゲータ)と言うが、これはマルドゥクに代わって、天空の印がマルドゥクの主権到来を示していることを人類に確信させようとした、ナブのあだ名である。それがまさに、この場面である。

・エンリルは夢物語のことは内緒にして、ナンナルに命じた。「アルバカドがやって来た川に挟まれた土地に、ウリムのような都市を築き、ウリムから離れてそこに住みなさい。そして、その真ん中に神殿を建て、神官で王子のティルフにそこを任せるのだ！」ナンナルはエンリルの命じた通り、アルバカドの地にハランという都市を築いた。ティルフはそこの神殿の高僧となるよう送られ、彼の家族も同伴した。預言された 2 つの“天体の部分”が完了した時、ティルフはハランへ行った。

*ハランとは、聖書に於いて、ヤコブがカナンから帰る途中、天へ伸びる梯子が置かれ、神の御使いたちの昇り降りする天まで達する梯子を見た場所である。そこは山の多い土地と幾つかの川で守られたフルリ人の都市であった。神殿と建物は、ほとんど正確にウルに似せて造られている。

・ウリムの王座は息子のシュルギが引き継いだ。彼はこの上なく卑劣で好戦的だった。ニブル・キで自らを高僧として選別し、ウヌグ・キでイナンナの外陰部を愉しんだ。そして、ナンナルの目を盗んで、山間地から戦士たちを自分の軍に入れ、西部の国々を占領し、“宇宙管制センター”の尊厳を無視した。神聖な第 4 の地域に足を踏み入れ、何と、“第 4 の地域の王”を名乗った。

神聖を汚す行為にエンリルは激怒した。エンキはその侵略についてエンリルに苦々しく話した。「お前の統治者たちは、あらゆる国境を越えてきた！」「すべてのトラブルは、マルドゥクが原因だろ！」とエンリルは言い返した。しかし、エンリルは夢物語については言わないまま、ティルフに注意を向けた。特に、彼の一番上の息子イブル・ウムに。イブル・ウムは勇敢で、聖職者の秘密に精通した、王子に相応しい子孫だった。“二輪戦車の場所”の昇り降りができるように、神聖な場所を守りに行くよう、エンリルはイブル・ウムに命じた。

*イブル・ウムとはアブラハムのことである。(9)で、ティルフはアルバカドの孫イブルの子孫で、ニブル・キで 6 代続く神官であり、娘たちはウリムの王たちと異種結婚していた、と述べた。また、アルバカド＝シャルル・キン＝サルゴン 1 世とは聖書のアルパクシャドであり、セムの息子の 1 人であるとも述べた。つまり、イブル・ウム＝アブラハムはセムの直系、ニブル・キとウリム（ウル）出身の聖職者で王族の末裔なのである。彼自身は、ニブル・キ出身である。

★イブル・ウムまでの系図

セムーアルパクシャド（アルバカド）ーシェラーエベル（イブル、以降神官）ーペレグーレウーセルグーナホルーテラ（ティフル）ーアブラム（アブラハム、イブル・ウム）、ナホル、ハラン。

ハランという名は、ナンナルが新しく築いた都市ハランのことを象徴しているのか、その都市に因んで名付けたのかは不明である。

なお、“ヘブライ”という言葉はヘレニズム時代のギリシャ語の音訳に遡る歴史的名称で、“イブル人の”を意味する。つまり、大元はこのアルバカドの孫イ

ブルとイブル・ウムに由来する。

このように、アブラハムは聖職者の秘密に精通したセム直系の子孫、王子に相応しい子孫だった。アブラハムに命じた主はエンリルであり、彼の任務は神聖な場所、第4の地域、“二輪戦車の場所”を守ることだったのである。

(11) マルドゥクの支配権宣言と恐ろしい決定

・イブル・ウムがハランを出発するやいなや、マルドゥクがそこにやって来た。彼も神聖を汚す行為を目にしていたが、それは“新しい秩序”の生みの苦しみだと見なしていた。彼はシュメールの入り口であるハランから最後の突撃を計画し、イシュクルの領地の端に位置するハランから、軍勢の召集を命じた。ハランに逗留して24地球年が経過すると、降りて来た他の「神々」に手当たり次第、マルドゥクは涙ながらに懇願した。彼は自分の非を認めたものの、支配権を強く主張し、こう言った。「おお、ハランの神々よ、裁きを下す偉大なる神々よ！私の秘密を聞いて欲しい。私はベルトを結びながら思い出すのです。私は神マルドゥク、偉大な神、わが領地ではラーとして知られている。私は罪を犯して追放され、山岳地帯へ行き、多くの国をさ迷った。太陽が昇るところから、太陽が沈むところまで行った。そして、イシュクルの領地へ私はやって来た。24年間、私はハランの真ん中に巢籠もりし、その神殿で神託を求めた。いつまで待つのか、私は自分の支配権について、神官に尋ねた。あなたの追放の日々は終わった、とそう言った。ですから、宿命を定める偉大な神々よ、自分の都に向かって進路を取らせてください。我が神殿エサギルを終の住み処とし、バビロンの王を任命させてください！私の神殿にすべてのアヌナキの神々を集め、私と協定を結んでください！」マルドゥクはこのように、他の「神々」に彼の時代の到来を宣言した。

*マルドゥクはイシュクルの領地にあるハランから、第1の地域略奪を企てたのである。イシュクルは軍神であり、(5)でマルドゥクは“イシュクルとして稲妻と雷を司り”とあるから、後に主神として君臨したバビロニアではマルドゥクも軍神として喩えられる。

・自分たちに服従を迫るマルドゥクに、アヌナキの「神々」は動揺した。エンリルはニブル・キの指導者全員を会議に招集した。エンキとマルドゥクの兄弟たちもやって来た。この出来事には全員が不安を感じ、彼らは皆、マルドゥクとナブに反対した。議会では責める声が蔓延り、部屋中で非難合戦が繰り返された。しかし、「いずれ来ることは誰も阻止できない。マルドゥクの最高権力を承認しよう」とエンキだけが助言した。「牡羊の時代が来るといふのなら、マルドゥクから“天と地球を結ぶもの”を剥奪してしまおう！」とエンリルは怒って提案した。すると、エンキ以外の全員が、“二輪戦車の場所”を壊滅させることに賛成した。そして、エンキの息子ネルガルが“恐怖の武器”を使用することを提案した…。エンキだけが反対し、この事がアヌに伝えられた。アヌは、彼らの意見に同意した。「運命付けられていることを、自分たちの判断で無きものにしようとしても失敗するぞ！」とエンキは言って、立ち去った。邪悪なこ

とを実行するために、ニヌルタとネルガルが選ばれた。

*マルドゥクの兄弟たちですら、マルドゥクの行為に反対したのである。唯一、エンキだけがマルドゥクを擁護した。

(12) 禁断の“恐怖の武器”

・エンキは立ち去っても、心の中では笑っていた。武器の隠し場所は、自分しか知らないと思っていたからである。エンリルが地球へやって来る前、エンキはアブガルと共に“恐怖の武器”を隠したからである。しかし、後にアブガルがエンリルにその隠し場所を秘密裏に教えたことを、エンキは知らなかった。そして、長いこと放置されていたから、武器として機能しないかもしれない、などとも楽観視していた。

エンキから聞くまでもなく、エンリルは2人の英雄に“恐怖の武器”の隠し場所と、武器を深い眠りから起こす秘密の方法を教えた。

エンリルは警告した。「武器を使う前に、“二輪戦車の場所”からアヌンナキを立ち退かせておくこと。そして、都には危害を加えず、人々も殺してはならない」ネルガルは自分の“空の船”で舞い上がったが、ニヌルタはエンリルに引き止められた。彼は、ガルズの預言とイブル・ウムの選出について、ニヌルタだけに話した。「ネルガルは短気だ。くれぐれも都市には被害を及ぼさず、イブル・ウムには事前に警告を発するのだぞ！」とエンリルはニヌルタに命じた。

ニヌルタが武器の場所に着くと、既にネルガルが空洞から運び出していた。それらの“メ”を長い休眠から起こしながら、彼は7つそれぞれにタスク名を与えた。最初のものには“敵無しのもの”、2番目には“赤々と燃える火”、3番目には“恐怖で崩れ落ちるもの”、4番目には“山を溶かすもの”、5番目には“世界の端を探し求めるもの”、6番目には“上も下も誰も容赦しないもの”、7番目には極悪非道な毒が満たされており、“生き物を蒸発させるもの”と名付けた。

*7番目の極悪非道な毒は、放射性元素である。ネルガルはこのような武器を触って、放射能障害は問題無かったのか。

・ニヌルタがその場所へ到着した時、ネルガルは敵を滅ぼし、絶滅させる気満々だった。「俺は息子（ナブ）を殺す！俺は父（マルドゥク）を絶滅させる！奴らがむやみに欲しがった国を消し去り、罪深い街をボコボコにしてやる！」ネルガルは復讐に燃え叫び、激怒して声を荒げた。「勇敢なネルガルよ、君はそんな公正ではない破壊をして、自分が正しいと言えるのか」とニヌルタが尋ねた。「エンリルの指示ははっきりしている。選ばれたターゲットまで私が先導する。君は、私の後からついて来い！」「アヌンナキの決定は、俺だって知っている！」とネルガルは返した。

2人は7日7晩、エンリルからの合図を待った。案の定、マルドゥクは待ち時間が完了すると、バビリに戻ってきた。彼は武装し、信奉者たちの前で自分の最高権力を宣言した。それは、地球年で1736年のことだった。その日、その運命の日、エンリルは合図を送った。ニヌルタはマシュ山に向けて発ち、ネルガ

ルが後に続いた。

山と平原、第 4 の地域の中心部をニヌルタは見渡した。胸を締め付けられながら、彼はネルガルに信号を送った。「手を出すな！」それから、ニヌルタは最初の武器を空から放った。それはマシュ山の頂上を、閃光と共に削ぎ落とし、一瞬のうちに山の内部を溶かした。彼は“二輪戦車の場所”の上に 2 番目の武器を放ち、太陽 7 個分の光を放ちながら、平原の岩は血の吹き出る傷口となった。地球は震えて崩れ落ち、天空は輝いた後に暗くなった。“二輪戦車の場所”の平原は真っ黒焦げに砕けた岩で覆われ、平原を取り囲んでいた森はすべて、木の幹が残されて立っているだけだった。「やった！」とニヌルタは自分の“黒い神の鳥”から叫んだ。マルドゥクとナブがあればほど欲しがった管制塔は、彼らから永久に奪われた。

ネルガルはニヌルタに張り合おうと思い、エルラ、“全滅させる者”になってやろうという衝動に突き動かされた。“王のハイウェイ”を伝って、彼は 5 つの都市がある緑に囲まれた溪谷へ飛んだ。そこは、ナブが人々を寝返らせた場所であった。ネルガルは、ナブを籠の鳥のように押しつぶしてやるつもりだった。それら 5 つの都市に向けて、ネルガルは次々に“恐怖の武器”を送り込んだ。溪谷の都市は、炎と硫黄でメチャメチャになり、そこで生きていたものはすべて蒸気になった。凄まじい武器によって山々はぐらつき、海水を塞いでいた場所は門が壊れて開き、海水が溪谷へ流れ込み、溪谷は水で満たされた。都市の灰に水が注がれ、蒸気が天に立ち上った。「やった！」とネルガルは叫んだ。彼の心に、もはや復讐心は無かった。

*これまでの話の中では、ネルガルとマルドゥクの対立は表立っていないが、ネルガルはよほどマルドゥクのことを恨みに思っていたようである。“罪深い街”という表現が、それを端的に表している。これは、聖書の中で主が言われた次の言葉の原型である。

“ソドムとゴモラの罪は非常に重い、と訴える叫びが実に大きい。私は降って行き、彼らの行跡が、私に届いた叫びの通りかどうか見て確かめよう。”

この破壊的な任務を担ったのは、ニヌルタとネルガルだった。聖書では、2 人の御使いとして登場する。また、ネルガルがターゲットとした場所は、聖書ではソドムとゴモラを中心とする地域である。この部分の聖書の記述は、次のようになっている。

“シニアルの王アムラフェル、エラサル王アルヨク、エラム王ケドルラオメル、ゴイムの王ティドアルが、ソドムの王ベラ、ゴモラの王ビルシャ、アドマの王シンアブ、ツェボイムの王シェムエベル、ベラ、すなわちツォアル王と戦ったとき、これら 5 人の王は皆、シディムの谷、すなわち塩の海で同盟を結んだ。彼らは 12 年間ケドルラオメルに支配されていたが、13 年目に背いたのである。

(中略) セイルの山地でフリ人を撃ち、荒れ野に近いエル・パランまで進ん

だ。(中略)そこで、ソドムの王、ゴモラの王、アドマの王、ツェボイムの王、ベラすなわちツォアルの王は兵を繰り出し、シディムの谷で彼らと戦おうと陣を敷いた。(中略)ソドムに住んでいたアブラムの甥ロトも、財産もろとも連れ去られた。アブラムがケドルラオメルとその味方の王たちを撃ち破って帰って来た時、ソドムの王はシャベの谷、すなわち王の谷まで彼を出迎えた。いと高き神の祭司であったサレムの王メルキゼデクも、パンとワインを持って来た。彼はアブラムを祝福して言った。「天地の造り主、いと高き神にアブラムは祝福されますように。いと高き神が讃えられますように」アブラムはすべての物の1/10を彼に贈った。

(中略)主は言われた。「ソドムとゴモラの罪は非常に重い、と訴える叫びが実に大きい。私は降って行き、彼らの行跡が、私に届いた叫びの通りかどうか見て確かめよう」(中略)2人の御使いが夕方ソドムに着いた時、ロトはソドムの門の所に座っていた。ロトは彼らを見ると、立ち上がって迎え、地にひれ伏して言った。「皆様方、どうぞ私の家に立ち寄り、足を洗ってお泊まり下さい。そして、明日の朝早く起きて出立なさって下さい」彼らは言った。「いや、結構です。私たちはこの広場で夜を過ごします」しかし、ロトが是非に、と勧めたので、彼らはロトの所に立ち寄ることにし、彼の家を訪ねた。(中略)「実は、私たちはこの町を滅ぼしに来たのです。大きな叫びが主の下に届いたので、主は、この町を滅ぼすために私たちを遣わされたのです」(中略)主はソドムとゴモラの上に天から、主の下から硫黄の火を降らせ、これらの町と低地一帯を、町の全住民、地の草木もろとも滅ぼした。ロトの妻は後ろを振り向いたので、塩の柱になった。アブラムはその朝早く起き、先に主と対面した場所へ行ってソドムとゴモラ、および低地一帯を見下ろすと、炉の煙のように地面から煙が立ち上っていた。”

5つの都市がある緑に囲まれた溪谷とは、ソドム、ゴモラ、アドマ、ツェボイム、ベラ(ツォアル)の王たちが同盟を結んだシディムの谷＝塩の海である。おそらく、地形からも名称からも、現在の死海付近であろう。そこは、ナブが人々を寝返らせた場所で、イシュクルの領地だった。だから、彼らが12年間支配されていたケドルラオメルとはイシュクルもしくはエンリルのこと、あるいは彼らが任命した王であり、ナブによって寝返ったことが、13年目に背いた、という表現になっている。

シディムの谷で5人の王が戦いのために陣を敷いたのは、マルドゥクがさせたことである。

いと高き神の祭司であったサレムの王メルキゼデクは、パンとワインを持って来てアブラムを祝福したが、サレムとはエルサレムのことで、ウツが司令官だった。つまり、サレムの王メルキゼデクとは、太陽神ウツあるいは彼が任命した王のことである。ここでも、イエスの象徴である“パンとワインによる祝福”がウツに関連して登場している。

また、“ロトの妻は後ろを振り向いたので、塩の柱になった”という表現で、“塩の柱”とはヘブライ語で“ネツィブ・メラ”であり、対応する“塩”を意味するシュメール語は“ニ・ムル”であるが、この言葉には“蒸気”という

意味もあるから、これは“蒸気の柱”となり、“蒸気が天に立ち上った”ことを象徴していることになる。

このように、聖書の場面はかなりの創作が見られるが、それが起きたのは地球年で 1736 年、BC2024 年のことであった。

(13) 神々の誤算と大いなる惨禍

・自分たちがしでかした邪悪な仕事を見渡しなが、2 人の英雄は目の前の光景に困惑した。空はにわかにかき曇り、風が吹き始めた。黒い雲の中で渦巻きながら、“邪悪な風”が空から薄暗がりを運んできた。日が暮れると、水平線の太陽を、その薄暗がりが見え隠した。夜には、おぞましい光が暗がりの縁を取り巻き、月は昇ってくる途中で姿を消した。次の朝になると、西から、“上の方の海”から暴風が吹き始めた。それは、暗褐色の雲を東へと導き、入植地の方へと広がって行った。その雲が到達した場所は、生きているものすべてに情け容赦ない死をもたらした。“容赦しない溪谷”から、閃光によって引き起こされた死が、シュメールへと運ばれてきた。

ニムルタとネルガルは、エンリルとエンキに警告を発した。「止められない“邪悪な風”が、すべてに死を運んでいます！」エンリルとエンキは、その警報をシュメールの「神々」に伝えた。「逃げろ！逃げるんだ！人々を分散させろ！身を隠させよ！」「神々」は自分たちの都から逃げた。怯えた鳥のように、彼らは自分たちの巣から逃げ出した。

国中の人々が“邪悪な風”の手中に落ちた。逃げても無駄だった。死はひっそりと、幽霊のように、田畑や街を襲った。一番高い壁も、一番厚い壁も、洪水の水のように通り抜けていった。どんな扉もそれを締め出すことができず、どんな錠も撥ね返すことができなかった。扉に鍵をかけて家に隠れていた人は、ハエのように殺された。通りに逃げた人は、道の上に死体となって積み重なった。咳と痰が肺を塞ぎ、口は唾と泡で一杯になった。“邪悪な風”は目に見えず、人々を包み込むと、彼らの口は血で溢れた。“邪悪な風”はゆっくりと吹きつけながら、西から東へと、平野や山地を移動していった。後には死者と死に行く者が残され、生きていたものはすべて、人も牛も同じように犠牲になった。水は毒に犯され、田畑はすべて植物が枯れた。

南はエリドゥから北はシッパールまで、“邪悪な風”は国を打ちのめした。バビリより南の国々はすべて“邪悪な風”に飲み込まれ、第 2 の地域の中心部もかすめた。しかし、マルドゥクが最高権力を宣言したバビリは、“邪悪な風”を免れた。

*核により撒き散らされた放射能雲がシュメールに到達することを、アヌンナキは予測できなかった。エジプトも汚染された。それが、あらゆるものに死をもたらした。しかし、マルドゥクが権力を主張したバビリ＝バビロンは、災害を免れたのである。

古代に核兵器が使われたということは、にわかには信じがたいが、他のシュメールの粘土板やメソポタミアの古文書にも、核兵器としか思えないような記

述がある。

“ネルガルは海に溝を掘り、全体を 2 つに分割した 海に棲むワニさえも滅ぼされた 火をもって動物を焼きつくし、すべての植物を灰に変えた”

“ニヌルタはいと高き山へと向かった 比類なき 7 つの恐怖の兵器がニヌルタに続く 英雄はいと高き山の前に立ち、腕を大きく振り上げ、山は滅ぼされたいと高き山の傍らの平地を英雄は滅ぼした”

“7 つの恐怖の武器が放たれるや 目も眩む閃光が四方へ飛散し すべてのものが焼き尽くされた 閃光は災いの雲を生み出した 災いの雲は空へと立ち上る”

“ほとんど呼吸できぬ者たち 災いの風に襲われた者に明日は無い 口から血を吹き 血の中に転げ回る 災いの風に襲われて蒼白となった顔”

“7 つの恐怖の武器”に関して、ここでも同じような記述が見られる。海を二分割し、山と平地も一瞬にして滅ぼし、目も眩む閃光を発すると同時にすべてのものを焼き尽くし、閃光は災いの雲を発生させ、災いの雲が原因となる災いの風に襲われると血を吹いてのたうち回り、死ぬ以外にないのは、やはり核兵器以外に考えられない。通常の強力な爆弾が炸裂しても、災いの雲が立ち上ったり、すべてのものを焼き尽くしたり、災いの風が発生することはないし、化学兵器でもすべてのものを焼き尽くすことはない。

つまり、古代メソポタミアで実際に核兵器が炸裂したのであり、その具体的な描写が、聖書に描かれているソドムとゴモラの様子でもある。

あるいは、これは未来の人類に起こるべき“予型、預言”であると見なす説もある。しかし物理的に、次のような調査が行われている。

A：死海周辺の放射能 (<http://kobe.cool.ne.jp/solhijil/chosamc.htm> 参照。)

1920 年代、ヴァチカンが死海周辺に派遣した発掘調査隊によると、動物の生殖能力を失わせる程の残留放射能が検出されたらしい。(具体的な数値データは無いので、信憑性については疑問が残る。)

B：シナイ半島の痕跡 (<http://stver.hp.infoseek.co.jp/xx2/x004.htm> 参照。)

シナイ半島には、その大きさ故、宇宙からしか観測できない“傷跡”が残されている。その“傷跡”から北に向かって広大な平野が開けているが、地平線上にそそり立つ山々と平野の黒い土壌が、くっきりとしたコントラストを成している。シナイ半島の表土は白い石灰岩と赤い砂岩で構成されているから、黒い土壌は形成されようがない。

この“傷跡”に残る黒い小石はテクタイトである。この場所に於けるテクタイトは黒曜石に似たガラスであり、その生成過程については何年もの間、科学者によって議論されているが、どのようにして生成されたかは、まだ良く解っていない。しかし、高温（1500℃以上）で溶けた砂や石が急激に冷えてできたことだけは確かである。

最も一般的なのは“隕石説”であり、巨大隕石の衝突によって蒸発気化した地表の石や砂などが、上空で急冷して固まったガラスであると考えられている。その代表例が、恐竜が絶滅した 6500 万年前に形成された地層（K-T 境界層）である。この地層には、地表にはほとんど存在しないが、隕石に多く含まれるイリジウムが高濃度で含まれているので、巨大隕石の地球衝突による恐竜絶滅説の証拠とされている。そして、隕石衝突時に形成されたクレーターは、メキシコのユカタン半島先端の海底に実際に確認されており、チクチュルブ・クレーター（直径が 90 キロ以上）と命名された。そして、その地層には顕微鏡サイズの茶褐色系テクタイトが多く含まれており、巨大隕石の衝突によって蒸発気化した地表の石や砂などが、上空で急冷して固まって降り注いだことを物語っている。

しかし、恐竜を絶滅させるほどの巨大隕石の衝突時でさえ、顕微鏡サイズのテクタイトしか確認できないが、シナイ半島のものは肉眼で確認できるほどの大きさであり、色も異なる。肉眼で確認できるほどの大きさならば、恐竜を絶滅させるほどの巨大隕石を上回る超巨大隕石でなければならない。また、シナイ半島でテクタイトが採取される場所と、その地質学的な関係が無く、ストロンチウムや鉛の同位体比の分析値から、地表物質との差は認められない。そのため、超巨大隕石の衝突によってシナイ半島のテクタイトも生成したと考えることには難がある。

また、同じようなテクタイトは、謎の多いインダス文明のモヘンジョダロ遺跡にも見られる。そこは、現地の住人が“ガラスになった町”と恐れて近づかない場所であり、テクタイトが 800 メートル四方をびっしりと覆っている。テクタイトは隕石だけではなく、火山活動によっても生成するが、モヘンジョダロ遺跡のあるインダス川流域に於いて、あるいはメソポタミア一帯に於いても、大規模な火山活動の痕跡は確認されていない。テクタイトが見られる以上、放射能の雲がやって来ただけではなく、“恐怖の武器”も使われたのであろう。また、インドの二大叙事詩「マハーバーラタ」と「ラーマーヤナ」には、核兵器を示唆する極めて写実的な描写があり、とても空想で書いたものとは思えない。（マハーバーラタとラーマーヤナの詳細については、＜神々の真相 3＞で紹介する。）

このような風景が見られる他の場所は、唯一、地表で核実験が行われた場所（砂漠）である！ならば、メソポタミアを中心とした一帯で核兵器が炸裂した、と考えるのが最も辻褄が合う。そして、その原因は「神々」の権力闘争によるものだ、と。これ以外にも、同様の現象を描写していると思われるものがある。

★ヘシオドスの記述

BC8 世紀ギリシャの詩人ヘシオドスの「神統記」の中に以下のような記述がある。

“熱い蒸気がティターンを包み込み 巨大な炎が天を焦がす 雷火石の閃光は
神々の目を眩ませ 耐え難い光熱が混沌を覆い尽くし あたかも天と地とが溶

け合ったかのよう…”

これは、ゼウスが“雷火石”をオッサ山に投げつけたところの描写である。“ティターン”という言葉はギリシャ語では何の意味も無いが、シュメール語では“天空に住む者”を意味する。なお、ギリシャ神話も、シュメール神話の焼き直しに過ぎない。

17：第14のタブレットー新たな最高権力神の誕生ー人類へ残された預言

(1) 認められたマルドゥクの覇権

・“大いなる惨禍”の後、エンキとエンリルはこの大惨事を調査するために会った。エンキは、バビリが免れたことは神のお告げであることをエンリルに言った。「マルドゥクは最高権力を運命付けられていたのだ。バビリが免れたことが、その証拠だ！」「“万物の創造主”の御意思だったに違いない！」とエンリルは言った。そして、エンキにガルズの預言について明かした。「それを知っていたのなら、何故、“恐怖の武器”の使用を回避させなかったのだ」とエンキが聞いた。「いろいろなものを見すぎたのが原因だ。君が地球に来て以来、ミッションはいつも障害にぶち当たった。私たちは妨害を出し抜く方法を見つけた。例えば、我々の任務の最高の解決法だった地球人の創造のようなことが、望まない無数の紆余曲折の源泉でもあった。君が天体の周期を測って星座を割り当てた時、誰がそこに“運命”の手を予見できただろう。私たちが選んだ“宿命”と、曲げることのできない“運命”とを、誰が区別できただろうか。誰が間違った予言を口にし、誰が真実の預言を断言できるのか。それ故、私はガルズのことを胸の内にしまっておくことに決めたのだ…。彼は本当に“万物の創造主”の密使なのか、それとも、私たちの幻覚・幻影だったのか…。どんなことが起ころうと、起きるがままに任せよう、そう、私は自分に言い聞かせたのだ！」

エンキは頭を垂れて頷きながら、弟の言葉に耳を傾けた。「第1の地域は荒れ果て、第2の地域は混乱し、第3の地域は傷ついた。“二輪戦車の場所”はもう無い。それが、起こったことだ！」とエンキはエンリルに言った。「それが“万物の創造主”の御意思なら、それが我々の地球特命ミッションに残されたことなのだ。マルドゥクの野望によって種は蒔かれた。そこからどんな作物が生じようと、彼が刈り取れば良いのだ！」とエンリルはエンキに言うと、マルドゥクの勝利を認めた。「50の地位はニヌルタにやるつもりだったが、マルドゥクにくれてやろう。マルドゥクには、荒廃した第1の地域の覇権を宣言させよう。私とニヌルタだが、彼の行く手を塞ぐつもりは無い。私たちは海の向こうの土地へ旅立ち、ニビルのために金を入手するという特命ミッションを完了するよ！」とエンリルは言った。彼の言葉には、失意が感じられた。

*前項には記載されていなかったが、核攻撃により、第3の地域＝インダス文明も傷いたのである。

自らが選ぶことのできる“宿命”と、曲げることのできない“運命”の狭間で、アヌンナキは苦悩していたのである。

エンリルは、やむなくマルドゥクの権力を認めたが、“マルドゥクの野望によって種は蒔かれた。そこからどんな作物が生じようと、彼が刈り取れば良いのだ！”という意味深な言葉を残している。ならば、現在に至るヤハウエ、イエス、アッラーの神は、マルドゥクによる創作なのか？マルドゥクが“すべての神々に君臨する至高の存在”となったことは、メソポタミアの古文書では次のように記されている。

“神々はウルクから去った 神々はウルクを離れた 神々は山々に隠れ 神々は遠くの地へと逃れた…

天より地に降り来たる神々の王アヌ そして天と地の王エンリルは この地の運命を定める エンキの長子マルドゥクに 全人類に対する支配権を与える マルドゥクを、監視する神々の至高の存在とする バビロンにいと高き御名を与え 世界の中心となす そしてマルドゥクのために 永遠の王権を樹立する”

(2) 過去と未来

・「“恐怖の武器”を使わなかったら、別の事態になっていたでしょうか？」エンキは弟に食って掛かった。「ニビルに戻るなというガルズの言葉に、我々は従うべきだったのか？地球ミッションは、アヌンナキが反乱を起こした時に打ち切るべきだったのか？私は私のすることをして、君は君のすることをした。過去は、もう取り返せないのだ！」とエンリルが言い返した。「そこにも教えは隠されているのではないか？」エンキは自分自身とエンリルに問いかけた。「地球で起きたことは、ニビルで起きたことを映し出しているのではないか？過去の物語の中には、未来の輪郭が記されているのではないか…。人類は我々の姿に似せて創造された。我々が達成したことや失敗したことを、繰り返すのだろうか？」

エンリルは黙っていた。彼が立ち去ろうとすると、エンキは腕を差し出した。「兄弟として、共に異国の惑星での難問に立ち向かった同志として、肩を組もうじゃないか！」エンキはエンリルにそう言った。エンリルは兄の腕をしっかりと掴み、彼を抱きしめた。「また会えるかな、地球で、あるいはニビルで？」とエンキは尋ねた。「ガルズは、ニビルに行ったら死ぬと言っていたが、本当かな？」とエンリルは答えると、踵を返して立ち去った。

*過去の物語の中には未来の輪郭が記されており、人類はアヌンナキが達成したことや失敗したことを繰り返すのだろうか、とエンキは問うている。ならば、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の出現も、アヌンナキの権力移譲の流れを象徴していると考えられる。

ユダヤ教：エンキとエンリル、主にエンキが中心のアヌンナキ物語。

キリスト教：シュメールに人類初の文明が誕生し、人類の王が誕生した。王はウツの血統である。イエスは自らのことを“人の子”と言っている。

イスラム教：核戦争後のマルドゥクの時代到来。かつてラー＝マルドゥクの領地であったエジプトも、現在はアッラーを信仰している。では、アッラーはマルドゥクか？

なお、エンキの疑念は、人類が核兵器を使用したこと、遺伝子を操作してこれまでに無かった生物種を創ることができるようになったことにより、現実のものとなった。

(3) エピローグ

・エンキは 1 人、後に残された。一緒にいるのは、自分の心の中の思いだけだった。すべてがそうやって始まり、今までのところ、どう結末を迎えたのか、彼は座って思いを馳せた。

‘すべては“運命”だったのか、それとも、あれこれ決定したことによって形作られた“宿命”だったのか？天と地球が入れ子状の循環を規則正しく繰り返しているのなら、起こったことは、また発生するのだろうか？“過去”は“未来”なのか？地球人はアヌンナキを真似て、ニビルを追体験するのだろうか？最初にやって来た彼が、最後に去っていく彼となるのだろうか？’

次から次へと思いが湧き上がる中、エンキは決断を下した。ニビルから始まり、地球での今日までのあらゆる出来事と決断を、記録に残すことを。“未来の世代への道標”となるように。後世の人々が、“運命によって指定された時”にこの記録を読み、“過去”を思い出し、“未来”を預言として理解してくれるように！“未来”が“過去”の審判者となるように！

14 番目のタブレット …主エンキの御言葉

偉大なる主エンキの口述から、一言も漏らさず、一言も付け加えず、ウドゥバルの息子、エリドゥの男、熟練筆記者のエンドゥブサルによって書き記された。
主エンキによって、私は長寿の恩恵を受けた。

*エンキは‘天と地球が入れ子状の循環を規則正しく繰り返しているのなら’と仮定しているが、おそらく、彼らの進んだ科学から見て、そのような傾向があるのではないかと推定しているのであろう。いや、むしろ、規則正しい循環ではなく、螺旋のように上昇する循環でなければ、進化はしないだろう。

最初にやって来た彼はアルファ、最後に去っていく彼はオメガであり、このタブレットの中ではエンキである。ならば、イエスは？

“未来の世代への道標”とは、“過去”を思い出すことにより“未来”を知る、ということである。そして、これは“預言”という形で残されることになった。本来ならば、このタブレットだけで良かったのだろう。しかし、マルドゥクが最高神となって以来、神話・伝承は曲解され、それに対する人類の理解も混乱していった。そこで、“忘れられた神”を“聖書”として登場させることにより、“過去”を思い出し、“未来”を知るための道標としたのではないかと。ヨハネ黙示録の最後には、次のように書かれている。

“この書物の預言の言葉を聞くすべての者に、私は証しする。これに付け加える者があれば、神はこの書物に書いてある災いをその者に加えられる。また、この預言の書の言葉から何か取り去る者があれば、神は、この書物に書いてある「生命の樹」と聖なる都から、その者が受ける分を取り除かれる。以上すべてを証しする方が言われる。「然り、私はすぐに来る」アーメン、主イエスよ、来て下さい。主イエスの恵みが、すべての者と共にあるように。”

これは、“偉大なる主エンキの口述から、一言も漏らさず、一言も付け加えず”ということが原型となっている。

エンキが見据えた遠い未来、我々はこの記録を目にすることとなった。そして、とても不可思議な国“日本”に隠された真相を知ったことにより、“神々の真相”を“思い出す”ことができた。

つまり、今こそ“運命によって指定された時”である。そして、今回はニビルが地球に接近するわけではないが、過去にニビルが接近した際、アヌンナキは太陽の黒点やフレアにより太陽の変動を観察しており、現在、太陽活動が次第に活発化している。それが原因となり、世界中で異常気象と大地震が発生している。そして、「神々」からの御神託は、前兆を探して天を観測することと混ぜ合わされたから、次に大きな変化が起きるのは、やはり天体の大きな変動が起きる時である。地球にとって最も身近で影響が大きい天体の変動は、太陽の変動に他ならない。そして、ニンギシュジッタの創ったマヤ文明のカレンダーは、現在の時代が2012年の冬至で終了し、そこから新たな時代が始まる。

従って、すべてが明らかとなる“終末の日”は近い！

18：まとめ

「〈地球の主〉エンキの失われた聖書～惑星ニビルから飛来せし神々の記録」に記された内容は、いずれも“真実である”ということを前提としている。では、何故、そう言えるのか。

これまでの解釈では資料が少なく、強引に解釈せざるを得ないものが多々見受けられた。しかし、このタブレットでは、例えばエジプト神話の人物関係など実にすっきりと説明できるし、特にシュメールとエジプトの関係が明快である。つまり、最初から最後まで筋が通っており、辻褄が合う。だから、このタブレットに書かれたことこそが真実であり、神話・伝承の類で強引な解釈が必要なものや疑問を感じるものは、間違っていると判断できる。この原因も、記載されているように、最終的に支配者となったマルドゥクが神話や伝承を都合の良いように改竄したことが原因である。彼の野望はこのタブレットで明らかになり、あらゆる災いの元となっている。そして、十分に“知恵”を働かせることができなかった人類の理解力の低さも、災いしている。

マルドゥクによる改竄はこれだけではない。古代バビロニアの天地創造神話も同様である。アッカド語で記載されたバビロニア神話の創世記「エヌマ・エリシュ」である。シュメール人がニビルと呼んでいた天体を、バビロニア人は

マルドゥクと呼んでいた。ニビルは“横切る天体”、マルドゥクは“輝く天体”という意味である。「エヌマ・エリシュ」の一部を紹介する。

“無の中に、原始のアプス（太陽）と、助けるムンム（水星）と、すべてを産んだティアマトがいた。（中略）神々は、それらの真ん中で形作られた。神ラーム（火星）と神ラハム（金星）が生まれた。彼らは名前と呼ばれた。彼らが年齢的に成長する前に、そして決められた大きさになる前に、神アンシャル（土星）と神キシサル（木星）が形作られた。それらに勝る大きさを日を延ばし、年を重ねて神アヌ（天王星）が彼らの息子となり、彼の先祖のライバルになった。アンシャルの長男アヌ。彼の姿形そっくりにナディンムド（エンキ、海王星）を生じさせた。（中略）運命の部屋、運命の場所で神は生まれた。神々の中で最も有能で最も賢い者。深い所の中心で、マルドゥク（ニビル）が創られた。（中略）ティアマトとマルドゥクはお互いに向かって進んだ。彼らは 1 つの戦いに押し進んだ。彼らは戦いのために接近した。（中略）彼（マルドゥク）はこうに彼女（ティアマト）を征服し、彼女の生命の息を彼が消した。（略）”

他にも、バビロニアの叙事詩では、シュメールの“天地創造の叙事詩”からニヌルタについてはすべて、エンリルについてはほとんどの内容が削除されており、改竄の跡が伺える。これも、エンリル系に対して恨みを抱いていたマルドゥクの仕業である。このように、神話・伝承は改竄されている可能性が極めて高いので、解釈に注意が必要である。

さて、今回のタブレットには、聖書に於ける「神」が誰なのか、というヒントが満載である。そこで、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教に於ける「神」を検討する。

まず、旧約の唯一絶対神ヤハウエは唯一絶対ではなく、何人もの「神々」が 1 つにまとめられたものである。代表例を挙げると、次のようになる。

- ・天地創造：“万物の創造主”。7 日間の天地創造はエンキの話に由来。
- ・人類創造：エンキ、ニンギシュジッダ、ニンフルサグ。
- ・アダムとイブの追放：エンリル。
- ・カ・インの追放：エンキ。
- ・ノアに箱舟を造るよう指示：エンキ。
- ・洪水後にノアを祝福：エンリル。
- ・バベルの塔に対する怒り：エンリル一族。
- ・アブラハムの導き：エンリル。
- ・ソドムとゴモラへの天罰：エンリルの指示によるニヌルタとネルガルの攻撃。

つまり、唯一絶対神ヤハウエは場面に応じて当てはまる「神」が異なる！カッパラーで言われているような、イエスの霊体、あるいは姿の見えないイエスというわけでは決してない。ただし、エンキがエンリルの法に縛られて以降、「主たる神＝エンキ、エンリル」は滅多に人類の前に姿を現さなくなったので、そ

れがこのような解釈へと変遷したのであろう。姿を現したのはもっぱらエンキとエンリル以外の「神々」であり、その場合、彼らは主に“主の御使い”や“天使”として表現されている。

また、序でエンキが「汝は偉大なる神と話した。汝は余を見てはいないが、汝は余に謁見していたのだ。従って、汝は祝福された。人々への、余の代弁者と汝はなるべし。汝は彼らが正しくあるよう戒めよ。そして、汝は彼らを慰めよ」と言っているのは、まさに“姿の見えない主”そのものであり、原型である。

では、カッバーラとは何なのか？それは、ある事象のある側面に対して、象徴あるいは象徴の重ね合わせで表現することである。だから、必ずしも真相を表しているわけではなく、場合によっては、矛盾が生じることもある。

次に、イエスよりも先にアッラーを見る。イエスはエルサレムの神殿で、偶像崇拝を厳しく罰した。しかし、イエス昇天後も、偶像崇拝はおさまるところか、エルサレムも含めて中東近辺に蔓延し、それが原因でイスラエル王国は滅びた。その後登場したのが、唯一絶対神アッラーである。アッラーとは、アラビア語で“Allah=Al ilah=神”の意味であるが、読みに注目すると“アル・ラー=神ラー”ともなり、ラーと言えばエジプトの太陽神ラーRaである。すなわち、マルドゥクのことである。

エジプトは太陽神ラーを中心とする多神教だったが、現在はアッラーを信じるイスラム教である。共に、同じ神“ラー”であるならば、一貫してラーを崇拝していることになり、矛盾は無い。

また、現在の中東もイスラム教である。中東での宗教の歴史と「神々」の権力委譲とを比較すると、17：(2)でも示したように、次のようになる。

- ・主にエンキ→エンリル系→マルドゥク？
- ・ヤハウエ→イエス→アッラー。

中東はエンキ→エンリル系→マルドゥクと支配権が移動し、その後、ユダヤ教→キリスト教→イスラム教と宗教が変遷した。つまり、エンキが言うように、過去の物語の中には未来の輪郭が記されており、歴史を繰り返すとしたら、イスラム教の主神アッラーはマルドゥクとなり、矛盾しない。

アッラーは如何にもヤハウエのようである。しかし、マルドゥクがすべての神の上に君臨したように、アッラーもすべての神の上に君臨する絶対神である。そして、イエスが「神」であることも「神の子」であることも明確に否定している。

よって、アッラーはマルドゥクである、と言える。日に何度も礼拝させたりするなど、如何にもマルドゥクらしい。

では、最も重要なイエスについてである。今回のタブレットの中には非常に重要なヒントが多く登場したものの、シュメールの「神々」の中の誰なのか、特定できていない。イエスは天照大神で太陽神であり、人類の光であり、蛇神

でもある。

太陽神はウツとマルドゥクであるが、マルドゥクは野望に満ちており、それが原因で核戦争が勃発した。また、様々な偶像崇拜の根源でもある。そうすると、マルドゥクの可能性は低いだろう。

蛇神という点では、“邪悪な蛇＝マルドゥク”ではなく、“良い蛇＝エンキ、ニンギシュジツダ”ということは、言うまでもない。

また、ウツと双子のイナンナにも、14：(6)の「イナンナの冥界下りと“復活”」で示したように、イエスの象徴が満載である。

このように、多くの示唆が見られるものの、決定的な証拠が無い。そのため、イエスの真相については、エジプト文明、インダス文明、偶像崇拜などについて検討してから、＜神々の真相 5＞で詳細に検討する。

参考著書：

- ・ゼカリア・シッチン著、「人類を創成した宇宙人」、徳間書店。
- ・ゼカリア・シッチン著、「神々との遭遇 上・下」、徳間書店。
- ・ゼカリア・シッチン著、「〈地球の主〉エンキの失われた聖書～惑星ニビルから飛来せし神々の記録」、徳間書店。

初版：2007 年 4 月

改定 7 版：2012 年 7 月

改定 8 版：2012 年 12 月

改訂 9 版：2013 年 2 月